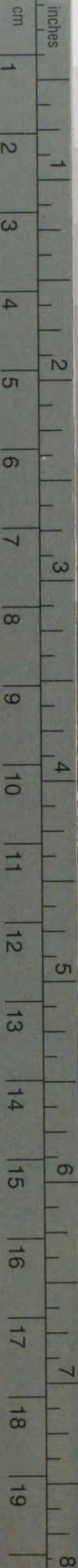


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



315
147

315-147



1200701773981



早稻田大學第二十回

文學部 科講義錄

國文學部 第七回

永井一孝

早稻田大學教授永井一孝述

國文學發達史



早稻田大學出版部蔵版

大正
4. 5. 11
製本

國文學發達史目次

第一編 太古の文學

- 第一章 總說……………一
- 第二章 歌謠……………三
- 第三章 祝詞……………七

第二編 奈良朝時代の文學

- 第一章 總說……………一二
- 第二章 國史の撰修……………一四
- 第三章 風土記……………一八
- 第四章 宣命……………二〇
- 第五章 歌謠の隆盛—柿本人麿……………二三
- 第六章 憶良と赤人……………二五
- 第七章 家持と萬葉集……………二七

第三編 平安時代の文學

目次

目次

第一章	總說	三二
第二章	漢文學の隆盛	三六
第三章	六歌仙	四一
第四章	神樂歌と催馬樂歌	四四
第五章	假名文學の發達	四六
第六章	『古今和歌集』の勅撰	四八
第七章	貫之と躬恒	五一
第八章	『後撰集』と『拾遺集』	五三
第九章	散文文學の發達	五七
第十章	紫式部と源氏物語	五九
第十一章	清少納言と枕草紙	六七
第十二章	源氏以後の小説	七二
第十三章	平安末期の漢文學	七五
第十四章	歴史物語	七六
第十五章	三代集以後の勅撰歌集	八一
第十六章	三代集以後の歌人	八三
第十七章	歌論の勃興	八七
第十八章	朗詠と今様	八八

第四編 鎌倉時代の文學

第一章	總說	九〇
第二章	新古今集の勅撰	九八
第三章	當時の歌人	一〇六
第四章	歌道の衰微	一一二
第五章	鴨長明と方丈記	一一八
第六章	紀行と日記	一二八
第七章	小説と軍紀物語	一三一
第八章	漢文學の衰微	一四四

第五編 室町時代の文學

第一章	總說	一四八
第二章	兼好と徒然草	一五六

第三章 和歌……………一六七

第四章 雜史と軍記物語……………一七四

第五章 連歌……………一八一

第六章 謠曲及び狂言……………一九四

第七章 御伽草紙……………二一八

第八章 漢文學……………二二二

第六編 江戸時代

第一章 總論……………二三一

第一期 啓蒙時代

第一章 時代の概観……………二四一

第二章 漢學の興起……………二四六

第三章 和歌革新の曙光……………二五五

第四章 貞門と談林の俳諧……………二六二

第五章 古淨瑠璃……………二六八

第六章 假名草子……………二七四

第二期 元祿時代

第一章 時代の概観……………二八一

第二章 漢學の隆盛……………二八六

第三章 和漢混和文……………二九六

第四章 和歌壇の廓清……………三〇五

第五章 蕉風の俳諧……………三一二

第六章 狂歌の發達……………三二二

第七章 浮瑠璃の活躍……………三二八

第八章 演劇の發展……………三三八

第九章 浮世草紙……………三四五

第三期 文運東漸時代

第一章 時代の概観……………三五四

第二章 詩文の勃興……………三六一

第三章 眞淵と蘆庵……………三七一

第四章 俳諧の中興……………三八

第五章	川柳の消長……………	三九五
第六章	狂歌狂文の隆盛……………	四〇二
第七章	草雙紙の發達……………	四一七
第八章	讀本の發生……………	四二八
第九章	淨瑠璃の起伏……………	四三九
第十章	東西の劇壇……………	四五〇
第四期	化政時代	
第一章	時代の概観……………	四五七
第二章	寛政異學の禁……………	四七三
第三章	詞章の推移……………	四八六
第四章	歌壇の鼎立……………	五〇一
第五章	國學の大成……………	五一六
第六章	飯盛と眞顔……………	五二七
第七章	俳壇の俗了……………	五三七
第八章	脚本の圓熟……………	五四六
第九章	讀本と馬琴……………	五五八
第十章	中本の二様式……………	五七二
第十一章	合卷物と種彦……………	五八四

第七編 明治時代

第一章	總 說……………	五九七
第一期	舊習破壊時代	
第二章	新文明の宣傳……………	六一二
第三章	舊文學の殘影……………	六二二
第四章	新文學の曙光……………	六三一
第二期	國會開設前後	
第五章	逍遙と四迷……………	六三八
第六章	東西思潮の交錯……………	六四七
第七章	硯友社派と露伴……………	六五六
第八章	寫實小説の反動……………	六六九
第九章	劇界の動搖……………	六七九

第十章	新體詩の新調……………	六八九
第三期	日清戦役後……………	
第十一章	日清戦役と文壇……………	六九七
第十二章	心理描寫の作風……………	七〇二
第十三章	俳句の革新……………	七二四
第十四章	和歌の革新……………	七二三
第十五章	新體詩の隆盛……………	七三一
第十六章	劇壇の消長……………	七四二
第十七章	浪漫的運動……………	七五三
第十八章	小説と實世間……………	七六一
第四期	日露戦役後……………	
第十九章	評論壇の活躍……………	七七一
第二十章	自然主義派の小説……………	七八一
第二十一章	非自然派の小説……………	七九五
第二十二章	自然主義の分化……………	八〇二
第二十三章	詩壇の活動……………	八一〇
第二十四章	劇壇の新氣運……………	八二七

國文學發達史目次終

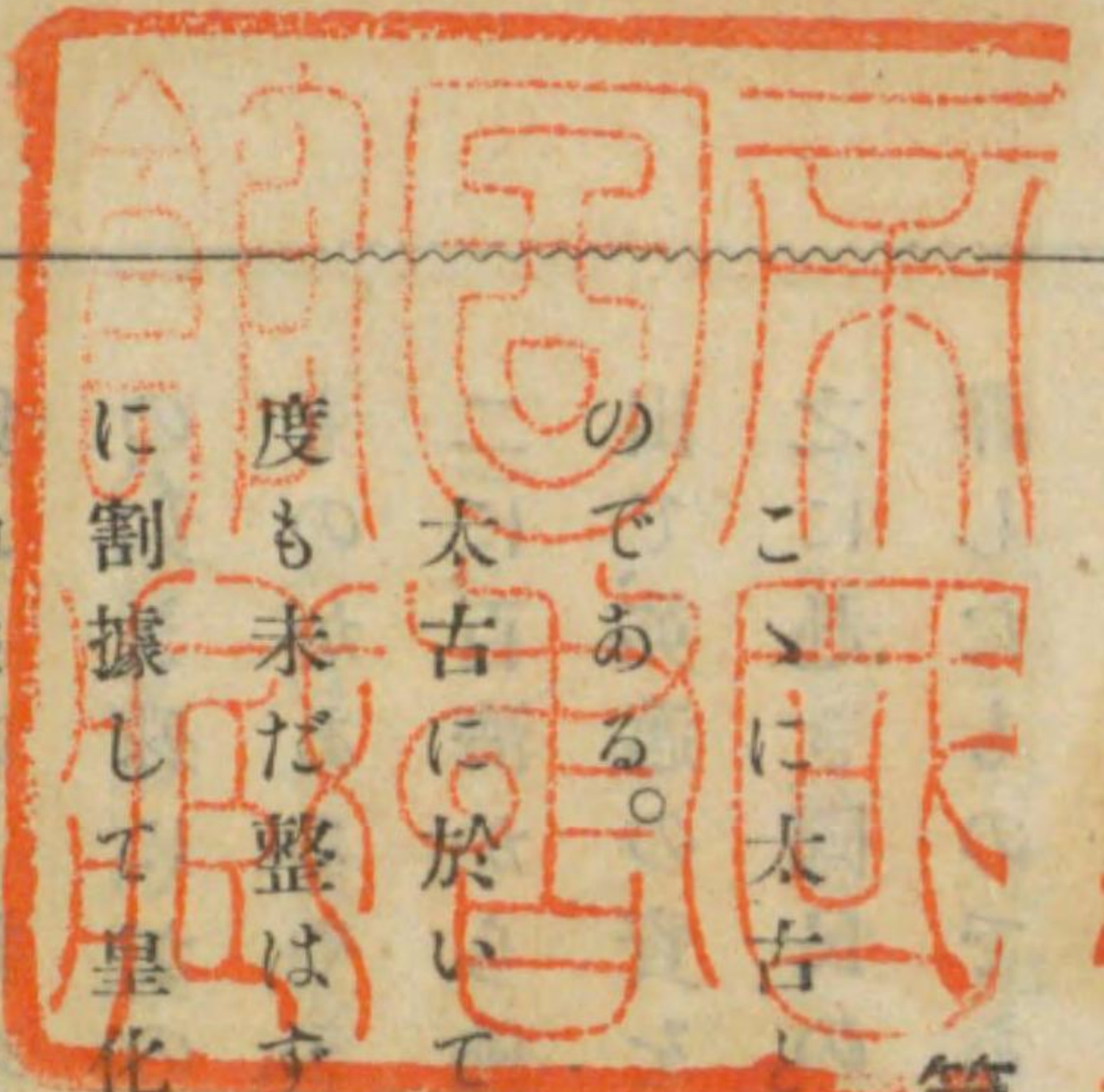
國文學發達史

國文學發達史

早稻田大學 教授 永井一孝 述

第一編 太古の文學

第一章 總說



こゝに太古といふのは、神代の太昔から大化革新(紀元一三〇九年)の頃までを指すのである。太古に於いては、神代は勿論、人皇の世となつても、萬事がなほ草創の際で、諸般の制度も未だ整はず、文化の中心地たるべき帝都すらも代々移動して定まらず、蠻族處々に割據して皇化に霑はざる地方も多かつた。されば、一般の國民狀態は、まことに簡樸幼稚なるもので、今日の人の到底想像も出来ない程であつた。當時我が國民が、大文學を有せなかつたことは、言ふまでもない。まして、この時代の初期には、文學を記載すべき文字も、全くなかつたのである。大文學はおろか、眞正の意義の文學は、或は無かつたといつてもよい、たゞかたばかりもあつたといふのは、寧ろ不思議なくらゐ

である。

されども、その中に三韓との交通もあり、文物の變遷も漸く認むべきものもあつたが、應神天皇の十五年(九四四)に、百濟の使者阿直岐及び博士王仁の來朝して漢文學を傳ふるあり、爾來歸化するものも次第に多く、ついでは支那との交通も開け、雄略天皇の如き殊にかの國の制度及び産業に注意せられたので、人文の發達も多少見るべきものがあるやうになつた。この勢を助長したものは、更に欽明天皇の十三年(一二二)に、百濟から佛教並に經論を傳へたことである。かくて、推古天皇の朝に聖德太子出で、英邁の資を以て萬機を攝政し、佛教興隆に盡力せられたので、天下は靡然として之に赴き、國民の思想も殆ど面目を一新した觀がある。蓋し、當時の佛書は何れも漢譯したものであつたので、その研究は常に漢學の研究と相待ち、漢學の進歩を助くる所があつたが、程なく遣隋使遣唐使または留學生の派遣となつて、親しくかの地と往來するにつけて、頻りにかの文物制度を輸入し、或は憲法の制定となり、或は制度の改革となり、或は寺院の建立となつて、つひに大化の革新となつた。かの地の文物制度工藝美術等、およそ模倣し得られる程のものは、皆模倣したのである。

この間、人智の發達につれて、文學の進歩も多少はあつたのである。されども、文學は、他の藝術又は制度の如くに、容易に模倣せられるものではないので、この時代の文學は、殆ど全く外國思想の影響を蒙らず、純日本的のもののみである。我が國民の本来の特性を發揮したもののみである。されば、此の外國思想の影響なき當時の文學は、我が國文學の源流を示すものとして、國文學史を研究するものゝ一顧を値するであらう。

當時の文學として今日に傳はるものは、唯『古事記』と『日本書紀』とに載つてゐる歌謠と、『延喜式』の八の卷に見えてゐる祝詞と、『台記』にある壽詞とがあるのみである。

第二章 歌謠

太古の歌謠は、『記』の傳ふるところによると、神代に於いて、早く速須佐之男命の「八雲立つ」の詠に始まる。ついで、下照姫瓊々杵命彦火々出見命、大國主命、沼河姫、須勢理姫等、いづれも多少の詠を遺してゐる。その中にも、大國主命(八千矛神)が越の沼河姫を慕ひて詠んだ歌、姫が之に答へた歌、さては大國主命の正妻須勢理姫の詠んだ歌の如きは、複雑なる人情を詠んだもので、形式も亦大きく、神代の歌としては實に驚くべき程に巧妙なるものである。されども、亦翻つて思ふと、これらが果して神代の詠

そのまゝであらうか、疑はざるを得ない。かの『古事記』といひ、『日本書紀』といひ、奈良時代に至つて成つたもので、比較的後世の作である。能く古傳説のまゝを寫したとはいへ、長の年月語りつぎ言ひつがれて來た間に、何等の錯誤も轉換も、絶えて無かつたとは思へない。橘守部といふ江戸時代の學者は、速須佐之男命の「八雲立つ」の詠すら、かく立派の歌に成つたのは、後世の改竄を経たのでは無からうかとさへ言うてゐる。まして、大國主命の詠の如きは、疑へば疑ふべき點は多々あるのである。されば是等の詠を以て、直に『記』『紀』の傳ふるとほりの作者時代辭句であるとするには、稍躊躇せざるを得ない。さりとて又全く後世の作であると斷言すべき材料をも持たぬのである。要は、是等の諸詠は、多少の錯誤と轉換とがあるとはいへ、大體に於いて太古の文學として、我が歌謠の起源をなすものであることは、疑ふべからざる事實である。

人皇の代と成つては、神武天皇が軍旅の際に詠まれた歌を始め、歴代の天皇皇后皇子大臣などの歌が少からず見える。就中、仁徳雄略二帝の御代などは、治績の大に擧つた時代であるから、盛んに歌を詠んでゐる。『記』『紀』に載する所の歌すべて百八十二首。無文時代の作としては、その多數なるに驚かざるを得ない。當時はやく歌垣と稱して、男女が集つて歌を唱和する風もあつて、それらの歌が『清寧紀』『武烈紀』などに見えてゐる。童謠として俗間に行はれた歌も、亦崇神天皇の朝から見えてゐる。『記』『紀』に傳はる歌は大抵身分の高い人の作であるが、なほ上下一般を通じて歌を詠んだことは察せられる。

太古の歌謠は、思想はすべて單純である。時代の簡樸なる状態と相應じて、當にかくあるべきである。種類をいへば、士氣を鼓舞する軍歌もあり、新築を祝する賀の歌もあり、追悼の意を表する挽歌もあり、諷刺の意を寓する童謠もある。最も多いのは戀歌である。戀歌は全體の過半を占めてゐる。何れも當座に思うたまゝ感じたまゝを、率直に作らず飾らず述べたに過ぎぬ。されば、戀歌の如きも、叙述あまりに赤裸裸にして肉感に傾き、もし今日の口語で譯し出したならば、猥褻いふに忍びないものもある。わが後世の國文學に特有なる花鳥風月を玩賞する歌は殆ど無い。日本武尊の歌、應神天皇の歌、または允恭雄略二帝の歌に、やゝ叙景の詠と見えるのがあれど、それすら純然たる叙景ではなく、景に寄せて懷を述べたるものである。自然に對して人事を偲び、人事につけて自然を想ふことは、わが國文學に常に見ることであるが、はやく既に太古の文學にその萌芽が認められる。もしそれ、『孝德紀』に夫婦の睦じき

さまを鴛鴦に譬へたる歌の見えるなどは、或は支那の思想の影響を受けたものではなからうか。

太古の歌謠に於いて最も見るべきは、その單純なる内容よりも、その複雑なる形式である。當時はいまだ何等の律格に拘束せられずして、思ふがまゝを述べたから、その最小單位なる一句は、短いのは僅に三音なるがあり、長いのは九音なるものもある。その外、四音六音八音から成つてゐるのも少くない。されども、その最も普通なる形は五音と七音とである。この五七の音に更に七音の一句を添へたのが、當時の歌として最も簡短なる形式である。後世これを片歌と稱する。次には五七の音を二個聯ねて更に七音の一句を添へたもの、所謂短歌の形で、次には、五七の音を三個以上聯ねて更に七音の一句を添へたもの、所謂長歌の形である。その外、稀に五七七を二個重ねた形もあり、或は終の七音の一句を省略せるものもあり、或は五七七が變じて五七七となつてゐるものもある。五七七を二個重ねたものを旋頭歌セドツカといふ。これらの中、最も多く見えるものは短歌である。短歌は全部百八十二首の中殆ど半数ほどである。歌謠の律格がいまだ十分に確定せざる中に、後世流行すべき三十一音の形式が、此の時代の歌の既に半分ほどまでもあつたことは、注意せねばならぬ。

さて、當時の歌の修辭上の技巧は、いかにあつたか。後世の和歌に用ひた枕辭や序詞懸詞の法も既に用ひられてゐる。就中盛んに用ひられたのは對句の法である。蓋し、對句は太古の國民の最も深く興味を感じた修辭法と見えて、神名にも伊弉諾命イザノミコ伊弉册命イザハシノミコを始め、澤山に見受けられる。對句と殆ど同じやうな趣向で、同音を疊みかけ繰り返していふことをも試みてゐる。その外に譬喩をも用ひてゐる。併し譬喩は主として卑近なる動植物などに譬へたのが多く、規模が甚だ小さい。

第三章 祝詞

わが國の太古に於いては、祭祀は即ち政治であつた。政事を訓讀してマツリゴトといふのも此の故である。蓋し、太古の國民は禍福は一切神祇の掌るところ、神祇を祭れば國家安寧に、國民幸福になると考へたものである。この故に、太古の國民は、四時祭祀を絶やすことなく、神前にもろゝの珍味をそなへ、幣帛をさゝげて、麗辭を呈して、神意を和げることにも力めた。この麗辭が即ち祝詞ウラヒコトである。祝詞は國初からあらねばならぬ。天照大神が天窟戸に隠れられた時に、天兒屋根命アマノミヤノネノミコが奏した祝詞を、大神が褒められて、この頃人さしはに申すといへども、未だかくいふ言のうるはしきはあ

らす」と宣はれたといふ。また、速須佐之男命が千座置戸を課せられた時にも、天兒屋根命が祝詞を讀んだとある。神武天皇の世となつては、天太玉命の裔で忌部氏の祖なる天富命が神璽をさへぎて殿祭の祝詞を奏し、天兒屋根命の裔で中臣氏の祖なる天種子命は神代の故事を奏して天罪國罪の事を解除したこともある。されど、これらの祝詞は、今は傳はつてゐない。

祝詞の今日傳はつてゐるものは、『延喜式』に見えてゐる二十七篇と、外に『台記』に載つてゐる中臣壽詞一篇とである。これらは直に太古の文辭そのまゝを傳へたものといへようか。祭祀の事は既に神代に始まつて、神武天皇崇神天皇の頃には殊に重要視せられたものであるから、はやく體裁を具へたものであつたらうとは思はれる。而して又、祭祀の如き儀禮は、何事も古式に則るのが我が昔からの習俗であるから、祭祀の辭たる祝詞も、出来るだけ古いのを襲用したことゝ信ずる。されども、今日傳はる祝詞壽詞が、載録せられるまでには、數多の年所を経たのである。自然の數としてその間に多少の變化ある事は免れまい。されば、今日傳はる祝詞壽詞が、太古の文辭そのまゝであるとする事は出来ない。その大部分は太古の製作で、それに幾部分の改作修訂の加はつたものとするのが至當であらう。但し、何れの部分が太古のもので、何れの部分が後世のものであるとすべきかは、明確に區別することは出来ない。そればかりではない、祝詞壽詞が今日傳はつてゐる如くに成形したのは何時のことか、それすら殆ど決定することが出来ないのである。されば、『延喜式』の祝詞と『台記』の壽詞を太古の文學に列することは、神代から祝詞といふものゝあつたこと、當時は語部と稱するものがあつて重要な事柄をば語り傳へたこと、儀禮はすべて古式による習俗のあつたこと、及び作品そのものゝ上に古言古意の認められることなどに據つてである。かの『記』『紀』の歌謠が太古の作品として取扱はれるのと大差ないのである。

祝詞は天皇の命令によつて神前に告白する詞である。國家の安寧、國民の幸福を求め、ることを目的とする。その中には、祈年祭の詞の五穀の豊穰を祈り、廣瀬大忌祭の詞の新穀を神に獻じて今年の豊穰を謝するものもある。「大殿祭」「御門祭」「鎮火祭」「道饗祭」「遷都」「崇神祭」等の如き、天皇の宮殿・玉體に恙なきを祈り、百官臣僚の無事を祈るものもある。「大祓詞」は諸王諸臣の過ち犯した罪穢を祓ひ清める祭詞で、これはた罪穢を去つて幸福の身とならうと祈るのである。太古の國民は心身に罪穢のあるを忌んで、清淨なるを貴んだのであつた。すべての災厄は、罪穢のある所に宿るものと考へた

からである。「出雲國造神壽詞」と「中臣壽詞」とは天皇の御代を祝する詞として、稍趣を異にせぬでもないが、詮するところは、又おなじく安寧を祝し幸福を壽ぐのである。かくて、祝詞壽詞に一貫したる思想としては、功利の一念あるを認めるのみである。吾人は祝詞を讀むと、つねに自然力にばかり依頼したる太古の國民の、衣食住にのみ心を勞したさまが想ひ出される。同時に又、その安寧幸福を求めたる狀の、いかにもいぢらしく子供らしいのが想ひうかべられる。要するに、祝詞は儀禮の莊重なるに似ず、求めるところの極めて幼稚な露骨な功利的なものであつたのである。

かくて、祝詞壽詞の文學的價値は文辭の上にあつて、思想の上ではない。思想は單純幼稚な功利に過ぎない。その文辭に至つては、流石に神前に告白する詞である、莊重にして森嚴而して、律格こそなけれども、一種の節調あるところは、正に准韻文式である。かの歌謠の主として男女間の戀愛を述べたる個人的抒情詩とは異なり、これは國民全體の意志感情を表することゝ、天地開闢の有様から説き起して、祖先の功業建國の由來を叙べ、更に現時に及ぼし、滔々として數百言に亘る。規模の大いことは、逆も歌謠などの同日に論すべきものではない。「新年祭」の詞「大祓の詞」出雲國造神賀詞の如きは、とりわけて雄大なるものである。併し、祝詞は何れも變化に乏しい、所謂千變一律の弊をば免れない。祝詞の修辭法を見るに、第一に目につくものは、譬喩の大いことである。例へば、「大祓の詞」の

「天の下四方の國に罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹きはなつこと
との如く、朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き拂ふことの如く、大津べに居る大船
小船舳とき放ち、舳とき放ちて、大海の原に押し放つことの如く、をちかたの繁木が
もとを燒鎌の敏鎌もてうち拂ふことの如く、遣れる罪はあらじと、祓ひたまひ清め
たまふ」

といふを見ても、その一斑を察すべきである。つぎには對句の法である。「谷蠖のさわたるきはみ」鹽沫のとままるかぎり」の如きは、到るところに見出されるが、又「朝の御霧」夕の御霧の如き、半ば同語をくり返して、一部分を對せしめる法もある。その外全くの繰返しもあれば、疊悟もあり、又枕辭をも用ひてゐる。たゞ懸詞だけは見えないうやうである。かくて、祝詞の修辭法は殆ど全く歌謠と懸隔するところがない。これ蓋し、神前に告白する詞として、大に聲調を整へる必要があると同時に、無文時代のこゝとて、口傳相承の必要もあつたからである。この祝詞の結構及び修辭法を應用したものが、「萬葉集」の長歌である。

第二編 奈良朝時代の文學

第一章 總說

こゝに奈良時代といふのは、大化革新の後より桓武天皇の延暦遷都(一四五四)の頃まで、約百四十年ばかりの間をさす。普通の歴史でいふ奈良時代よりは、年代の範圍が稍廣いのである。

大化の革新は、神武天皇以來一千餘年間の政體を一變して、中央集權の制を布き、八省百官位階の制、戶籍、班田、租庸調の法、多く唐風を模倣したので、漢學の講究はいよいよ必要となり、遣唐使留學生の派遣ますます頻繁に、天智天皇の時には學校を興され、天武天皇の朝には學制を定められて、京都に大學をおこし、諸國に國學を設けられた。その學科には算學もあり、書學もあり、律學もあり、音學もあり、天文、陰陽曆、醫等の學もあれど、主とするところは經學で、『周易』『尙書』『周禮』『儀禮』『禮記』『毛詩』『春秋左氏傳』の七經に『孝經』『論語』を授ける、これを明經道といふ。學生の數はやがて千を以て數へたとか。されば、漢文學の進歩は實にすばらしいものであつた。天智天皇の時には、その子大友皇子は早くもかの詩賦をさへ作られるといふほどであつたが、遂に元

正天皇の時には、『日本書紀』といふ漢文の國史も出來、孝謙天皇の朝には『懷風藻』といふ詩集も出來た。この頃、唐は玄宗皇帝の代で、文運最も隆盛の時、朝臣には張九齡、郭子儀の徒があり、文人には李白、杜甫、高適、岑參、王昌齡、孟浩然の輩があり、書には顏真卿、張旭、畫には王維、李龍眠等、芳名四方に溢れてゐた。されば、我が遣唐使、留學生等が此の偉觀を目撃し、若しくは私淑して歸朝するに當つては、我が文化の進歩を促したことは少くなかつたらう。この時代に於いて、和歌の内容形式ともに一大發展をなしたのも、やがて漢文學の間接直接の影響に外ならぬこと、信ずる。

佛教の隆盛も、亦この時代に於いては、旭日の觀を呈した。佛像の鑄造、寺院の建立日に月に増加し、聖武天皇の如きは、自ら受戒せられて、三寶の奴とさへ稱せられた。上に於いて既にかくの如くであるから、下に於いては更に之よりも甚しい。佛教の崇拜熱は正に頂點に達したともいふべきである。隨うて、佛教が我が文化に影響を與へた事は尋常でない。殊に建築、彫刻、繪畫等の有形美術の進歩を促したことは著しいもので、所謂天平式の美術をも世に残したのである。文學ひとり佛教の影響を受けざるわけがない。文學に及ぼす外國思想は、他の有形美術のそれの如く、著明ならずとはいへ、今やその痕跡があり、と認められるやうになつた。

この時代の文學としてまづ注意すべきは、國史の撰修である。外國文學の研究に忙しかつた國民も、今や自覺の境に入りつゝあるのである。つぎには『萬葉集』の撰修である。この集は主として當代の和歌を網羅して、空前絶後の偉觀を呈してゐる。世にこの時代を和歌時代といふのも、この集があるからである。歌聖として後人の追崇する柿本人麿も山部赤人も、共にこの集に見えたる歌人である。この外、諸國の産物傳説等を採録した風土記もあり、天皇の意志を庶民に宣布した宣命（センメイ）といふものもあつた。この時代の文學をとつて前代に比べると、量に於いて、質に於いて、はたその種類に於いて、非常の發達をなしたのである。

この時代は、なほいまだ國字の無かつた時代である。この時代の末頃か、または平安朝の初に、假名文字が整頓して一定の形體を成すに至つたが、もとよりこの時代の文學には何等の關係もない。この時代の文學は、『古事記』でも、『萬葉集』でも、皆何れも、漢字を借りて之を音韻的に用ひたのである。また、この時代の末に、印刷術の發明もあつたけれど、これも亦この時代の文學には關係がない。

第二章 國史の撰修

推古天皇の二十八年（二二八〇）に、聖德太子が蘇我馬子と共議して、天皇紀國紀臣連伴造國造百八十部ならびに公民等の本紀を録せしめられた。これが正しく我が國史撰修の嚆矢である。されども、この計畫は、翌年に太子が薨去せられたので完成に至らず、その稿本も亦蘇我蝦夷の滅びる時に焼失してしまつた。その後、天武天皇の御代に至り、天皇夙に國史撰修の叡慮があられて、諸家の賚すところの記録の正實に違ひ虚偽の加はること多きを嘆かせられ、その眞偽を正して世に傳へようと思召された。この時舍人の稗田阿禮（ヒエダアレイ）といふものが、博覽強記の評判が高かつた。天皇即ち阿禮を近く召されて、御口づから授けて、先代の舊辭を誦み習はしめられた。されども、この擧も天皇の崩御によつて中止となり、のちまた持統天皇も計畫されたが、讓位の事があつて果されなかつた。然るに、多年の畫策は元明天皇の御代に至つて、漸く成功を見ることゝなつた。すなはち此の天皇の御代に出來たものは、『古事記』で、次いで元正天皇の朝に、『日本書紀』が出來た。これから歷朝修史の事業は盛大に行はれるやうになつた。

『古事記』は三卷より成り、わが國の開闢より推古天皇の御代に至る歷代の事蹟を編年體に記録したもので、元明天皇の和銅五年（一三七二）に太安萬侶（オホノヤスヲ）に勅して撰ばしめ

た。これは勅撰國史の權輿で、先に天武天皇の口授によつて誦み習つた舊辭を、阿禮の語るに任せて、安萬侶が記録して奉つたのである。文體は大方をいへば漢文であるが、また純粹の漢文ではない、勿論祝詞の如く國語を直寫したのでもない、拙劣なる漢文のやうなもので、會話とか歌謠とか、その外にも適當の漢語の見つからないところ、をば、字音を假りて書いてゐる。その字音を以て書いてゐるところには、また必ず、その旨を注して斷つてゐるのである。撰者が序文に、

上古之時、言意並朴、敷文構句、於字即難。己因訓述者、詞不逮心、全以音連者、事趣更長。是以今、或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓錄。即辭理巨見、以注明意、况易解更非注。

といふところ、いかに忠實に古傳説をうつさうとしたか、推察せられる。行文何等の修飾を施してもないが、變化に富み、且つ素樸適強の風を帯びてゐる。就中、諸神の會話をうつしたところに、妙味が多い。

この書撰修の目的は、専ら古傳説のまゝを録するのにある、而して撰者の周到なる注意は、よくその目的を達してゐる。この書の價値は問はずとも明らかである。然るに、實際は之と反對に、近世に至るまでは、空しく高閣に束ねられて、顧るものがなかつた。これ或は強ちにこの書の價値の無視せられた譯でもあるまいが、この書の出來て八年目、元正天皇の養老四年（一三八〇）に、新に『日本書紀』といふ漢文の國史が撰修せられ、それが漢學の流行せる當時の嗜好に適して、爾來年々朝廷に於いて、その講筵をまでも開くといふやうな盛況から、疎外するに至つたのであらう。『書紀』は舍人親王等が勅命を奉じて撰進したもので、神代から持統天皇までの事歴を記して三十卷から成り、内容の豊富なることや、體裁の整つてゐることや、衆説を網羅してゐることなどは、逆も『古事記』の及ぶところではない。されども『書紀』は歌謠のほかは悉く華麗なる純粹の漢文で書いたが故に、恐らくは文飾に妨げられて傳説の眞を失つたものも多からう。大體の上からいふも、『書紀』の記すところは、あまりに精細に過ぎて、單に古傳説をのみ譯載したものとは思はれ難い節がある。年月干支を明細に記してゐるなどは、その一例である。その外、天地の開闢説を始め、支那の書物によつて記載したらうと思はれるところも少くない。『古事記』は之れと反對に、文章は粗末に、記事も散漫な風はあるが、傳説を直寫したのであるから、大に重んずべきものがあるのである。

然りとはいへども、『古事記』を以て全然正確なる歴史として信憑するのも、亦愚なる見

方である。流傳口誦千餘年を経過した時代に編述した歴史の、實際の史的事實と見做されぬことは辨明するまでもない。故に『古事記』は太古の歴史であると見るよりも、むしろ太古の國民が想像から産み出した神話もしくは傳説であるとするのが至當であらう。しかもなほ、吾人は『古事記』の神話傳説によつて、太古の國民の生活の狀態を知り、理想の純潔なるを知り、氣象の快活にして進取の念に厚きをも知る。よしや史學上の價値は或は乏しくとも、文學上の價値は優に千古に傳ふべきものがあると思ふ。

第三章 風土記

元明天皇の和銅六年(一三七三)五月、畿内並に七道の諸國に令を傳へて、郡郷の名に好字をつけさせ、その郡内に生ずる所の銀銅草木禽獸魚蟲等の色目を録し、土地の沃瘠、山川原野の名號の由來、又古老相傳の舊聞異事を史籍に載せて言上せしめた。この令に應じて、諸國から上つたものを風土記といふ。當時諸國から上つた風土記は許多あつたらうが、今では大方散佚して、残つてゐるのは、僅かに五部あるに過ぎぬ。

常陸播磨出雲肥前豊後の風土記である。この中『常陸風土記』『播磨風土記』の二書は、和銅に撰定したものと見える。『出雲風土記』は、卷末に天平五年(一三三三)二月三十日、之を勘へつくとあれば、『常陸風土記』などよりも二十年ばかり後の作である。肥前豊後の風土記も亦出雲のと同じころに出来たと見えて、その體裁がやゝ似てゐる。されど、その文體が出雲よりも少し後れて見えるのと、醍醐天皇の延長三年(一五八五)十二月、五畿七道の國司に命じて、風土記を選進せしめたこともあるので、その頃に出来たものであらうといふ説もある。『出雲風土記』だけは缺けてゐないが、外のは悉く缺本または抄録本である。これらの外に、『筑紫風土記』『土佐風土記』『備中風土記』『日向風土記』等の名稱は、『萬葉仙覺抄』『釋日本記』などに見えてゐるが、皆逸文のみである。また世に『日本國總風土記』といふのが、殘缺本若干冊あつて、ふるい奥書などのあるものもあるが、全く後人の偽作である。

風土記の文章は、各國別々の撰者によつて書かれたので、巧拙は勿論、體裁も一定しない。殆ど漢文體で出来てゐるものもあれば、比較的國文脈の多いものもあり、又全く國文で書いた部分もある。いはゞ、『古事記』風の拙劣なる文章である。内容も亦、元來が地誌の類として、物名などを列ねた部分が多いので、大體は無味乾燥、殆ど全く文學上の價値が無い。たゞ、古老の舊聞などを記載してある所だけは、流石に興味がある。文

章も多くは國文脈で、枕辭を用ひ、對句を設けなどして、修辭上の技巧も加はり、内容も傳説がかつたことが多い。就中、『出雲風土記』中の「國引」の一節などは、優に文學的作品として、價値あるものである。

當時、風土記の外に、氏文として、一家族の歴史ともいふべく祖先の勳業及び家系を記載したものがあつた。文章は、漢文の中に國語を混へて助辭を細書した變體、恰も「古事記」の文と後にいふ宣命書とを兼ねたやうなものである。氏文の中、今日傳はつてゐるのは「高橋氏文」といふのがあるのみである。これは、その祖先なる磐鹿六獵命の事歴を始め、その裔孫の世々膳夫の職に奉仕した由來、さては若狹國を領したことを書いてある。桓武天皇の延暦十一年、高橋安曇二氏が、神事に關して争のあつた時に奉つたもの、蓋し、祖先から傳つてゐる傳説又は舊記を搜つて、編纂したものであらう。

第四章 宣命

宣命とは、漢文で書いた詔勅に對して、國語で綴つた詔勅のことである。宣命の現存せるものは、特統天皇以後の作で、『續日本記』に見えてゐるものが始である。その以前の詔勅も、勿論この宣命といふものであつたらうとは思はれるが、『古事記』には記さず、『日本書記』のは漢文に譯されてゐるので、わからぬ。

宣命の文章は、上代から傳つた辭句をそのままに採用して、殆ど一定の成句となつたものもあらうし、或は多少取捨折衷して、その時々便宜に従つたものもあらう。幾篇の宣命も、形式は大體同一模型から出てゐるやうである。されど、その内容は、その時々必要に應じて書いたものであるから、異なることは勿論である。宣命の作者は何人であつたか、詳かでない。職務上からいふと、中務省の内記の職にあるものでも起草したものであらうか。世の降るにつれて、文章も次第に當初の風を失つて、漢語や佛語の交ること多く、思想もやゝ國體と矛盾するものが出來た。聖武天皇以後の作に殊にそれが多い。『日本後記』から以後の史籍に見えてゐる宣命に至つては、思想漸く純日本的でなく、語格も亦漢文めけるところ多く、たゞ古典を引けるところや、成句成語を用ひたあたり、古文の例を見るのみとなつた。

宣命の書き方は、漢字の正訓を用ひ、且つ讀み易からしめる爲に、助辭を細書した。例へば、靈龜元年（此乃天日嗣高御座之業食國天下之政乎朕爾授賜讓賜而教賜詔賜都良）の如し。かの『古事記』や風土記の書き方に比べると、餘程の進歩したものである。

これを世に宣命書といふ。

宣命は種々の點に於いて、祝詞と似てゐる。祝詞は天皇から神祇に告白する詞で、宣命は天皇から庶民に宣り聞かせる詞である。ともに謹嚴莊重なる中に、先方の相手を感動させる必要がある。辭句に修飾を施して、聲調を美妙ならしめる。それで宣命の文にも、對句疊語等の調子のよい語をも用ひてゐる。かの祝詞には、冒頭をまづ天孫降臨の事などから説き起すが、宣命も亦建國の由來などから筆をつける。祝詞は常に數段に分れて、段の末尾毎に「何々と宣る」とあるが、宣命にも「諸聞食宣」といふ語句が段毎に繰返されてゐる。祝詞も宣命も共に散文とはいひながら、叙事詩めいてゐるところがある、少くとも形式に於いて餘程類似の點が認められる。但し、祝詞はどちらかといへば詩に近く、宣命は純粹の散文に近い。なほ、宣命は之を宣傳するには、讀方が極めて嚴重で、聲音の明晰なるものが、曲節をつけて朗讀したといふことである。

宣命の中で最も名文と見られるのは、文武及び元明天皇の即位の詔、聖武天皇の立后の詔、光仁天皇が左大臣藤原の永平の薨去を弔はれた詔等である。何れも謹嚴流麗なる辭句の中に、慶屋に感なる眞情のあらはれたものでもある。

第五章 歌謠の隆盛—柿本人麿

太古から自然の化育に委ねられた歌謠も、時勢の進歩につれて、今や未曾有の大發展をなすに至つた。これまで見えなかつた思想も見え、今まで定まらなかつた形式も略定まつた。殊に持統天皇の頃に、絶代の歌人柿本人麿出で、ついで、山部赤人、山上憶良等の文豪が出づるに及んで、歌壇は正に隆盛の極に達した。これより先、天智天皇の朝に額田女王あり、天武天皇の御宇に、大津皇子などがあつて、稍發展の機運に先驅したかの觀はあるが、なほ奈良朝の歌壇は、人麿赤人等を待つて、始めて隆盛の域に入るのである。そも彼等は如何なる活動をなしたか。

柿本人麿の傳記は詳かでない、天智天皇の朝に生れて、持統文武の二朝に歷仕し、官位はさまで高からず、新田部高市の諸皇子に陪從して、近畿諸國を歴遊し、後年筑紫に使し、讃岐などへも渡り、終に石見に於いて、元明天皇の和銅年中に、四十八九の年齢で歿したやうである。その歌は、『萬葉集』に残つてゐるもの、長歌十七首、短歌五十九首、或は相思の情を寄せたるもの、或は哀悼の意を表したるもの、遊獵・懷古・羈旅・祝賀とさまざまの事を歌うてゐるが、いづれも雄渾雅醇、至誠の情が充ちてゐる。就中、人麿は長

歌が得意で、古今を通じて、能くその右に出づるものがない。かの高市皇子の薨去を哀悼せる歌の如きは、百四十九句を重ねた一大長篇で、實に雄渾壯大、變化に富み、内に悲哀の涙の迸るを見る。その外、「石見國から妻に別れて都に上る時の歌」、「亡妻を憶つて詠める歌」、「吉備津采女の死後に詠める歌」、「讃岐の狹岑島に死人を見てその妻子の悲に同情して詠める歌」の如き、題材の然らしめるところもあらうが、いづれも壯絶哀絶の感を起させるものである。蓋し、哀別の歌は人麿が得意中の最も得意なものであつた。されども亦、近江の荒都を過ぐる歌、「持統天皇吉野離宮に行幸せし時に詠める歌」の如きも、絶唱、決して哀別の歌に譲るものでない。

そも、人麿はこの雄渾なる思想と形式とをばいづこから得たかといふに、基くところは祝詞の思想と形式とである。祝詞はその性質上常に建國の由來から説いたが、かれの長歌も亦常に然する。かの「高市皇子の薨去を哀悼せる歌」でも、近江の荒都を過ぐる歌でもその冒頭を讀んで見ると、殆ど祝詞を讀むやうな心地がする。一箇人の死を悼むにしても、一名所を詠するにしても、これを國家或は皇室に關係させて叙べ來るので、自然思想が雄渾にもなり壯大にもなる。随つて形式も大きくなつたのである。人麿はこの考案をすべての長歌に應用してゐる。それで、題材の性質上、さかんに建國の由來も叙べられぬといふ場合などには、なほ能く祝詞の修辭法を襲用して、大きい譬喩などを使つて、雄渾壯大ならしめることに力めてゐる。尤も祝詞を應用するあまりには、ふさはしからぬところにも、建國の由來を説いた歌が無いでもない。要するに、人麿の長所は長歌で、思想雄大にして變化に富み、格調のうるはしいところにある。人麿以後の歌の形式の大きくなつたのも、一には人麿の感化である。人麿出で、わが歌界は一變したといふべきである。

第六章 憶良と赤人

人麿が玲瓏たる光彩を以て當代の歌壇を飾つたのと少しく後れて、又一異彩を添へたのが山上憶良と山部赤人とである。

憶良の傳も亦詳かでない。天平五年(一三九三)に、七十四歳で歿したといふ説がある。大寶元年(一三六一)に遣唐少録となり、後に從五位下伯耆守となり、又筑前守ともなつた。かれは頗る漢學に通じ、又佛教をも信じた。その残れる詩文について推測するに、少からず漢學並に佛教の思想に影響されてゐる。就中、漢學思想の影響はありありと作歌の上にも痕跡を留めてゐる。その「感情を反さしむる歌」は好箇の一例であ

る。中にも、憶良の特色としては、人事を題目として細かに人情を描いたことである。「貧窮問答歌」のおのれの境遇の稍満足なるに比べて、細民の貧苦に沈淪する状の悲惨なるを詠じたるなどは、到底他の歌人に見られない作である。詞形はいくらも粗笨であるが、適強なる趣があつて、且つ變化が多い。「好去好來歌」などの建國の由來から説き起すところは、これ又祝詞式で、或は人麿の歌に負ふところのあるものか。

山部赤人も傳記が詳かでない、神龜元年(一三八四)から天平八年(一三九六)までの歌が見えてゐるから、聖武天皇頃の人と見える。この人が人麿と等しく名高いことは、山柿と並び稱されたのでも分かる。その歌の長所は、自然美を詠じた歌の、清適莊高なるところにある。かの「不盡の山を望める歌」の如きは、世人一般に賞揚するもので、天地開闢から説き來るなどは、例の祝詞式の筆法を以て、莊高に、閑雅に、いかにも山そのものゝ氣高くうるはしいさまが想ひ出される。その外、「紀州玉津島の歌」、「播州印南野の歌」、「吉野離宮の歌」、「眞間娘子の墓の歌」の如き、いづれも名高い作である。されどなほ、赤人の歌は長歌よりも短歌の方に神韻のあるものが多い。不盡の詠でも、既に長歌よりもその反歌なる短歌の方に妙味がある。和歌の浦の短歌の如き、實にうまいものである。人麿の短歌とても、到底比較の價値はない。紀貫之は人麿赤人の二人を評して、人麿は赤人の上に立たむこと難く、赤人は人麿の下に立たむこと難し」というたが、かれは雄渾なる長歌を以てこれに優り、これは莊高なる短歌を以てこれに優るともいふべきものか。赤人も人麿も漢學思想の影響をうけることは少かつた。

赤人全盛の前後は、和歌の最も隆盛なる時期であつて、歌よみが頻りに出た。大伴安麻呂は文武天皇から元明天皇の頃に出で、人麿と稍々同時代である。その子の旅人は父に襲いで雄壯の調を唱へ、坂上郎女も亦女性ながら、雄々しい歌を詠んだ。この郎女は大伴宿奈麻呂に嫁して、坂上大嬢少嬢を生んだが、二女がまた母に劣らぬ歌よみで、情思纏綿、そゞろに人に動かす詠がある。釋滿誓及び三方沙彌は、又元明元正二帝の頃にあつて、盛んに老佛の思想を歌ひ、志貴皇子・長屋王も亦、その頃の名人である。笠金村・高橋蟲麿などは稍後れて出で、聖武天皇の頃には、橘諸兄・同奈良麿などが出で、その詠に誦すべきものもある。その後、旅人の子の家持が出づるに及んで、歌壇は更に光彩の燦然たるを覺える。

第七章 家持と萬葉集

家持は聖武天皇の天平年中から孝謙、淳仁、稱徳、光仁の五朝に歷事し、遂に中納言持節征東將軍を拜命し、從三位まで進んで、桓武天皇の延暦四年（一四四五）に薨じた人である。その公生涯がかくの如くであつたから、詠するところの歌が自然に武士的精神を發揮し、尙武の氣象に富むものが多い。「陸奥國から金を出せる詔書を賀せる歌」、「防人の哀別の情を陳ぶる歌」又は「族を論ずる歌」の如きは、實に一讀して懦夫をして立たしめるもの。敬神忠君崇祖の情をのべた歌の多いとは、奈良朝の歌人の特質とも見るべきであるが、家持ほどに正面から短刀直入に、これを歌うたものはない。詞形も稍々生硬に、内容もまた説明的で、多少詩趣に乏しい難はあるが、奈良朝の四大歌人の一人として、人鷹、憶良、赤人等と並べ稱せられるのも尤もである。まして、家持の歌は單に、武士的精神を詠んだものばかりではない、或は「亡妻を傷む歌」、「弟の長逝を哀傷する歌」の如き、情思の哀切なるものもあり、「布勢の水海」や「二上山を詠じた歌」の如き自然美を歌うて、典雅優麗なるものもあり、病に臥して無常を悲み、道を修めようとして作つた歌の如き、人生の無常を嘆ちて悲愴なるものもあつて、みなそれ／＼の趣を具へてゐる。家持は恰も先輩の長所をとり集めて大成でもしようとするかの如くである。されど、天分乏に伴はず、今一步で止むものか。その歌の傳はるものは天平寶字（一四

一九）のよてにて、薨去に至るまでには、なほ二十七年間の長日月があつたのに、その間の消息は杳として聞えない。

否、天平寶字三年以後、その消息の聞えないのは、實に家持の作家として生涯ばかりではない。奈良時代の歌界はこの年を限りとして渾沌暗黒の状態に入る。「古今集」の中の作者の知れぬ歌は、或はこの間に出來たのも交つてゐるかとも思はれるが、いづれをそれと定めがたい。そはともあれ、和歌はこの頃から漢學の講究に壓せられて衰微の域に進みつゝあつたことは否まれない。

『萬葉集』はこの奈良時代の歌を集めたものである。仁徳天皇の御宇から淳仁天皇の天平寶字に至る、約四百年間の歌を載録してはあるものゝ、主とするところは天武天皇以後九十年あまりのものである。歌の數は、長歌が二百六十二首、短歌が四千一百七十三首、旋頭歌が六十一首。卷の數は二十卷。作者は五百六十一人、その中には天皇皇后を始め、世捨人から地方の役民野人までも網羅してゐる。實に厯然たる一大歌集である。

この集は何人の撰んだのか、詳かでない。或は孝謙天皇の頃に、橘諸兄が諸卿大臣と議つて撰定したといひ、或は諸兄の撰定を果さないであつたを、後に大伴家持が増

修して完成したものだといひ、或は又家持一人の私撰であるともいふ。萬葉全體を通じて見ると、この集の書きざまとして、人名を記すに、大納言以上の人のみ姓を記して官名を書かないのが例であるに、家持の父の旅人のだけは、微臣の時から官名を書いてあるし、家持の母にかぎつて尊母と記した所がある。これに由つて考へると、第三説が真に近いではあるまいか。體裁の整つてゐないことや、所載の歌の玉石混淆の觀があるのを見れば、蓋し撰者が若年の頃から見聞くにつけて記し置いた歌を、最初だけは部類をも整へたが、後には只得るに任せて書附け置いたもので、いもあらう。この集の歌の思想形式の雄渾壯大なるもの、典雅莊重なるもの、多いことは、最早事新らしくいふまでもない。漢學及び佛教の思想の見える事も、憶良や滿沙彌の歌を見たもの、直に會得することであらう。題詠のふえたことや、名所を詠するとか、四季の景物を詠むとかいふことの見えて來たのも、支那の詩賦の影響をうけたものである。世の中を塵芥の如くに見るとか、酒徳を讃ずるとかいふのも、亦佛教や漢學の影響にちがひない。されど、全集を通じて流れてゐる思想は、漢學思想でもなく、勿論佛教思想でもなく、日本の思想である、國民的特性のよく表はれてゐることを忘れてはならぬ。

なほ、この集を見るもの、注意すべきは、卷の九に、水上浦島子を詠せる歌、事詩のあつたことである。卷の十四の東歌及び卷の十六の防人の歌は何れも地方の人が方言を以て詠じたもの、純樸の情に愛すべきところがある。また、卷の十六に見えた戲歌は後世の狂歌の祖とも見るべきものである。全集を通じて作者の知れざる歌に、すぐれたるもの、見えてゐる事も、この集を研究するもの、注意すべきことであらう。

本集の歌の書方は、漢字を以て記したもので、音訓並び用ひたる所謂萬葉假名である。その大體の例を擧げると、

- 一 假字 安米都智(天地) 作樂(櫻) 萬々(マニマニ)
- 二 正訓 天地(アメツチ) 姉妹(アネイモ)
- 三 假訓 蟻(有) 六倉(葎) 法(海苔)
- 四 義訓 玄黃(天地) 大夫(マストラヲ) 戀水(ナミダ)
- 五 戲書 山上復有山 (出) 蜂音(ブ) 馬聲(イ)
- 六 具書 何物(ナニ) 權合(カイ)
- 七 略書 山下(山下出風) 左右(左右手)

八 省盡 勻(韻) 吳公(蜈蚣)己(起)

の八種となるが、是等の中では、假訓と正訓とを用ひた所が最も多い。漢字を能く使ひこなしたといふ點から見ると、『古事記』や宣命の書方よりも遙に進歩の形跡はあるが、複雑なるだけに讀みにくいことは一と通りでない。それ故に、平安時代の初期に於いてすら殆ど讀み得ざるに至り、村上帝の天曆中つひに和歌所を宮中に設けて之が訓點に力を盡さしめ、爾來幾星霜の考覈を経て、龜山帝の文永年中に至つて、始めて纔に全部を讀みとほすことが出來たのである。

第三編 平安時代の文學

第一章 總 說

こゝに平安時代とは桓武天皇の平安奠都の頃より後鳥羽天皇の文治二年(一八四六)に源頼朝が幕府を鎌倉に開いた頃までをさす。その間は三十二代、約四百年ばかりである。

この時代の初期には、漢文學が獨り隆盛を極めて、國文學は却て屏息の姿であつたが、清和天皇の頃から次第に頭を擡げて、漢文學と並び行はれた。醍醐天皇以來は全く漢文學隆盛の反動で、歌文ともに大に發達し、つひに一條天皇の前後には隆盛の頂點に達した。その中にも、とりわけ、散文が未曾有の發達を爲して、これまでの文學といへば歌謠を主としたものが、こゝに至つて散文を主とするやうになつた。後世和文といふこと、この時代の散文をさすかの如く思はれるにつけても、その盛んであつたことが察せられるであらう。後三條天皇の頃からは又昔日の俤もなく、歌文ともにやゝ衰微の傾向をあらはすやうになつた。かくても、この時代は全體を通じていふと、國文學史中江戸時代を除いて、最も文學隆盛の時期であつたのである。そのそも、何が故に、この時代は文學が隆盛であつたか。地方には多少の争亂も在つたが、まづ大體から見ると、泰平で、殊に都人士は安逸放惰に耽つて泰平を謳歌する時代であつたこと、これ一つ。文學の産出地は山紫水明の平安城裡で、四季をりく、の眺望は何れも文學の資料を豊富ならしめたこと、これ一つ。わけても、歴代の天皇が意を文事に用ひて獎勵に力められたこと、これ一つ。假名文字が完成せられて思想の表示が容易になつたこと、これ一つ。

この時代の文學の盛衰が、藤原氏の勢力の消長と關係してゐたといふことは、頗る注意すべき事實である。嵯峨淳和の頃は藤原氏は未だ左程に政治上に權力を得て

るなかつた。然るに、文徳清和の頃から、藤原氏は外戚の權威を振ひ、朝廷は全く一家の如く一門次第に勢力を得てつひに御堂關白道長に至つて、その榮華は極點に達し、望月の缺けたることもなく、この世をば我がものと振舞つたのであるが、この時に即ち文學も全盛の域に達したのであつた。後三條天皇以後は藤原氏の勢力も次第に衰へ、武人が漸く權力を得ることゝなつて、文學も亦落莫の觀を呈した。これは何故か。當時文學に携はるほどの人は、何れも藤原氏を中心とする貴族であつたからである。平安時代の文學とはいふものゝ實は社會の一部分なる貴族の文學であつた。隨て平安城裡の文學で、郷土の文學ではなかつた。この時に當つて、文學の全盛期は後宮の婦女子の手に作り出されたことも、亦注意せねばならぬ。蓋し、この時代は、一面女子教育が盛んであつたと同時に、一面男子が猶漢學に囚はれて、假名文字を女文字として之が使用を屑とせなかつたので、事こゝに至つたのであらう。

天下既に泰平にして、文學の産出地が又山紫水明の平安城裡に限られ、これに携はるものは放逸遊惰の貴族、わけても後宮の婦女子であつたとすれば、當代の文學がいかなる特質を帯びてゐたかは、いはずとも察せられるであらう。曰はく艶麗、曰はく優美、曰はく浮華、曰はく纖弱、而して貴族的に、樂天的であつた。さはいへ、この時代の文學を艶麗優美浮華纖弱にならしめたのは、強ちに如上の理由ばかりではない。

漢文學及び佛教の影響もあり、國語そのものゝ影響もあつたのである。

漢文學の影響は儒學の方面よりも詩文の感化が著しかつた。當代の王孫公子が朝夕のこと草にした「長恨歌」「琵琶行」は如何に彼等の心を動かさせしぞ。空行く雁に思を馳せ、曉の鐘に涙を灑いだのも、皆かれらが學んだ感想である。殊に、彼等の理想の文章は、かの六朝唐初の所謂四六駢儷の浮華纖細を極めた活氣のないものであつたので、わが歌文のこれが爲にかの風に導かれたことは少くなかつた。

佛教が人心の上に與へた影響は更にこれよりも大きかつた。柔弱なる世の習ひとして、人々死を懼れ生を希ふ心強く、物忌方違等の迷信盛んであるにつれて、佛教の流行は盛に宿命因果の説を傳へ、無常迅速の厭世觀を鼓吹した。故に、疾病あるものは言ふに及ばず、冠婚葬祭には必ず僧侶巫祝を招いて加持祈禱をさせ、朝廷の公事は大半は法會供養、天災地變は勿論、征討防禦に至るまで、諸寺の僧侶をして修法念誦を行はせた。かくて柔弱なる人心は、ますます柔弱に傾いた。當代の文學的なるに拘はらず、ともすれば厭世的思想の流が裏面に潜めるかの如く見えるのも畢竟これが爲である。

言語は漢學佛教の流行につれて、外來語の混ざることが漸く多くなつたが、大抵はかの音韻を轉訛して我が固有の國語に融合した。而して、從來の國語は、當代となつて著しく伊音便宇音便に轉ずるもの多く、さなきだに優美なるものが一層軟弱流滑のものとなつた。これらの言語で綴られた歌文が、いかなる體の文學をなしたかは、最早論する必要はあるまい。

第二章 漢文學の隆盛

天武天皇の御宇學制を定めて以來、漢學の講究は日に月に盛大に向ひつゝあつたが、この時代に入るに及んでは、わけても嵯峨淳和の二帝など、銳意これが獎勵をつとめられたので、いよ／＼と隆盛の運に會し、學校の如きも、從來の官學の外、縉紳名流の私學校を設けて子弟を教養し、一門の榮達を計るものも少くなかつた。弘文院は和氣廣世が父清麿の遺志をついで建てたるもの、建設の年月は詳かではないが、私學校の嚆矢といはれてゐる。勸學院は天長三年藤原冬嗣が建て、綜藝種智院は同五年僧空海が建て、學館院は嘉祥三年嵯峨太皇太后が弟の橘氏公と議して建て、淳和院は淳和天皇の皇子恒貞親王が淳和上皇の仙洞御所を學校となしたるもの、建設の年

月は詳かでないが、これは元慶五年であらうといはれる。かくて弘仁の前後は漢文學のみ獨り榮えて、國文學は殆ど全く顧るもの無く、奈良朝に見た『萬葉』の盛時も、一場の夢と化してしまつた。されど、かれも一時、これも一時、かくばかり盛に設けられた私學校も、寛平以後となつては、建設者の勢力が失墜した爲に資力つゞかず、大方は大學寮の別曹となつて、只わづかにその名殘を歴史の上に止めることゝなつた。全體當時の學校では、如何なる學科を教へたか。學校そのものゝ目的が官吏の登用試験に應ずるものを養成するのであるから、登用試験科目であつた所の明經・明法・紀傳算の四道であつたことはいふまでもない。大寶の制度では明經・明法・秀才・進士・畫算の六道であつたのが、平安朝となつて斯く改まつたのである。紀傳は専門として『史記』『漢書』『後漢書』の三史を修めるのであるが、詩文に通ずる必要があるので、傍ら『文選』をも學んだ。然るに、この紀傳道は程なく廢れ、主賓處をかへて文章道となり、而して文學博士の待遇は遙に他の三道の博士にまさり、つひには大臣の榮職にまでも昇るものもあつたので、學者は翕然として之に赴き、盛に詩を賦し文を囑することとなつた。當時の學者の座右には、勿論三史あり、九經あり、『孝經』『論語』はたまた『老子』も『莊子』もあつて、時たま講せられたのであつたが、常に手を離さず繙かれたものは詩

文の集で、就中『文選』と『白氏文集』とは彼等の愛讀の書であつた。蓋し、『文選』は彼等の理想の文章で、『白氏文集』は彼等の理想の詩賦であつたのである。『白氏文集』の我國に渡つたのは、承和五年（一四九八）太宰小貳藤原岳守といふもの、唐人より元稹、白居易が集を得て獻じたのが始である。『文選』は渡來の年月が詳かでないが、『白氏文集』よりも早いことは勿論である。弘仁中既に藤原常嗣は大學にあつて、『文選』を暗誦し、文章生藤原諸成も亦その上帙を暗誦したといはれてゐる。いかに、『文選』が愛讀せられたかが察せられる。然るに、『白氏文集』の渡來後は、『文選』にもまして更に愛讀せられたといふのである。臺閣の上は、かくて唐の學風をさながらに移植したかの觀があつた。

この間書物の編述されたものも少くない。その主なるものをいへば、まづ勅撰の歴史としては、延暦十六年に菅原眞道（まこと）藤原繼繩（つぐな）等の奉つた『續日本紀』、承和七平に藤原緒嗣等の奉つた『日本後紀』、貞觀十一年に藤原良房春澄善繩等の奉つた『續日本後紀』、元慶二年に藤原基經菅原是善島田良臣等の奉つた『文德實錄』があつた。是等は延喜元年に藤原時平菅原道眞等の奉つた『三代實錄』と前代に出來た『日本書紀』とを併せて、『六國史』といはれるもの。何れも漢文で、漢史の體に倣つて、朝廷の年中行事、叙任、さては天變地災などを年月の順に記載したに過ぎぬが、史學上では必要の資料である。『六

國史』の記事を類別したものに『類聚國史』というて、寛平四年に、勅命によつて道眞の撰進したものもある。律令に關するものには、『弘仁格式』、『内裏式』、『令義解』、『貞觀格式』、『延喜格式』がある。雜著に、齋部廣成の『古語拾遺』、萬多親王の『新撰姓氏錄』、滋野貞主の『秘府略』など云ふものもあつた。されど、是等は歴史律令、さなくば實用を主とする書物で、文學の方に稍縁遠いものである。弘仁五六年の交小野岑守等の撰進した『凌雲新集』、弘仁九年（一四七八）に藤原多嗣等の撰進した『文章秀麗集』、天長四年（一四八七）に良岑安世等の撰進した『經國集』は純粹の詩文集で、何れも嵯峨天皇の勅命によつて、弘仁前後の作を集めたものである。『經國集』は、その中にも分類などが最も整つたもので、卷數も二十卷、作者も百七十八人から網羅してゐる。

學者や詩人の多かつたことは、前述の記事でも推測せられるであらう。就中、僧空海、清原夏野、小野篁、菅原清公、都良香、小野岑守、大江音人、島田忠臣、橘廣相、菅原道眞、紀長谷雄、大藏善行、三善清行、等が傑出したものである。空海（一四三三—一四九五）は詩文を評論したものに、『文鏡秘府論』といふものを著し、詩文を集めたものに、『性靈集』といふを殘してゐるが、嘗にその作に價值があるばかりではなく、文化を導いた功も大い。篁（二四六二—一五一二）には別段に集はないが、能文の評判は唐にまでも傳はつた人で

ある。その外、良香(二五〇四—一五三九)には『都氏文集』があり、忠臣には『田氏文集』があり、道真には『菅家文草』と『菅家後草』とがある。道真が平易なる語で、悲慘なる境遇を詠じたものなどは、特に世の同情を博して人口に膾炙し、つひに文學の神とまでも崇拜せられてゐるのである。

されども、更に翻つて當時の詩文を見るに、技巧もあり彩華もあつて、實に立派なものではあるが、細かで軽々しく、而して思想に何等の新しみが無い。或はいは、當時の詩文は『文選』『白氏文集』を理想として、その皮相を傳へたものであると。いかにも『文選』は、姬周以來の傑作を蒐めたもの、屈原、宋玉、長卿、淵明等の詩賦を始め、李斯、賈誼、陸士衡、孔明等の文章に至るまで、或は雄大、或は艶麗、或は激切、或は悲愴、すべての精華を収めた趣がある。弘仁前後の文章には、その外形を傳へたものはあるが、その精神を會得したものは見えない。いかにも白氏は唐朝有数の作家で、諷諭之詩長、於激閑適之詩長、於遺感傷之詩長、於巧律詩百言以上、長於贍、五字七字百言以下、長於情」と稱せられたもの。而して弘仁前後の詩人には、或はその二三を得たものは稀に見えぬでもないが、悉くその五長を兼備したものはない。外國文學はいかに熟練しても、所詮外國文學である、之を作るに當つては、文字の爲に思想を箝制せられ、措辭の爲に感情を檢

束せられたからであらう。要するに、當時の學者も詩人も、隋唐の燦然たる文華に酔うて、自己を省る違が無かつたのである。

第三章 六歌仙

嵯峨天皇の弘仁の前後は、漢文學のみが獨り隆盛を極めて、和歌は一時全く屏息の姿であつたが、文徳、清和の頃から反動の機運が現はれて、詩賦と並び行はれるやうになつた。酔うたものは必ず醒める時のある如く、外國文學を弄することの到底物にならぬことを覺つたのであらう。されども、久しく吹き荒んだ漢文學の勢力は、和歌の上にも至大の影響を與へて、輕佻浮華の風をなさしめた。國民の氣風既に一變して、かゝる風體を喜ぶやうになつたのである。奈良朝では歌人の中に武人などもあつて、和歌もおのづから素樸豪宕なるものもあつたが、今は遊惰淫逸なる貴族ばかりの翫弄物となつて、眞摯の情に乏しい。奈良朝に隆盛であつた長歌も、今は見るかげもない衰微の状態に陥つた。奈良朝では五七の調であつたものが、今は七五の調となつた。

當時、かゝる反動の機運につれて現はれた歌人は、決して少くはない。最もその名

のかくれぬものは、後世の所謂六歌仙である。一に僧正遍照、二に在原業平、三に小野小町、四に喜撰法師、五に文屋康秀、六に大伴黒主が即ちそれである。その中にも、在原業平が最もすぐれてゐる。否、業平は六歌仙の中の随一であるのみではない、平安朝を通じて有数の名手である。業平(一四八五—一五四〇)は平城天皇の皇子阿保親王の第五子で、兄の行平と共に在原の姓を賜り、仕官して左近衛權中將までは上つたが、藤氏專横の世の中とて榮達意の如くならず、かつ妻女の姻戚なる惟喬親王が文徳天皇の皇長子なるに拘はらず、藤原氏に疎外せられて洛北に閑居せるを見て同情の念禁すること能はず、常に皇室の式微を憂ふる心と藤原氏の跋扈を惡むの情とは、胸中に鬱積してゐたかのやうである。かれの歌は『伊勢物語』に大部分載つてゐるが、何れも真情を歌うたもの、實感を詠じたものである、情うちに動いて外にあらはれた聲である。優婉なるものあり、激切なるものあつて、殊に餘韻の深いものが多い。餘韻の深いことは業平の歌の長所で、又同時に短所でもある。吾人はその餘韻によつて無量の妙味を感ずるが、時としては言葉書なしにはその意味を解することが出来ない。紀貫之はいふ、業平の歌は、意あまりありて詞足らずと。修辭に注意せぬ結果かゝる憾を残したのか、溢れるばかりの詩情うちに激して到底短詩形には盛れきれなかつたのか、何れにしても頗る遺憾の次第である。往々浮華に流れ、纖巧に失したる趣のあるのは、免れがたい時代の反映であらう。

業平に次いで歌のうまいのは、小町と遍照とである。小町は美人の評判は世に高いが、閱歴は更に詳かでない。貫之は小町の歌を評して、よき女の惱める所あるに、似たり」というたが、いかにも纖弱妖艶なる所が女性らしい。奈良朝の女性の詠までが一般に率直雄大であつたに比べては、大なる相違といはねばならぬ。遍照(一四七五—一五五〇)は良岑安世の子で宗貞というて、仁明天皇に仕へて左近衛少將まで進んだが、天皇の崩御せられた時に、これを追悼するのあまりに僧となつた人である。壯年の頃は快活なる風流才子であつたといはれるが、その性質は遁世の後までも失せなかつたと見え、歌はあつさりとして清らかなるものが多く、時には滑稽なるものさへも見える。殊に僧侶であつただけに、浮世離れた佛教思想や、經文の語句を翻譯したやうなものを詠んでゐる、それでやゝ理窟ぼいところもあり、ぎごちないところもあるが、濃婉なる戀歌などばかりを詠ずるものとは異色があるのである。經文などの語句を譯するので、修辭の技巧的になつてゐるを免れぬ。六歌仙の中、喜撰法師、文

屋康秀、大伴黒主は一二首の外今日に傳はつてゐる歌がないので、果して歌仙たるかを知るに由がない。想ふに、かれら六人を歌仙というたのは、貫之が『古今集』の序にとり立て、評判したからのことで、深い研究から見立てたのではあるまい。喜撰や康秀や黒主よりも、在原行平、藤原敏行などの方がずつと勝れてゐるかと思ふ。喜撰には『和歌作式』というて、和歌の法式を説いたものがあるといふが、どうであらうか、少くとも今日傳つてゐるものは後人の僞作であらう。なほこの『和歌作式』をはじめ、藤原濱成の『歌經標式』、菅原道眞の『孫姬和歌式』、人麿の遺訓だというて石見國から出た『石見女式』といふ歌論の書、世に四家式といはれて傳はつてゐるが、何れも信じがたい。

第四章 神樂歌と催馬樂歌

平安朝の初期には、和歌の外に、神樂歌、催馬樂歌といふ謠ひものがあつた。これは從來の和歌が目に見る歌となつたので、奈良朝の末頃から謠はれる歌として始まつたものである。現今では神樂歌が五十首ばかり、催馬樂歌が六十首ばかり残つてゐる。神樂歌は神前に於いて奏する神樂の時に謠はれた歌で、二種に分かれる。一は採物歌といつて、神樂をなすとき、舞人が神樂戸などを執つて舞ふ時に謠ふ歌で、他の一は大前張、小前張といつて、採物歌の後に餘興として、うちとけて遊ぶ時に謠ふ歌である。やがて催馬樂歌である。

催馬樂歌は元來俗謠で、誰の作つたともなく行はれたものであるが、その中から選びとつたのが、神樂歌の大前張、小前張といふのであると見える。採物歌には殆ど文學上の價値はないが、前張にはなかく趣のあるものがある。随つて一般にいへば、神樂歌よりも催馬樂歌の方が面白いのである。催馬樂歌は當時も廣く行はれて、下流社會ばかりでなく、上流の人々も遊宴の席などにて謠つたものと見えて、當代の物語などにもその趣が見えてゐる。『源氏物語』の中に竹川、總角、東屋の如き名は、催馬樂の曲名を取つたものであらう。

神樂歌は普通の短歌の形式と同様に三十一音で、一句か二句かをくりかへしくりかへし謠つたものである。思想の如きも亦とり立て、いふべき特色をもつてゐない。催馬樂歌は普通の短歌とは異なつて、形式も極めて不規則で、内容も種々雑多なものである。人事をうたひ、世態を寫す。諧謔もあり、諷刺もあり、嘲弄もある、同じ意をうつすにしてからが、和歌などとは、その寫し方が異なる。元來俗謠なるからに、卑俗なるところはあるが、赤裸々に人情をうつしたところに、當代の俚があらはれてゐる

俗語や訛音などの入つてゐること、調の七五になつてゐることなども、注意すべき箇條であらう。

現今世に傳はつてゐる神樂・催馬樂歌は、圓融・花山の頃一條左大臣雅信の手で撰びなされたものである。清和天皇の貞觀の頃に選定し、更に醍醐天皇の延喜年中に改訂を加へ、雅信に至つて三たび修正せられたのである。

第五章 假名文字の發達

上古の國文學は、皆漢字をかりて書きあらはしたものである。神代に早く日文・天名地鎮・秀真などいふ文字があつたなどいふ説もあるが、眞偽はとにかく、それらの文字で記した文學は一もなく、皆漢字の音訓を併用したもののみである。それで、萬葉書、宣命書、或は『古事記』の歌謠神話などの書方を見るに至つたが、借音の煩雜と冗漫とは尋常一樣の話ではない。故に、文筆を要することの頻繁なるにつれて、これに従事するものが、何時となく、又誰となく、煩雜を避けんが爲に、漢字の點畫偏傍を省略して、一種の記號として用ひ始めた。今日でも筆記などする場合に、歴を厶、摩を广、國を口と書する如き類で、『萬葉集』などにも詩と句、樂松と吳公など、書いてゐるが、この便法を最極端まで進めたのが即ち片假名である。同一筆法で草書の漢字をくゞし、和げたのが、草假名一に平假名といふのである。何れも漸次に發達し、成形したものである。に片假名は吉備眞備(一三五三—一四三五)が作り、草假名は空海の作つたものであるといふが、信ぜられない。かの五十音圖は印度の悉曇に倣つて作れるもの、或は吉備かも知れぬが、悉曇は吉備の時代には未だ傳はらぬといふ説もあるから、これ又定めがたい。草假名四十七字を以て、『涅槃經』の諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂といふ四句の偈を意譯せる所謂「いろは歌」は、空海の作かも知れない。

かく平安朝の初には、片假名に加へて草假名まで出來たれど、漢文學の隆盛なる世の中とて、男子は皆漢文を作り、漢字をのみ文字と心得て假名文字を用ひるを屑とせなかつたから、これらの便利なる文字も女子の消息日記などの文に用ひられたのみで、未だ直に大なる文學を生ずるに至らなかつた。漢文學流行の反動期になつて、和歌の勃興につれて假名文字の使用も愈繁く、随つて假名で書いた散文學をも生むやうになつた。それは即ち『竹取物語』と『伊勢物語』とである。

この二つの物語は作者も分らず、又時代も分明せぬ。蓋し、六歌仙時代のものであらう。『竹取物語』は竹の中から生れいでた赫耶姫といふ一美人、公卿貴紳の娶らうと

するをも斥け、天皇の召にも應せないで、月界に歸り去るといふ傳奇體の小説である。材料は佛經や漢籍から得たものと見えるが、皇族や大臣などが、痴情に驅られて狂態をつくすさまは、さながら當代の世相を目前に見る心地がする。文章もまことに平淡簡樸。『伊勢物語』は一説に業平の作といはれてゐるが、業平の歌に昔の歌をもとりませて面白く書きなしたる歌物語、百二十餘條の瑣談から成つてゐる。その文章の簡潔なる、その歌の幽玄なる、よく及ぶものがない。猥雜讀むに堪へないところのあゝるのは惜しいことである。古來詞花言葉の愛すべきものとして、『伊勢』『古今』と併稱して珍重してゐる。

第六章 『古今和歌集』の勅撰

漢文學隆盛の反動は先づ和歌の復興を促し、清和天皇以來は和歌と漢文學と並び行はれ、遂には假名文をも出すに至つたが、宇多天皇以來遣唐使をも廢したので、漢文學の研究はやう／＼衰運に傾いた。時は恰も平安奠都を距る百餘年、都人士は泰平の春に酔へるが如く、詩歌管絃に日を送る有様であるから、文學は國民の自覺心と共に、いよ／＼時の花をかざしをへて、醍醐天皇の延喜五年（一五六五）『古今和歌集』二十卷の勅撰となつた。かの詩集『凌雲』『文華』『經國』等の後をついで、その位置を奪つたものともいふべく、文學史上正に一新紀元をなすものである。この『古今集』を和歌勅撰集の嚆矢として、室町時代の『新續古今和歌集』に至るまで、總て二十一代集を出すに至つた。撰者は紀貫之・凡河内躬恒・紀友則・壬生忠岑の四人。『萬葉集』以後の古歌及び當時の歌千首を選ぶ。卷數を二十卷としたのは、『萬葉集』に倣うたものと見えるが、流石に勅撰なるだけに、體裁の完備したさまは、かの集の比ではない。

『古今集』の歌は殆ど皆短歌で、只十九の卷の雜體といへる部門に、長歌が五首、旋頭歌が四首ある。俳諧歌・大歌・所御歌・神遊歌など、いふのがあるも、皆短歌の形式である。長歌を收めて雜體といふからに、既にその衰へたことが推測せられるではないか。况や、只わづかに五首、その五首とても、強ひて『萬葉集』のを眞似たままで、思想も平凡に聲調も亂雜、うち見たところこそ五七音の句を聯ねたやうなれど、實際は、五七もあり七五もあつて、甚だ拙い。あれほどまでに發達した長歌が、百年ばかりの間に、かく見るかげもないあはれな有様になつたのは、惜しいことではないか。

『古今集』に詠せられた材料はいかなるものであつたか。主要なる材料の花鳥風月と戀愛とであつたことは、四季六卷戀五卷あるのでも分かる。戀愛の歌は神代から

あり、花鳥風月の歌は『萬葉集』から見えてゐるとはいへ、いまだ數へるほどであつたのに、この集に至つてその大部分を占めるやうになつたのは、詩賦流行の結果、影響を蒙つたのである。社會の複雑なる状態や、人生の悲壯なる運命を詠ずることは、全く跡を絶つに至つた。思想が漢學佛敎の影響を受けてゐることは、言ふ迄もない。材料の範圍狭く、題目小く、剩へ柔弱なる縉紳宮女が、はかなき戀を詠じ、花鳥風月を愛で憐む歌の、女々しく纖弱であることは、又いふまでもなからう。『萬葉』の雄々しい手ぶりを見て、今この女々しい風を見ると、全く別天地に出た心持がする。争はれぬものは時代の反映である。

かくて、『古今集』は剛健雄大なる點に於いては、『萬葉集』に劣るけれど、姿詞の端麗に聲調の流暢なる點に於いては、かの集に勝るところが多い。わけても、聲調の流暢なることは、『古今集』の一大特色である。村田春海は、調のととのひたるさまをよく知らむと思は、『古今集』をよく味ふべし。『古今集』は調をむねとえらべるものなれば也」といつてゐるが、いかにもそのとほりである。されど、世に『古今集』を尊重する所は、單に聲調の流暢なる故ばかりではない、姿詞の端麗なるに加へて、よし思想は纖弱でも、後世の歌のやうな輕佻もなく、嬌飾もなく、實情のこもつてゐるところにあるのである。文質兼備はるとは昔からの定評であつた。

第六章 貫之と躬恒

『古今集』の歌人の數多ある中で、よくその時代を代表するに足る作者は紀貫之と凡河内躬恒とであらう。

貫之(一五四二—一六〇六)は昔から人麿以來の名人といはれてゐる。果して名人であつたらうか。かれの歌にはいかにも穩健な典雅な流麗なものが多い。されども又どことなく理に落ちて、詩趣に乏しいやうなところがないでもない。想ふに、かれは物事を直覺するといふよりも、考察する作家であつた。思想をも鍊れば、辭句をも鍛へる。かくして思想の穩健も辭句の典雅も格調の流麗も得たのであるが、それが一面また理窟に陥ることを免れしめなかつたのである。貫之の歌には、業平の歌のやうに、神韻の縹渺たるものもなく、情熱の人を動かすものも少い。これに比べると、躬恒(一五一九—一五六七)は實感を素直に一氣呵成的に抒べて、力のある歌が多い。そして、聲調も整ひ、情熱にも相應に富んでゐる。歌人として或は貫之にまさるものではあるまいか。吾人は貫之をさして人麿以來の歌人といふに躊躇する。されど

貫之の聲價はこれが爲に増減するものではない。かれの『古今集』編纂の事業と和歌に對する抱負とは、かれをして大ならしめるものである。

『古今集』が文學上に於ける價值如何を考察すれば、その編纂事業が如何ばかり貫之の聲價を大ならしめるものがあつたかは、些少の疑を存せぬことゝ思はれる。抑和歌に對する抱負とは何をいふか。當時の和歌壇は詩賦流行の後を承けて輕佻浮華に傾きつゝあつたに拘はらず、貫之は全く時流の外に立つて、花實兼ね備はるものとなさうとしたことである。かれはこの抱負を以て『古今集』の撰定に従ひ、又『古今集』の序をも書いてゐる。『古今集』の序は實にかれの抱負をのべたる一大歌論である。和歌の徳を擧げ、六義を説き、沿革を論じ、古人を評したる、何れか和歌の體を確立しようとするかれの抱負を説明したものでなからうぞ。こゝに於いてか、後世『古今集』が和歌の模範を垂るゝと同時に、序文は永く歌論の證典となつた。わが和歌壇は貫之を得て始めて新光明に接したといひつべきである。

貫之の文學上に於ける偉勳は、管に和歌の方面ばかりでは無い、傳ふべき功勞は散文の上にもあつた。かれは一般の學者が漢文をのみ綴る時に當つて、國文を以て『古今集』の序を書き、『土佐日記』を書いた。『古今集』の序はもとより未だかゝる種類の文章が我國に無かつた頃の作であるから、自然模範を漢文にとつて、四六駢體の體を學び、綸爛を極めたものである。それ故、非難をいへば、まだあくぬけのしない幼いとこそろが無いでもない。『土佐日記』はこれに比べると、流石に老熟の筆つきである。これは貫之が延長八年土佐守となつてかの地に赴き、承平四年任滿ちて京都へ歸るときに船路の紀行であるが、全篇に亡兒を追懷する悲哀の情をこめ、又風波をおそれ、海賊の難を氣遣ひながら、ところ／＼に滑稽諧謔の文を交へたる、いかにも平淡な輕妙な洒落な文章である。

第七章 『後撰集』と『拾遺集』

延喜を距る二十餘年、村上天皇の朝は、天曆の聖代といはれて、延喜と併せ稱せられる。承平・天慶の亂すでに平ぎて、世は再び太平の春に、學者文人頻りに出で、漢文學さへも復興の姿である。兼明親王(前中書王)大江朝綱、菅原文時らは、何れも詩文を以て當代に鳴つた學者達である。國文學また振ひ、和歌も亦大に行はれた。天曆五年(二六一二)大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城(トキキ)に勅して、昭陽舍(トキキ)に梨壺(トキキ)ともいふに於いて、『萬葉集』を研究させる序に、『古今集』以後の歌を選ばしめられた。これを

『後撰和歌集』といふ。その後約四十年を経て、一條天皇の長徳年中に『拾遺和歌集』が撰定せられた。『拾遺集』の撰者については、藤原公任とも花山上皇ともいはれて今日では定めがたいが、その後に出來た『後拾遺集』の序文などによつて見ると、花山上皇であつたさうと思はれる。これは『古今』後撰の二集に入らざる歌を拾ひ集めたものである。『古今』後撰『拾遺』これを世に三代集といふ。『後撰』も『拾遺』も歌の選擇が亂雜で、『後撰』には戀もしくは雜の部の歌と見えるものが四季の部に入つたり、作者をあやまつたりしてゐるところがあり、『拾遺』にも亦作者をまちがつたものや、『萬葉集』の歌を讀みちがつたのが入つてゐる。『後撰』も『拾遺』も範を『古今集』にとつて、かの集よりも著しく劣つてゐるものである。『後撰』は質まさりて文これに伴はず、眞率なる歌はあるが、典麗なるものがない。『拾遺』は文勝りて質これに伴はず、典麗なるものはあるが眞率なるものがない。就中『拾遺集』の歌は意味淺薄平明で餘韻に乏しい。

『後撰集』時代には非常に傑出した歌人は無かつた。大中臣能宣(一五八二—一六五二)は頗る機智に富み、その歌もまゝ情味の掬すべきものがないではないが、著想おほむね平凡、殆ど詩趣の認められないものさへある。清原元輔(一五六八—一六五〇)は詩才見るべく、格調清麗、情趣に富むものではあるが、到底貫之や躬恒に比肩すべきものではない。源順(一五七二—一六四二)は、學問は博く和漢に亘り、世に『竹取物語』『宇津保物語』『落窪物語』などの作者として擬せられる。この説勿論信を措くに足らぬが、既に有数の學者であつたことは察せられる。漢文は『扶桑集』『本朝文粹』『朝野群載』に散見してゐる。一篇の結構にはさまで見るべきものはないが、佳句麗語に富んだ文章が多い。殊に、その著『和名類聚鈔』十卷は文學的作品では無いけれど、我國辭書の起源をなすもので、千載不朽の作物である。和歌の方面に於いては既に知る如く『後撰』の撰者に列する。多藝多才といはねばならぬ。されども、順の本領は詩文であつて、なほ和歌にあるとは見えぬ。その著想のたまゝ、奇拔なるものはある、而も詩趣に乏しいものも少くない。加之、奇巧を衒ひ機智に誇る癖もあつて、纖細なるものもあるのである。その外、平兼盛、壬生忠見が如き、中務紀内侍、肥後の遊女、檜垣姫の如きも、多少清新なる所があるけれど、未だ一々とりあげて評すべき程のものではない。要するに、『後撰』時代は、只『古今』時代の盛時をうけついで、僅に餘喘を保つのみであつた。

『拾遺』時代の歌人では、先づ藤原公任(一六二七—一七〇一)に指を屈すべきであらう。

公任は累代攝關の嫡流で、而も志を得ず、正二位大納言に至り、致仕して北山長谷の山莊に隠れ、佛道の修行に世を送つた人である。世に四條大納言といふ。家集一卷の外に、歌論の書として『新撰髓腦』一卷、『和歌九品』歌集として『金玉集』三十六人撰、『和漢朗詠集』等の著書がある。『拾遺抄』十卷も亦公任の撰といはれて居る。公任は餘程多藝の人で、三舟の才があると稱せられ、また有職にも通じてゐた。その中でも、最も世に重せられたのは和歌の方面で、その一言は九鼎大呂の重きをなした。されど、公任の作品を見るに頗る疑はしいところがある。清新の風があるのでもなく、典雅の辭があるのでもない、平々凡々、只々古格を離れまい、『古今』の範を脱しまいとするのみで、何たる詩趣もない。併し、詩趣のないのも、古格を守つて平板なるのも、皆當時の歌壇の一般の有様であつた。これに由つて見ると、公任は正に時流を代表する作家で、その上に門地が高く、博識でもあり、宏才でもあるところから、世の尊信を博したのであらう。まして、その歌論が、又一世を代表するものであつたからであらう。當時、歌論の書としては、既に道濟の『十體和歌』能因の『歌枕』などがあつたが、公任の『髓腦』の如く完備したものではなかつた。その外、かの『三十六人撰』の如き、『和漢朗詠集』の如き、何れも後世に稱せられ、『拾遺抄』は『拾遺集』よりも持難された。公任の和歌に於ける功勞は、その作品の見るべきものがないので、没すべきではない。公任に比べては、曾禰好忠といふもの、性頑固ではあつたが、その歌は時流を脱して稍清新の趣があつた、而も内容の新奇なるものではなく、専ら形式の怪奇なるのであつた。もしそれ詩趣の上に眞摯の風の認められるものを求めるならば、寧ろ女流歌人と泉式部その人か、式部は多情多感の人で、操行に於いては缺點だらけであるが、臆面もなく、矯飾もなく、自然の感興をありのままに詠するのが、時流の只古格に泥み、浮華纖細を事とするに比べては、異數といふべきである。和泉式部、紫式部、赤染衛門、伊勢大輔、馬内侍は共に世に五歌仙といはれる。世は正に女流文學の全盛期に入つたのである。

第八章 散文學の發達

女流文學の全盛の期に先つて、散文學も亦漸次發展の運に會した。まづ、後撰和歌集の出來た頃に『大和物語』といふものが出來た。これは『伊勢物語』に似て、歌を主とした小話集めくものである。業平の子の滋春が書いたとか、花山院が作つたとかいふ説があるが、勿論信じがたい。昔の歌人は『伊勢』、『古今』、『大和』などというて、大層珍重がつたものではあるが、『伊勢』に比べて劣ること萬々、只僅に歌の見るべきものが稀

にあるのみである。『大和』に次いで『宇津保物語』これも何人の作か明かでない、源順などいふ説は當てにならぬ。仲忠といふ音楽に長じたる貴公子を男主人公とし、貴宮といふ艶麗なる佳人を女主人公として、當時の上流紳士が、この一佳人に思を寄せて競争するさまを描いたもので、『竹取物語』を模倣した趣がある。されど『竹取』の佳人は怪奇なる仙女、到底人間界のものでなく、これのは世の常の人間、つひに春宮の有となる。『宇津保』二篇讀み終はつて、卷を掩うて眼を閉ちると、平安城裡の縉紳らがおのれの職務を餘所にして、只放逸遊惰に日を送り、傾國の前には身命をも顧みなかつた狀が髣髴として心に映ずる。かの大作『源氏物語』も、その結構は或はこの物語に胚胎したかと思はれる點もある。文章の緻密婉曲なることは、勿論『源氏物語』には及ばないけれど、簡潔、古色の掬すべきものがある。世の人ひとり『源語』を稱へて、『宇津保』を口にするものが無いのは如何に。『落窪物語』またおなじ頃の作であらう、作者はまた知られない。これは當代にありがちなる繼子いちめのさまを仕組んだ寫實小説である。この外、當時出でたる小説も少くないが、何れも名のみ残つて傳はらない。かの『住吉物語』といふものゝ如き、現存するのは後人の僞作である。日記に藤原兼家の室、右大將道綱の母の書いた『蜻蛉日記』といふものがある。これは精細なる書き方ではあるが、後年思ひ出して筆を執つたものと見える。全體が自傳のやうな家庭日記である。平安時代の日記の中では最も大部のもので、又最も趣味の深いものである。和泉式部にも『和泉式部日記』といふものがあるが、文辭も整はず、内容にも醜い記事が多い。

第九章 紫式部と源氏物語

一條天皇の前後は、この時代でも、最も華美なる時期であつた。御堂關白道長が大政を掌握して、藤原氏の勢力は望月の虧けたることなく、一門宮廷に跋扈して、風流韵事にうき身を窶すといふ有様であるから、文藝の花はいよゝゝ時を得顔に咲き亂れた。分けても名流貴族は權力を宮中に植付けよう爲に、その女をば後宮に納れて皇室の外戚とならうと期し、女御更衣は又更に才色ある侍女を得て他に誇らうとする。こゝに於いてか、家門の榮達を希ふものは、その身分の程々につけて、女子を立派に教育して仕途を得させようとする。女子教育これが爲に盛大に、女流文學これが爲に全盛を極め、當代の文學はさながら後宮文學の如く、名媛才女彬々として出でた。

この時に當つて、最も名を成したものは誰か。いふまでも無く、紫式部と清少納言

とであつた。否、紫式部と清少納言とは雷に當時の第一流であるばかりではない、日本文學史中を通じての第一流である。

紫式部は藤原爲時といふものゝ女で、閱歴は詳かでない。一旦は同族の宣孝といふものゝ許に縁附いたが、二人の娘をもつて夫に死にわかれ、後に一條天皇の中宮彰子(上東門院)に仕へた。その著『源氏物語』はいつごろ書いたものか分らない、或は寡居の時かともいはれてゐる。

この物語は勿論小説で、全篇五十四帖から成つてゐるが、その結構からいふと、大體二段に分れる。正篇とも見るべき前の四十四帖は専ら光源氏の君と紫の上とを男女の主人公として、これにさまざまの人物と事件とを配合鹽梅し、續篇とも見るべき後の十帖は源氏の子の薫の大將を主人公とし、おなじ人の外孫匂の宮を客とし、宇治の八の宮の姫君たちをはじめ、數多の佳人才子を點出して居る。そこで、昔からこの十帖をば、かの四十四帖から引き離して、『宇治十帖』とも呼んでゐる。『宇治十帖』は紫式部の女の大貳三位の作だといふ説もあるが、無論とるに足らぬことである。

正篇なる四十四帖に見えたる人物は、その性情特質おほむね中庸を得て、善惡とも非常に極端なるものはない。稀に多少の缺點をもつてゐるものがあつても、大なる破綻を生ぜさせるに至らない。主人公光源氏は才學容貌ともにすぐれた皇子で、當時からいへば、理想の男子であらう。母は天皇の殊寵をうけたが、他の女御更衣に嫉まれて、つひに源氏の幼少の折に死んでしまつた。父の帝はその後に藤壺といふ女御を納れた。光源氏は、この女御がおのれの母に酷似せると聞き、なつかしく思つて親しむのあまりに、いつしか道ならぬ契をかさねた。その間に生れた子を、父の帝はおのれの子と思つて春宮に立たせ、光源氏はその後見となり、春宮の帝位に登るに及んでは六條院といはれて、太上天皇に准せられるやうになつた。光源氏がおのれの母とも見るべき藤壺の女御と道ならぬ契を結んだは、確かに生涯の失策で、自身でも空恐ろしい思をしてゐたが、その報か、やがておのれの寵する女三の宮が、いつしか柏木權大納言と通じて薫の大將を生んだ。光源氏には最初葵の上といふ本妻があつた。これは源氏よりも年上であるから喜ばれなかつたが、一男子を設けて後に、程なく六條宮の妃の嫉妬から生靈にとりつかれて、早く歿した。その後は、光源氏は本妻を持たなかつたが、その中に紫の上といふを得て、本妻同様に思つて非常に寵愛した。これは藤壺の姪で、藤壺によく似てゐるところから、藤壺を慕ふのあまりに愛するやうになつたのである。紫の上は才色すぐれてゐるうへに、溫良貞淑なる人で、光

源氏とよくつりあうた理想の婦人であつた。然るに、この人は光源氏に先だつて世を去つた。その後、光源氏は快々として樂まなかつたが、程なくその跡を追つて亡くなつてしまつた。正篇四十四帖、見來ると、かくの如くである。光源氏でふ理想の好男子が、十二分の同情と仰慕とを一身に集め、數多の女子の愛をうけ、帝位にこそは上らぬものゝ、天皇の父として太上天皇にまで准せられたといふ、概していへば極めて花やかな幸福な生涯をうつしたに過ぎない。至極平坦なる描寫である。時に多少の懊惱苦悶はあれど、それは叶はぬ戀をなげき、見ぬ戀にあくがれるくらゐ、社會の制裁、道義の衝突などから來る悲惨なるものではない。その外の人物事件でも皆そのとほりである。天地は壯麗なる平安城裡、人は多情多感なる王孫公子、歌舞管絃の洋洋たるうちに、華奢風流をつくし、遊惰放逸を事として、幸福圓滿なる一生を送るのであつた。

『宇治十帖』はこれと異なつて、最初から沈鬱荒涼なるもの。宇治の里に八の宮と云うて、零落した勢力のない古宮があつた。その宮に大君・中の君・浮舟と云ふ三人女がある。薰の大將は元來幽鬱なる性質の人で、俗塵を厭ふところから、はからず八の宮の境遇に同情し、その宮の許を訪れる。その中に、薰は大君を見初めて言ひよるが應じない。そこで中の君をと思ふが、それさへ既に中の君のものとなつた。薰はやう／＼その妹の浮舟の君を得た。然るに、中の君の好色なる心には、浮舟のうるはしい姿を見ては捨ておきがたくて、つひに又あざむいて不義の契を結んだ。浮舟の君は一時の情にひかれて、雙方に身をば任せはしたもので、心一つに身のふり方を定めかねて、つひに宇治川に入水して死なうとしたが、救はれて尼となつた。全篇いかにもあはれな事ばかりである。かの四十四帖の花やかな幸福の天地は、この十帖ではいたはしい境界、失戀の生涯と變つてゐる。『宇治十帖』は實に懊惱苦悶憂愁悲歎がこも／＼充滿してゐる。人物の性質とても、かの光源氏は稍圓滿なる美性を具へた理想的人物として描かれたのに、これのは偏僻なるものばかりで、薰の大將は沈みがちであはれつぽく、中の宮はあだ／＼しくて好色癖がある。大君・中の君・浮舟の君とても、かの紫の上とは異なつて、幾多の缺點をもつてゐる。これを正篇に比べると、非常の相違である。

そも／＼紫式部はいかなる趣意でかゝる物語を書いたか。これについては古來種々の説がある。或は勸善懲惡の爲だといひ、或は好色の訓戒であるといひ、或は佛教の妙旨を祖述するのだといひ、或は種々の戀をうつさうとしたのだともいふ。勸

善懲惡又は好色の訓戒などいふ説の非なることは論ずるまでもない、種々なる戀をうつさうとするのだといふのも、どうであらうか。此物語をきれいに分解して見たならば、或はいかにも各種の戀をうつしたに過ぎない。光源氏てふ身分のある容貌閑雅なる貴公子を假りて、上下に通ずる幾多の戀をうつしたものであらう。されども、吾人の見るところでは、當代の人々の最も感興をひくべき戀の物語をかりて、ある種の理想を寓したものとするのが至當の見解であらうかと思ふ。ある種の理想とはいふものゝ、勿論一派の人のいふが如く、直に佛教の妙旨を祖述しようとしたものとは思はぬ。當時代は前にもいふがごとく、皮相的とはいへ、佛教の隆盛なる世であつた。心なき身にも、八講の筵に隨喜の涙をそぐものもあつたのである。紫式部は夫宣孝に後れた人である、佛教にも特に心を寄せた人である。晝は務のいそがしさと人々の嬉々たるさまとに、心のさびしさをも忘れたらうが、孤燈かげ暗く、瀧口の足音も重げに聞える夜半、ひとり枕を欹て、往事を想ふ時などは、本來浮いた氣の人とも思はれぬかれの、何んで人生のはかなさを感じぬことがあらうぞ。かくてこの間の消息をうつさうとしたのが、この物語ではあるまいか。今を盛りの花の色

もやがて移らふかやある。盛者必衰會者定離、この「源氏物語」一部を通じて、惜める作者の人生觀ではあるまいか。紫の上の薨去といひ、光源氏の雲がくれといひ、天壽を全うしたものであれば、一篇の筋をたどりて考へると、作者の胸中のさびさきをほのめかしたと思はれぬ。されど、正篇四十四帖は、いまだなほ散りつゝもる木の葉の下をくゞり行く小川のひゞき、ともするとその音も絶えたかと思はれるが如きところもある。「宇治十帖」は一轉す。かれは樂天の裡に厭世をほのめかし、これは厭世の裡に一道の光明を捉へんとするもの。最初から厭世的の人物を捉へ來つて、不如意の人生を描くのも之が爲である。この故に、吾人はこの物語を以て、單に戀の物語とばかりすることは出来ぬのである。随つて又、純粹なる寫實小説とは認めない。人物も事件も、その材料をば當代の社會にかりてはあるが、なほ作者の胸中で醇化したものと思ふ。然るに、全篇の結構が整然として、人物の性格も事件の發展も不自然なるものなく、不必要なるものなく、一々活動してゐるところが、作者の手腕である。この物語を繙くものが、一讀再讀三讀と回を重ねて飽くことなく、却てますます興味を覺えるのも、これが爲であらう。

加之、この物語は文章として見るも、亦古今の大作とするに足る。國文のあらゆる形式、あらゆる修辭法も、おそらくこの物語の文章ほどに、よく使ひこなしたものは澤

山見ることは出来まい。その流麗溫柔なる趣はさながら平安城裡の名流貴族の悠揚として迫らざる態度を見る如く、その長きに過ぎはせぬかと思はれる章句さへ、この小説中の人物事件をうつすには、よくつりあうた心地がする。中にも、人物事件の背景として自然の風光を描きたるあたりは、描寫が一層ひきたつて、恰も一大活畫を展開したかの趣がある。

全篇もし強ひて難を求めらば、淫靡なる事件のあまりに露骨に描かれたのと、氣力のやゝ乏しいとにあらうか。而も二つながら時代の然らしめたるもの、この作者のみについて論すべきものではあるまい。

紫式部には『源氏物語』の外に、なほ『紫式部日記』といふ著書がある。この日記は紫式部が上東門院に宮仕をしたころの記録で、主として宮仕のさまをうつしてゐる。宮中の有様、人物の言語動作、衣服調度に至るまで、一々細かに描き出してゐるところに、式部の緻密なる觀察力がうかゞはれるが、かれ自身の人物風采も亦認められる。安藤年山はこの書によつて『紫家七論』といふ書を著はして、式部の學問性行を論じてゐる。とにかくに當代を研究する好資料でもあり、又紫式部を知らうとするものゝ必要なる参考書である。文章も優美艶麗、格別技巧を加へたとも見えぬに、所謂咳唾珠をなしたるものか。式部の歌を集めたものに『紫式部家集』といふものがあるが、『源氏物語』の出来ばえに比べて、遙に見劣りされるやうである。

第十章 清少納言と枕草紙

清少納言はかの歌人清原元輔の子で、幼少のをりの教育は明かでないが、祖先には漢學者もあり、父祖は有名なる歌人であつたから、相當に教育されたことは勿論であらう。中年の頃一條天皇の皇后定子に仕へて大に寵遇をうけた。その唯一の著書『枕草紙』は、その頃に書いたものと見える一篇の隨筆である。見たり聞いたりした世の出來事や、人の心の有様、さては四季の景物、自然の風光と、筆に任せて書きつらねてゐる。一部もとより斷簡零墨、何等の纏つた大思想のあるのではなけれど、當代の俗が髣髴として知られる中に、作者の人物が一層鮮かに見られる。

吾人が『源氏物語』をとほして見る紫式部は、女らしい女である、すべてが智的であるよりも遙に感情的な態度が認められる。想ふに紫式部はあらゆる事物に對して無限の同情を持ち、豊富にして穩健な感情を抱いて居つたに相違あるまい。されば吾人が、かの物語を読んで感ずるのは、作の内容に對する好惡批判の點ではなく、作に同

化される一種の柔かい氣分であり、優美哀愁の情緒である。然るに、『枕草紙』に見える清少納言は、全然これと反對なるものである。かれは理智を以て感情を覺醒した女である。かれは凡ての事物を批判的に冷靜なる態度を以て觀察する。こゝに於いてか、かれの作は紫式部の如く小説となつて現はれずして、一種評論的批判的な隨筆となつて現はれたのである。随つて清少納言の態度には、女性のつゝましげな奥ゆかしい點が乏しく、男性的な意氣が充ちてゐる。普通今までの女性が、社會的地位や男子の愛を失はんことを恐れて、言ふを憚つた事をも、忌憚なく率直に口にしてゐる。これ一つは清少納言が容貌のあまり美でなかつた爲に煩はされなかつたといふことにも原因するのであらうけれど、かれが『枕草紙』の中に、己が容貌の美醜を歎ずるやうな事などは一言も洩らさざるのみか、その他何等の愚痴泣言めいた事をも言つてゐないのは、明かにその性格の智的であり、男性的であつたことを證するものである。

『枕草紙』をとほして清少納言を見る人は、輕薄で高慢な女であるとか、才學だてをするとか、虚榮心が強いとか、街氣が充ちてゐるとか、よく非難の聲を放つ。いかにも、興に乗じて書き過ぎたところや、髻男をも手玉にとつて懸弄するところなどは、一面自畫自讚の毀を招くやうな點が無いでもないが、それとも女は萬事控目にすべきもの、絶對に従順なるべきもの、殊に男の前には一も二もなく頭の上らぬもの、不平を漏さぬものとして見るからの非難ではあるまいか。かの香爐峰の雪はと問はれて簾を捲いたのや、二月つごもり方、雨いみじう降りて徒然なるに御物忌に籠りて、さすがに物さびしき宵、頭中將が薄様にいと清げに、蘭省花時錦帳下と白樂天が詩の一句を書きつけて、末はいかにと、言ひ越したのに對して、盧山夜雨草庵中と、これが未知りがほに、たどくしき眞字まことに書きたらんも見苦しなど、思ひまはす程もなく、使の者が責め惑はせば、唯その奥に炭櫃すすびの消えた炭のあるので、『草の庵を誰か訪ねん』と書きつけて、取らせたる如き、如何に清少納言が觸れると同時に喚發する才氣を有して居たかを知ることが出來ると共に、寧ろ其の才氣の羨むべく愛すべきものであつたことが想はれるのである。假りに一步を譲つて、『枕草紙』に清少納言が自身の才學を誇る跡が見えるとしても、單にそれのみを以て彼を輕薄高慢な虚榮心の強い街氣の充ちた女と斷することは出來ない。かれの性質はかれをして不屈で權勢に阿らしめず、常に男子にも勝る意氣を有せしめた。その主皇后定子が天皇の寵衰へて人の心の離散した後までも、かれのみは猶ほ昔のまゝに忠勤を竭して變らなかつた一事だけ

ても、世の人の非難が一種の誤解から來たことの頗る多きを思ふのである。

さて『枕草紙』は觀察が銳利精緻、行文が簡勁奇拔であるに加へて、感覺的であるといふことは、能く人のいふ所である。實にかれの觀察は精緻にして銳利である。他が思ひ寄らぬ平凡なる事物の中に、何等かの新しい意味を發見する。その銳利精緻なる觀察をば、奇拔簡勁なる筆で書いて行く。されども、かれの觀察たるや、深き洞察が足りない。靜かに反省したり思索したりすることは、到底かれ清少納言の領内では無かつたらしい。かれは物の表面をば精細に觀察したけれども、内面に深く入つた洞察が無い。その觀察し、描寫し、批判した所も、一寸他人が氣の付かぬ目先の變つたものを擧ぐるにすぎぬ。讀者をして深く人生を思考させるやうな所はない。併し、内面に深く入つた洞察が無い、人生を深思させる所が無いといつて、つまらぬものといふのではない。精緻なる觀察から成つた、印象的の短い、特長のある描寫は、この草紙の到るところに充ち満ちて居る。全篇これ殿上生活の勝れたスケッチである。感覺的の筆で、眼のあたり見るが如く、聞くが如く、觸るゝが如く、鮮かに描き出されてゐるのである。

この『枕草紙』一篇の筆致が感覺的であるといふことは、やがて是を書いた清少納言の感覺の銳敏であつたことを示すものであるが、その感覺の銳敏であつたことは、やがて又かれの審美眼を發達せしめた所以である。かれが事物に對して如何に直ちに美醜の判斷を下したかといふことは、「すさまじきもの」にくきもの「いやしげなるもの」めでたきものなどいふ如き題目の、殆ど全部を占めて居るのを見ても解ることである。就中、色彩に關する審美眼の、いかにも發達したものであつたことは、全篇を通じて認められる事實である。蓋し、この時代の人々は、一寸と歌を贈るといつても、その料紙の色合と、それをつけてやる花や葉の色合と、それを結へる紙の調和を苦心した。清少納言なども、本來感覺の銳いのに加へて、殿上の生活を送る中に自然養成されたものかも知れぬが、男女の衣裳の色のことを書いてあるところは、それを讀んで見ると、襲ねた色や、透いて見える色の濃淡などが、直ちに目前に浮んで見えるやうな心地がする。いかにも鮮かに、いかにもよく書いてある。

この鮮かに生きくとして居るといふことは、その描寫の簡勁奇拔なることから生ずる自然の結果でもあらうけれど、又この草紙の特色である。かの同種類の事件又は事物を列記したる記事の如きは、殆ど讀者には何等の感興をも與へぬ書き方ではあるが、やがて綿々として盡きざる長篇に入る前提かと思へば、靜中に動を藏する

かの如く感ぜられて、やがては又一種の感興を生ずる。長短の句の相錯綜するところ、話題の變化と相待つて、變轉縱横、和文の通弊である軟弱蔓衍平板などいふことは、この草紙には絶えて認められない。全篇これ活躍、生氣に充つ。蓋し又、一つにはその描くところ、或氣分を味ふといふやうな靜かな落ちついたものでなく、何處までも奇警、銳利な觀察を主とした活躍の狀であるからでもあらう。

要するに『枕草紙』は隨筆であるだけに、それが小説であるよりも、一層明かに作者の性格を表し、清少納言の長所をも短所をも遺憾なく曝露して居る。かくて吾人は時代の片影たる清少納言を赤裸々に曝露したる『枕草紙』に於いて、又最も能くその時代に於ける社會生活の狀態を窺ひ得るのである。吾人は『枕草紙』を讀んで、『源氏物語』に於ける如く、一種幽遠なる美の境に逍遙することは出來ないけれども、同時に潑棘たる當代の生活を恰も現實の如くに味ひ得るのである。こゝに『枕草紙』を以て左右なく『源氏物語』の上に置かんことは躊躇されることではあるが、然も一千年の昔に於いて、かくの如き一大批評家の出でたことを、大に誇とする。

第十一章 源氏以後の小説

紫式部が世を去つて後は、小説の進歩は俄に一頓挫して落日の觀を呈した。否、作者の數は随分あつたらしい、書物の名の物に残つてゐるものだけでも、十數種はある。名の残らぬものは猶ほ多かつたらう。瓦は砕けても玉は残るの道理であるから、その傳はるものゝ少かつたのは、傳はるほどの價值がなかつたからであらう。今日傳はつてゐるものは、僅に數種に過ぎない。

その一つは『狹衣』といふのである。作者は紫式部の長女賢子、後に高階成章に嫁して、大貳三位と呼ばれた人であるといはれてゐる。果して然るかは疑はしい。紫式部の次女辨、内侍とする説もあれば、朱雀院の第五子祺子内親王に仕へて宣旨と呼ばれた女房の作だといふ説もある。これを大貳三位とするのは、『宇津保物語』を藤原爲時とするのとおなじく、大貳三位が紫式部の女であると同時に、『狹衣』の趣向が『源氏物語』に類するところがあるからではあるまいか。

『狹衣』の趣向は、才學容貌並びすぐれた狹衣の大將といふのを主人公として、源氏の宮といふ佳人を配し、種々なる人物事件を鹽梅したるものゝ、これは唯一篇の戀の物語である。全篇いかにも『源氏物語』の趣向に類するものではあるが、これには何の理想も寓意もあるのではない。狹衣の大將といふ人物を假りて、單に當代の現實社會

を描いたやうなものである。人物の性格もぼんやりしてゐるし、事件の發展も不自然なる點が多い。そして文章も冗漫である。すべてが『源氏物語』の精神をぬきとつてしまつた跡の形骸といふ趣である。世にひとり『源氏物語』のみを賞揚して、この物語を顧るものゝないのも、或は當然といはねばならぬ。されど、これを『源氏物語』以前の物語に比べて見れば、決して遜色あるものではない。否、結構のひきしまつてゐる點などは、或は『源氏物語』の四十四帖にもまさつてゐるはしまいかとも思はれる。歌にも勝れたものがある。

『狭衣』の外に、なほ『濱松中納言物語』といふのがある。一に『みつの濱松』ともいはれる。この物語の作者は菅原孝標たかすゑの女であるといはれてゐるが詳かでない。孝標の女は『更科日記』を書いて多少の文才のあつた人で、この『濱松中納言物語』の外に『夜半の寢覺』『自ら悔ゆる朝倉』などいふ小説を書いたともいはれてゐる。『濱松中納言物語』は、中納言なる人が生れぬさきの父を慕うて唐土に渡ることや、中納言がかの國の皇后と通じて出來た子の、後に母を慕ふあまりに佛門に入るなどは、從來の物語と少しく趣を異にしたものではあれど、なほ全體は男女の戀を描いたものである。

『是中納言物語』といふのも亦作者が分らぬ。菅原孝標の作であるとする説も、衆輔に堤中納言の名のあつたことから思ひ付いた想像でもとより信するに足らぬ。この物語は全篇を通じて脚色あるものではなく、花ざくら折る少將ほととぎすの懸想けんそうなど題して、すべて十帖から成る短篇小説集である。その中には、或は高雅なるものもあり、或は滑稽なるものもあつて、一寸おもしろい。「灰ずみ」よしなしごとなどの篇は、現に室町時代の文學に影響を與へて、一は狂言『墨塗』を出し、一は小説『常磐姫物語』を出した。

是等の外に、此時代の小説として『とりかへばやの物語』といふものがある、後半は確實に鎌倉時代の作と思はれるが、前半も全くこの時代のものかは疑はしい。

第十二章 平安末期の漢文學

盛なるものは衰へ、驕れるものは久しからず、藤原氏の勢力は、道長の薨去の後、幾程もなく衰運に傾いた。藤原氏を中心として一時全盛を極めた女流文學も、亦昔日の觀がない。女流文學はさながら藤原氏の榮華を飾るが爲に出來たかの如く、藤原氏の衰運と共に、見るかげも無くなつた。

この時に當つて、漢文學には藤原明衡・大江匡房・三善爲康等の大家があり、少しく後

れては藤原通憲(信西)清原頼業等の名流も出て、詩文の撰集には『本朝文粹』『明衡撰』『本朝續文粹』『藤原季綱撰』『本朝無題詩』『朝野群載』『三善爲康撰』等があり、詩合なども頻りに行はれた。かくて漢文學は一見生氣があるかの如くであつたが、その實門閥の弊いよく、烈しく、眞面目の研究次第に止み、思想も單純平凡に流れ、僅に辭句の修飾に腐心するばかりである。漢文學としての價値は漸く少くなつてしまつた。明衡の如きは錚々たる學者であつたのに、その著『新猿樂記』『雲州往來』など、漢文ともつかず無論國文ともつかぬ、和漢雜糅の變體文で書いた。蓋し、漢文學の研究が淺くなつて、公卿搢紳の間には正格なる漢文を書き得るもの少く、つひにこの種の變體文を書いてゐたものと見える。尤も、この頃、漢文學の影響は、研究の淺きに拘はらず、從來よりも一層廣く行き渡つてゐたことは認めねばならぬ。わが國文學はこの頃からだん／＼漢語を用ひることが多く、漢文の脈をも傳へて、雄健なる文體を生ずるやうになつたのである。

第十三章 歴史物語

當時國文學で注意すべきものは歴史物語である。藤原氏全盛の時代が過ぎ去ると共に、現代を描寫する日記と小説物語とは、過去の榮華を追憶する歴史物語となつた。歴史物語に『榮華物語』『大鏡』等がある。『榮華物語』も『大鏡』も事實を日記に取り、結構を小説に倣ひ、小説物語の流行の後を追うて世に出でたものである。

『榮華物語』は全篇四十帖より成る。帖ごとに「月の宴」「花山尋ぬる中納言」「さま／＼のよろこび」などいふ題を設けたのは、『宇津保物語』や『源氏物語』などに倣つたものであらう。作者は詳かでない。或は赤染衛門の作であるといひ、或は藤原爲業の作であるともいふ。いづれも時代が合はない。殊に赤染衛門などいふ説は、畢竟清少納言に『枕草紙』があり、和泉式部に『和泉式部日記』があり、紫式部に『源氏物語』などがあるといふやうなことから、赤染衛門も五歌仙の一人として何か書いたらうの臆測から來た説でいもあらう。或は又この物語を二段に分けて、最初の三十帖は赤染衛門が書き、後の十帖は爲業が書いたといふ説もあるが、これも根據があるのではない。おもふに、何人か、赤染衛門や紫式部などの日記や家集などを見て編成したのであらう。現に『初花』の卷には『紫式部日記』の文そのまゝのところもあるのである。村上天皇から堀河天皇の御代までの記事を編年體に書いて、殊に道長が一生の榮華をうつすに力を用ひてゐる。或は道長が一生の榮華をうつさうとして、溯つてその榮華の由來を

尋ね下つてその結末を記したのかも知れぬ。道長が皇室に勢力を得るに至る事情、同族互に相排斥して反目嫉視する有様、結婚、出産、佛事など、宮廷を中心としてゐる貴族の状態が描き出されてゐる。事實に多少の誤謬がないでもないが、わざと想像を加へたものとも見えぬ。随つて文章も縦横に筆を驅りがたく、小説物語の文に比べては餘程の遜色がある。悲哀な事件や花やかな事柄を書いたところにはよい點も見えるが、一般には柔弱で冗漫で變化に乏しい。殊に終になるに随つて粗雑である。この書は一に『世繼物語』ともいふ。

『大鏡』は『榮華物語』に比べると、餘程進歩した作である。この書の作者も爲業だといふ説があれど、勿論確かではない。これも亦一に『世繼物語』といふ。後一條天皇の萬壽三年、雲林院の菩提講に於いて落合つた二翁、大宅世繼と夏山茂樹との對話で話の緒を開き、文徳天皇の嘉祥三年から萬壽三年に至る百七十六年間の事蹟をば、帝王の本紀と攝關の傳とに分けて記し、卷末に賀茂右清水等の年中行事、雜話を記した紀傳體の歴史である。體裁に於いてかの『榮華物語』とは大に異なるが、道長の榮華の有様を寫さうとしたことは同様である。されど、かの『榮華物語』は只管道長の權勢の隆盛なるを謳歌する趣があるに、これは暗に憤慨する様子が見える。全篇の結構を二翁の對話とし、また傍聴者の意見をも挿み、前後の文脈又は事蹟の連絡をとつてあることは、頗る文學的であるに、文章も亦時としては詩を引き、時としては歌を擧げなどしてあるのが、讀者の感興を促すこと一とほりでない。而して、文勢は剛健で自在、『榮華物語』の柔弱で蕪雜なるのとは頗る異なつて居る。要するに、この書は文學として見ても歴史として見ても、『榮華物語』よりはすつと價值のあるものである。世の人、次々に出來た『水鏡』『増鏡』とこの『大鏡』とを併せて三鏡といふ。

かく『榮華物語』と『大鏡』とは藤原氏の榮花を中心として上流社會の生活の状態をうつしたものであるが、こゝに又一つ平安時代の上下の事情を記したものがあつた。それは即ち『今昔物語』といふのである。

『今昔物語』は一に『宇治大納言物語』ともいふ。作者は宇治大納言源隆國といはれてゐる。隆國は白河天皇の承暦元年(一七三七)に七十四歳で薨じた人である。さらば、この書は『榮華物語』や『大鏡』よりも先に出來たものであらう。或はいふ、隆國が宇治の南泉房に寓居してゐた頃、板の上に菴を敷かせて涼みながら、往來の貴賤男女を集めて珍らしい物語をさせ、聞くまゝに書き集めたものであると。されど、全體の結構を見るに、漫然と書きあつめたものとは見えない。和漢の書物や佛書をまでも涉獵し

て編成したものだと思はれる。隆國が避暑の事實も後人の附會であると、故佐藤寛博士はいうた。天竺和漢に亘つて、時代にかまはず、只珍らしい物語を類別して纂録したものである。一から五の巻までは天竺の部で、釋迦一代の傳記及びその生前歿後の傳説を記し、六から十の巻までは震旦の部で、佛法の傳來、孝養及び支那の史譚を蒐め、十一の巻からは本朝の部で、佛法の外に世俗、宿報、靈鬼、惡行、雜事などを記す。全篇三十一卷から成り、今は八十八・二十一の三卷が缺けてゐる。

この書はかく浩瀚のものではあるが、文學上の價値は極めて乏しい。さればというて、材料を精選したものでないから、歴史上の價値も多くはない。只當時はいかなる迷信が社會の上下を通じて行はれてゐたか、又は諸種の傳説童話が時と處とによつていかに變化したかなどを研究しようとするものにとつて、有益でもあり、又趣味もあるものである。かの世に有名なる道成寺の傳説でも、渡邊綱が鬼退治の話でも、およその傳説童話はこの書の中に求めることが出来る。文章は何等の技巧をも施さず、當時の言語と思はれるもの、其のまゝと見えて、やゝ蕪雜ではあるが、素樸で、漢語にも富んでゐる、所謂和漢混淆の體である。これを彼の『榮華物語』や『大鏡』に比べると、一層雄勁で、はやくも鎌倉文學に入るべき徑路を辿りつゝあることが知られる。

第十四章 三代集以後の勅撰歌集

三代集の以後も和歌の流行は頗る隆盛であつたが、勅撰の舉は暫く杜絶え、八十年あまりを経て、『後拾遺集』の撰進があつた。こは白河天皇の勅命をうけて藤原通俊が應徳三年(一七四六)に上つたものである。『後拾遺集』が出で、後四十二年、崇徳天皇の大治二年(一七八七)に源俊賴が『金葉集』を上り、更に二十餘年を経て、近衛天皇の仁平年中に藤原顯輔が『詞華集』を上り、更に又三十餘年を経て、後鳥羽天皇の文治三年(一八四七)に藤原俊成が『千載集』を上つた。かの三代集にこれらの集と次に出來た『新古今集』とを併せて、世に八代集といふ。

『後拾遺集』の作者は多くは道長時代の人である。その歌の風は、大體に於いては『後撰』『拾遺』と異なるところはない。『古今集』前後の流暢平易なるのを軌範とするものである。古風を出でまい離れまいとする弊は、思想の枯渴となり、形式の陳腐となつて、平凡無趣味なるを免れない。こゝに於いてか、かの曾根好忠の如き、この平凡無趣味を打破らうとする新派の歌人も出たのであつたが、この革新の機運は世と共に高まつて、『後拾遺集』の歌は古風を本領とする中にも亦幾分の新味が認められる。只その

新味を求めたる手段が思想の方面に向はず形式の上のみ注がれたので、纖巧に陥り輕浮に流れた歌が見える。されば當時の歌人も、この集の歌をば古風に流れるものとして甘心せず、後拾遺姿と名づけて誹謗するものもあつた。現にこの集の歌をとり出して非難を加へたものに、『難後拾遺抄』といふのがある。この集には又『小篋集』といふ異名がある。かく勅撰の歌集に異名をつける事は、この頃から始まつたが、所謂どんぐりのせいぐらべて、當時一世を心服させる程の歌人がなかつたのと、和歌の流行の盛んであつたからでもあらう。通俊は世の非難を心苦しく思つてか、後に『續新撰和歌集』というて、『後拾遺』の歌を拔萃したものを作つた。

『金葉』『詞華』の二集は各十卷から成つてゐる。かの『拾遺抄』の十卷なるに倣つたのである。この二集の歌は後拾遺姿の一轉化したものともいはうか。久しい間の因襲は容易に抜けがたく、『古今』の流暢穩健なるものがあると思ふと、『拾遺』の閑雅優麗なるものもあり、後拾遺姿の纖巧輕浮なるものもある。されども、この二集に於いて、『後拾遺』に比べて、より多く見えるものは、形式上の新奇を求めるあまりに、妄りに險語難句を用ひ、縁語言掛を弄し、又好んで體言どめの法を用ひたことである、思想ふるく形式あらたに、どこともなく生硬を脱しない歌の見えることである。さりながら、これらは流石に勅撰集の事として、比較的穩健平靜なる歌をとつたのであるが、當時の家集や歌合などには、なほ一層ひどいのがあつた。『金葉集』を難じた書に源顯仲の『良玉集』があり、『詞華集』に對しては藤原教長の『拾遺古今』と長門前司爲經の『後葉集』とがある。後に藤原清輔『後葉集』を駁する爲に、『牧苗記』を作つた。

『千載集』は新古兩派の長短を折衷した如きものか。古風にのみ拘泥するのは迂愚であるが、さりとて嶄新を求めて怪奇に陥るのも、その迂愚また之に譲らない。『金葉』『詞華』の二集は正に嶄新を求めて稍、怪奇に陥つたものである。心あるものは漸くその弊を知る。『千載集』はやがてかゝる時機に於いて出來たのである。歌の姿よく優麗に、調も亦流暢、輕佻浮華の風もなく、纖巧にも流れず、平淡なる中に情味を含む。古人が『千載集』を評して、『古今集』の細くなれる姿をしてゐるといつたが、いかにも穿つた見解である。『古今』ほどに優れた歌もないかはりに、さしたる屑もない。とにかく、平安時代の勅撰の中では、『古今集』について難の無い集である。

第十五章 三代集以後の歌人

『後拾遺集』の撰者通俊(一一七五九)は學問は和漢を兼ねて、政務にも長じた人であつ

たが、和歌はさまざまに上手とも見えない。修辭などの上に多少新奇なる趣がないのでもないが、大體は只『古今』の穩健なる風を尙んで何等の特色もないのである。『後拾遺』時代の歌人では、どうしても源經信(一六七一一一七五七)を推さねばならぬ。この人は正二位大納言で、桂の里に別墅があつたので桂大納言と稱せられた。諸般の技藝にすぐれて、詩歌管絃通せぬものなく、和歌は格別に上手であつた。その歌は新體を庶幾して、好んで自然を詠じ、又句法の新奇をも試みた。されども、未だ全く古風を脱したといふのでもない。その子俊頼に至つては、更に新體に向つて一步を進めたものであつた。その極端なるものになつては、あまりに新語を弄して晦澁なるものさへ少くない。それで、俊頼の功としては、古格の陳套を破つて、思想も言語も豊富なものとなさうとしたことである。家集を『散木弃歌集』といふ。歌論の書に『山木髓』俊頼無名抄』『莫傳抄』『俊頼口傳』等がある。俊頼の子俊惠法師も亦和歌に名ある人であつた。

俊頼と並んで『金葉』時代に盛名のあつた人は藤原基俊(一七一五—)である。基俊の歌風は、俊頼の新奇を好むに反して、古格を守り穩健を尙ぶ。さながら公任をこゝに見る趣がある。蓋し、かれ自身も公任に私淑するところがあつたからであらう。公任の『三十六人撰』『和漢朗詠集』を學んで、『新三十六人歌仙』『新撰朗詠集』を撰んでゐる。この外、歌論の書に『悦目抄』といふ著がある。

俊頼・基俊等と稍、時を同じくして、藤原顯輔(一一八〇—)父子三代また和歌を以て顯る。世にこれを六條家と呼ぶ。父は顯季(一七一五—一七八三)、子は清輔(一七六四—一八三七)。清輔は殊に歌にも巧であつたと同時に、歌學にも通じた人である。その著『續詞華集』は二條天皇の勅をうけて撰んだが、出來上つた時は、天皇が崩せられた後であつたので、奏上に至らないで終つたものである。別著『袋草紙』は歌道のご事典例を記したもので、これを拔萃したものに『雜談集』といふものもある。『奥儀抄』『和歌初學抄』も亦歌論の著である。當代の詠を選んだ書に『今撰集』がある。『牧笛記』『和歌一字抄』『和歌題林』等も、その作といはれてゐるが、今は傳はらない。顯輔の猶子顯昭法橋も亦歌を能くして、歌論の書に『袖中抄』を著し、外に『古今』『拾遺』『散木』などの註解をした。六條家三代の歌風は古格を尙んで流麗纖巧なるものが多い。

『千載集』の撰者俊成(一七七三—一八六四)は世に五條三位と呼ばれ、御子左家の祖として歌界に重きをなした人である。それ新體を競ふものは、その極は怪奇に陥り偏僻に流れた、古風を尙ぶものはまゝ、平凡何等の詩趣のないものもあつた。俊成は幼

少の頃に六條家の纖巧なる風を學び、後に基俊の門に入つて穩健なる體を習ひ、かねて俊頼の新奇なるのを推重した人である。故に、その歌たる能く從來の諸家の長所を渾成して一家をなした趣がある。その撰『千載集』は『古今集』の細くなれる姿であるといはれたが、俊成の歌も亦まさにそれである。流麗でもあり、穩健でもあり、高雅なところもある、而も尙柔弱をば免れない。世にこれを桐火桶の體といふ。家集に『長秋詠藻』といふのがある、『古來風體抄』『和歌肝要』なども、亦かれの作と稱せられてゐる。吾人は桐火桶の體に於いて一の大なる缺點を見出されぬけれども、又大なる特長をも認めることは出来ない。もしそれ、平安朝の末期に於いて、異彩あるものを求めれば只一人の西行法師か。

西行(一七七八一—一八五〇)はもと鳥羽法皇の北面の武士、深く感ずる所があつて、剃髮して圓位と號し、後に西行と改めたのである。吾人は西行の歌を見て特色と見做すべきもの三つを得た。題詠に空想を馳せた當時に實境實感を詠じたこと一つ、特に自然美を歌うたこと一つ、閑寂幽遠なる趣のあること一つ。これらは勿論その特色の主なるものである。その歌を集めたものを『山家集』といふ。『御裳濯川歌合』は西行が自詠の歌を三十六番に合せて、俊成に判せしめたもの、『宮河歌合』も亦自詠の歌を三十六番に合せて、定家に判せしめたもの。外に『撰集抄』として古今に於ける名僧知識の傳記行狀遺蹟等を纂録せるもの、亦西行の作と稱せらる。

第十六章 歌論の勃興

平安時代の末期に、歌論の勃興したことは、既に公任俊頼、基俊、清輔、顯昭、俊成等の著書をはじめ、能因法師の『歌枕』、藤原仲實の『綺語抄』、久我通光の『歌仙落書』等を重なるものとして、數多の歌論の書の出來たのでも知られるであらう。これ歌合撰集、又は百首歌などの流行につれて、その批判選擇の當否を論じて、互に論難駁撃するものゝあつた結果で、かく勃興したのである。されども、その説くところは、大方故實もしくは形式にのみ止つて、例へば歌會の作法、和歌の書きやうなどの事ではなければ、名所または詞に憚るべきもの忌むべきものがあるとか、題の詞で歌の中により入るべきものが入るべからざるものがあるとかいふやうな修辭の一端を極めて獨斷的に論ずる淺薄附會の説に過ぎない。たまく、内容に關するものもあるも、單に分類上の名目位を擧げるに止つて、深く和歌の精神などを論ずるなどの事はない。これ或は當時の歌界が内容美の如何といふことよりも形式美の如何にのみ心を注いだ自然の結果で

あらうが、これらの研究によつて和歌が寸毫の裨益を享けなかつたことは勿論、否むしる煩瑣なる拘束を興へられて、自然の發展を沮害せられる所があつたらうと思はれる。而してその弊害たる鎌倉時代以後に至つて殊に著しく、つひに所謂秘事口傳の如きものをも生じて、和歌の精神を閑却せしめ、和歌をして殆ど全く見るべきものなきに到り了せしめたのである。

第十七章 朗詠と今様

この時代の初期に於いて、神樂歌、催馬樂歌といふ謠ひもの、行はれたことは既に述べたが、中頃以降に及んで、また朗詠及び今様といふものが行はれた。

朗詠は詩賦の中の佳句を和譯して我が俗謠風の譜節で謠うたもので、後には古歌をも吟ずるやうになつた。かの公任の編纂した『和漢朗詠集』や基俊の撰んだ『新撰朗詠集』は、すなはち當時に行はれた朗詠を編纂したものである。その詩賦から採れる句は、大抵七言二句或は四言四句から成つたもので、これが和譯も随つて簡短なものである。

今様は元來昔風に對する當世風の歌といふ義であるから、五七の古調に對して七五の新調を呼ぶ名であつた。最初は短歌と同形のものもあつたが、後には七五四節に謠ふもの、みをいふこと、成つたのである。七五四節の今様は佛教の意を叙べた和讚に始まる。弘法大師の作と唱ふる以呂波歌はやがてそれで、これが今日傳はつてゐる今様の最古のものである。この形式の歌がこの時代の末頃から盛んに朗詠と共に並びうたはれた。されど、その作の『平家物語』『古今著聞集』などに見えたるもの、外、今日に傳はるもの、少ないのは、誠に残念な次第である。況や、今様は朗詠に比べて文學上の價值更に大なるものあるをや。世にこれらの謠ひものを總稱して郢曲といふ、俗曲の義である。

第四編 鎌倉時代の文學

第一章 總說

こゝに鎌倉時代とは、政治上の變革に隨ひ、後鳥羽天皇の文治二年（一八四六）に源右府頼朝が幕府を鎌倉に開いてから後醍醐天皇の建武中興（一九九四）の頃に至るまで、凡そ百五十年ばかりの間をいふ。文學の變遷が必ずしも政治上の變革と一致するものでないことは勿論であるが、在來史家が政治上で用ひ慣れた區劃は人の耳にも慣れて、何かにつけて便利であるから假りに斯く定めたのである。

前代の末葉から此の時代の初にかけては、随分混亂の世の中であつた。父子兄弟が互に敵味方に別れて修羅の巷に馳逐したり、圓頂黒衣の輩が矛を執つて朝廷を脅し無辜の民を苦しめたりする事などは、殆ど日常見聞する出來事であつたが、軒騎群集し堂上花の如しといはれた平家の一門も、壽永の秋の木枯に散りはて、西海の藻屑と消え、源家の一族も亦わづかに三代で滅びた。加之、この間にはまた大風や大地震や疫病飢饉などの天災地變もしきりにあつた。北條氏が權を執つての後は、民を撫育して専ら仁政を行ふにつとめなければならぬ、なほ承久の變もあり、弘安の役も起り、

つひには北條氏それ自身さへ滅亡してしまつた。見れば、前代の末から此の時代に亘つては、實に榮枯盛衰の常なき時期であつたのである。こゝに於いてか、世人は人生の頼みがたきに、心から不安を感ぜざるを得なかつた。而して此の不安の念はやがて此の世をはかなむ厭世主義の風潮となり、進んでは慰安を與へる所の宗教的要求となつて、佛教の活躍を促した。

それ佛教の我國に傳來せるや、既に數多の年所を経たりとはいへ、前代までは表面上外観ばかりがいかに隆盛であるのであつて、民性に與へる内面的感化は至極乏しく却てもろくの弊風に囚はれてゐた。即ち平安時代には天台眞言などの宗派が盛んに行はれたが、それらの宗派が事相の方面にばかりかゝつらふの結果、加持とか祈禱とかの儀式だけが行はれるのみで、全然現世的形式的のものと成つてしまつて、佛教の眞意義は殆ど失はれた。併しながら、物は極端にまで進むと却てその反動を喚び起すの道理で、ひたすら形式的にのみ流れ腐敗に腐敗を重ねて現世的快樂を得る方便にばかり供せられてゐた事相的宗教に對する自然の反動は、恰もよし時勢の混亂に觸れて更に助成され、こゝに全く此の世を厭離し、眞正の解脱を欣求する一派の人生觀を誘致した。かくて此の時代の初に於いて禪宗の渡來となり、次いで

浄土宗・真宗・日蓮宗・時宗等の諸宗派が新たに我國に組織さるゝに至つた。この時幕府の政策は敬神崇佛といふ事であつたので、諸宗の發達一層盛んに、民衆の渴仰日に加つた。就中、禪宗はそのやり方の短刀直入的である所が、當時の武士の素樸なる氣象に適つて著しく榮え、鎌倉には北條氏の信仰から新たに五山の大禪刹までも創設された。されば、是等の諸宗派が世道人心に及ぼした感化の莫大なるものであつたことは、殆ど想像を煩すまでもあるまい。

佛教的思想が斯くて此の時代を通じて人心の上に一大影響を與へたことは、文學史を研究するものゝ看過すべからざる事實であるが、これと同時にまた忘れてならぬ此の時代の新現象は、尙武の氣象の勃發したことである。さはいへ、この氣象は元來此の時代に始めて發見したのではない、建國以來既に存在した國民性である。かの大伴佐伯の族が「額には立つとも背には矢は立てじ」というたのは、やがてそれである。されども、この氣象は世の降るにつれて、浮華柔弱なる都人士の間には、いつしかその影をひそめて久しく見ることを得ず、唯邊土の武士などにのみ見ることが出來たのである。平家の一族は國を出で、久しく平安城裡に留まり、華胄公子の風に慣れて柔弱となり、多少武人の本性を失つたかとも思はれたが、その最期に臨んでは一

族擧つて西海の藻屑と消えてしまつたのは、なほ一片尙武の氣象の殘つてゐたからではあるまいか。源家の一黨關東に起り、將軍頼朝以下北條氏に至るまで、世々質素の風を奨勵し卑劣尾籠の振舞を戒めたので、尙武の氣象は更に大に一般の風を成すに至つた。而して、これが主従の關係と結びついては、主君の爲には死を鴻毛の輕きに比して顧みざる純忠の行爲となり、儒佛の觀念を加味しては後日の所謂武士道ともなつたのである。

佛教的厭世主義は現世の榮華を賤しみ、尙武の氣象は眞摯を貴ぶ所から、簡樸質素の生活を馴致し、搗て、加へて幕府の政策がまたこゝにあつたので、簡樸質素はやがてこの時代の風をなした。平宣時が最明寺時頼に招かれて直垂の無きに困じ、時頼がわざ／＼宣時を招いて味噌の残りで杯を傾けた如きは有名な話ではあるが、決して珍らしい例ではなかつた。この時代に於いては男尊女卑の風のあつた事も、亦見のがすべからざる現象である。干戈の動く世の中に、婦女子は却て邪魔物にされ厄介ものにされるのは自然の勢であるが、儒佛の思想が又これを手傳つて、かゝる風潮をなしたことゝ想はれる。

要するに、鎌倉時代は、王政が破れて武門政治となり、政治史の上では殆ど革命的變

革のあつた如く、宗教に於いても、國民性に於いても、一般の民俗に於いても、何れも歴史を無視し舊慣を打破した時代である、新しい天地を開拓した時代である。

そも、かういふ時代に立つて、文學に従事した作者は、如何なる種類のものであつたか。われ等は平安時代に於ては、主として平安城裡に悠々として閑日月を送つた貴族の徒、就中後宮の婦人が作者であつたとを見た。然るに、この時代の作者には、具に世の忽劇を目撃経験し、人生の無常に我身をはかなみて俗塵に遠ざかつた僧侶、隠士の輩が多い。勿論、前代の作者にも僧侶あり、現代の作者にも貴族が無いでもないが、前代の僧侶は精神的に僧侶として僧侶の立場から文學に携はつたのではなく、上流社會に出入する範圍のものが娛樂的に文學を弄んだに過ぎない。而して現代に於いて文學に携はれる貴族は、前代から承けついで文學の或部分に一步を進める所はあつたが、いはゆる現代文學に特殊の色彩を添へるものではなかつた。かくて現代文學に特殊の色彩を帯びしめるもの、現代文學を代表する作者としては、僧侶もしくは隠士を擧げるのである。現代文學の代表的作物としては、『保元』『平治』『平家物語』などであることは世の定評であるが、是等の作物は分明にその作者を知ることが出来ないのである。一面からいふと、その作者の知られないといふこととそれ自身が少くとも既に社會の表面に立てる人の手に出たのではなく、裏面に隠れてゐたものゝ手に成つたことが想像されるではないか。文學の作者は從來貴族に限られたるものが僧侶隠士の手に移り、就中後宮の婦人であつたものが男子にかはつたといふことは、この時代の文學に異彩あらしめる一原因として看過することが出来ない。

是等の作者がとり扱つた材料は如何なるものであつたか。これも亦前代に比べて見ると、非常の相違である。前代文學の題目となつたものは平安城裡の出來事であつた、宮廷搢紳の生活を中心として男女の情話を描くのが主要の題目であつたが、この時代になつては、殺伐悲惨なる軍陣の有様、剛健素樸なる武士の行動、恐怖すべき天災地變、憂鬱沈痛なる厭世の思想などである。即ち優美溫柔なる題目を離れて雄渾壯大なる材料となり、平安城裡の一小天地に限られたものが廣く社會の出來事を扱ふやうになつた。

是等の材料は如何なる用語いかなる文體を以て表はされたか。言語は、前代に於いて、既に漢學教佛の流行につれて、漢語佛語をとり入れることが次第に多かつたが、この時代になつては作者が主として僧侶隠士である所から、漢語や佛語の加はつたことが更に著しい。就中、軍記物語に於いて、特別にその傾向が認められる。かくて

この時代の文章は著しく剛健の體を具へるやうに成つたのであるが、更に一般の用語に促音や鼻音の音便などが加はり、且つ軟弱なる概念をあらはすべき言語を避け、て然らざるもの言ひかへるやうな傾向があつたので、益、強い音強い意味に富んだ文章が出来た。さかり(盛)をさかんといひ、ずば(不者)をずんばといひ、まさき(真先)をまつさき、あはれをあつばれといへる類や、退く、遁ぐるといふべきを避けて、開く、延ぶるといへる類がそれである。前代に於いて、拗音を直音にし、イ音便、ウ音便などを盛んにつかつて、成るべく優婉なる音とならしめたのに比べて見ると、著しい變化である。かくて、前代に於いて漸次典雅優麗なる域に進みつゝあつた所謂雅文は、こゝに全く破壊されて、剛健壯雄なる和漢混和文と成つたのである。併しながら、漢學の講究既に衰へて歲月を経たので、措辭用語に蕪雜なるもの多く、加之、文法は統一を缺いて破格なるものが少くない。漢文には格を失つて國文にもあらず漢文にもあらぬ一種異様の擬漢文が行はれ、國文にも往々漢文格なる轉倒讀の語句が入り雜つて、今日の書簡文に見るが如きものがある。然れども、漢語佛語の多く攝取されたと口語の挿入されたとはいふ語句の豊富を致し、文法の破壊は一面には思想の表示を自由ならしめる點もあつて、文勢に緩急波瀾あり變化があつて、前代文學の單調を破つた。

この時代の文學は、かくて時代の感化と作者や材料の然らしめるとで、厭世的傾向を帯びて、幽鬱沈痛なる色彩があると同時に、又教訓的要素にも富んでゐる。就中時代精神とも見らるべき尙武の氣象が全文學に溢れてゐる。而して、時代そのものが革新的である如く、文學も亦その内容といひ外形といひ革新的傾向がある、舊慣を脱しようとしてゐる、一味清新の趣がある。

然れども、こは全くこの時代文學を代表すべき特色あるものについての觀察である。武門の一面に宮廷あり、關東に對して京都があり、革新的破壊的勢力の反面に習慣的舊守的勢力が潜んでゐた如く、文學にも如上の新傾向とは全く反對なる宮廷文學舊文學がなほ一方にはそゞと存在してゐた。和歌の如きは宮廷文學舊文學の重なるそれである。政治上でいへば、かの承久の變までは武門と宮廷との對立せる時代であつたが、文學の方面に於いても新文學と舊文學とが兩々對立してゐた。承久の變以後は、宮廷の勢力全く地に塗れて、全然武門の世となつたのであるが、文學も亦宮廷の裡に養はれたものは衰微して纔に形骸を存するに過ぎなかつた。さはいへ、宮廷を離れての文學も大に榮えるには至らない。鎌倉の武士は武備兵術にこそ長けてはをれ、文事にかけては全く没交渉ともいふべき程に無學である。少數の

僧侶隠士が緒餘の業としてわづかに世に出したる文學が、微々として振はなかつたのも道理といはねばならぬ。かくて鎌倉文學は全體を通じて衰微してゐた、只一味清新の趣あるのみを多とするのである。

第二章 新古今集の勅撰

平安時代の末葉は、兵亂うちつゞいて、一般に文物の進歩を妨げたけれども、和歌のみは猶ほ依然として行はれ、公卿の輩はいはずもあれ、武人であつて馬上に歌を詠するものも少くなかつた。されば戦争が止んで、政權の遂に武門に歸した後は、さらぬだに政治に與るとの稀であつた大宮人は、いよゝゝ閑暇を得て風雅の道に心を委ねるものが多かつたが、わけても歌を詠むことが盛んであつた。これ一つには、後鳥羽天皇・土御門天皇・順徳天皇の三帝が引つゞき和歌に長じてゐて、特にその道を奨勵なさつたからである。俊秀なる歌人の輩出すること、實に『古今』時代を今こゝに見る如

名がある、その外藤原定家家隆の技倆はいふまでもなく、これを男子としては俊惠・寂蓮・長明・秀能等、これを女流としては式子内親王・俊成女宮内卿など、みなその錚々たるもの、おのゝ特色を具へてゐる。かゝれば、當時は歌合の會などが頻りに行はれ、孰れも全力を竭して優劣を争ひ、一首の歌を批判するにも數日を費すこともあつた。六百番歌合・千五百番歌合・元久詩歌合等は、その中の名高きものである。外に百首歌・千首歌などゝいふことも行はれた。その隆盛なることは、萎微振はざる當代の文壇に於いての偉觀であるばかりではなく、三代集の出來た當時に比べて見ても遜色があるとは思はれない。かゝる盛時に當つて勅撰された歌集が『新古今和歌集』である。

『新古今集』は、土御門天皇の元久二年（一八六五）三月二十六日に、後鳥羽天皇の院宣によつて、其當時の鉅匠であつた源通具・藤原有家・同定家・同家隆・同雅經等の五人が撰進したものであるが、上皇自身も親しく臨席なされて裁定されたといふことである。古今の歌をあつめて、卷の數が二十卷、歌の數が千九百七十八首異本は千八百七十四首、假字序・眞字序の共に備はつてゐるなど、『古今』以後最も完備せるもの。そもゝゝ歌集の體裁は、『後拾遺』以後、『金葉』、『詞花』に至つて大にくづれたのが、『千載集』に至つて稍、整頓し、この『新古今集』となつて更に完成されて、『古今集』にも譲らないものとなつた如く、歌集の内

容も『古今』以後別に一新機軸を出し、二十一代集中『古今』と相並びて斬然頭角をあらはし、和歌史上の一時期を作つた。『古今集』以下『新古今集』までを世に八代集といふ。吾人はこの歌集をひもといへども、想の上に新しみを見出すことは殆どむづかしい。この歌集の歌人がとつて以て題目としたところの材料は、往昔の歌人が採用したところのものとかはらない、月花のあはれを詠じ、男女の戀をうたひ、身をなげき、世をかなしむなどの類にすぎないからである。然るに、おなじやうな題目おなじやうな思想をおなじやうな形式ばかりで詠んでゐては、情に鈍りが出て来て、最初に出來た歌ほどには讀者の感興をひきおこさない、陳腐といふやうな感をも生ぜざるを得ない。こゝに見るところがあつて、『金葉』詞花などの歌人は新しい試をもしたのであつたが、惜しいかな歌の本質たる思想の方面をば顧みないで、たゞ外形の新しきをのみ求めた結果がかの如く怪奇亂雜なるものと成つてしまつた。かくて『千載集』は、かの『金葉』『詞花』の弊を認めて、更に内容外形の調和をはかつて稍、成功したのである。併しながら、なほ思想の枯渴想像の缺乏といふことは、どこともなく認められる。この『新古今集』に於ても、吾人は『千載集』に對すると殆どおなじやうな感を抱かざるを得ぬ。のちの『古今集』の『新古今集』に對するのと殆どおなじやうな感を抱かざるを得ぬ。うぐひすの鳴けともいまだ降る雪に、杉の葉しろし逢坂のせき

は『古今集』の

うめが枝に來るうぐひす春かけて

鳴けともいまだ雪は降りつゝ

とあるに本づき、藤原家隆の

おもふどちそことも知らず行きくれぬ

花のやどかせ野邊のうぐひす

は、おなじく『古今』の

おもふどち春の山邊にうちむれて

そことも知らぬ旅寢してしが

とあるに本づき、また源通具の

うめの花たが袖ふれしにほひぞと

春やむかしの月にとはッや

といへるは、これもおなじく『古今』に、

花よりも香こそあはれとおもほゆれ

たが袖ふれしやどの梅ぞも

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

とある二首の歌と詞とをとりて詠みたるもの。また俊成のほとゝぎすの歌に、

昔おもふ草のいほりの夜の雨に

なみだな添へそ山ほとゝぎす

といへるのは、白樂天の詩に「蘭省花時錦帳下、廬山夜雨草庵中」とある句に本づいて詠んだもの、その例は甚だ多い。なほ釋教と題せる部門の歌などには、比々この句題に類せるものがある。かく古人の歌を本とし詩句を本として之を換骨奪胎して詠ずるといふことは、一寸おもしろい思ひつきではあるが、本歌とした古歌もしくは詩句を知らないでは、感興の過半は失はれることを免れない詠歌法で、一面にはまた創作力の劣へたことを證するもの、やがては思想の枯渴想像の缺乏から來た、一種の詠歌法である。但し、これまでの歌集が枯渴せる思想缺乏せる想像

鈍つた感情をそのまゝに詠んで満足してゐたに比べては、一つの進歩した面白い思ひつきといはねばならぬ。叙景の詠がこの集になつて著しく加つて來た、主観的叙情をのみ主とせる『古今』の舊風に客観的叙景の新潮を加味し、主客錯交景情一致をつとめ、またよくこれを大成せるのが『新古今』の最大特色であるといふ史家もあるが、果して最大特色であるかどうかは分らないが、多少さういふ傾向のあることは否まれない。

『新古今』の特色は、どうしても形式の上の美なることである、變化の妙を悉せることである。三十一字の小詩形で、互爾乎波や助動詞を十分につかつては詠まうとする思想も音數に制限されて詠み得ぬこともあり、また動詞助動詞などの説明語が必ず章句の終りに來るといふわが國語では、それをそのまゝに用ひると單調に流れ易いところもある。そこで省けるだけは互爾乎波や説明語を省いたり、轉倒し得るかぎり、語句を轉倒する、これが『新古今集』の得意の修辭法で、亦その最大特色である。例へば、

見わたせば山もとかすむ水無瀬川

ゆふべは秋となに思ひけむ

かせ通ふねざめのそでの花の香に

かをるまくらの春の夜の夢

の如きはその一斑である。

併したゞ單に互爾乎波や説明を省いたり、句法を轉倒したりしたとて、それだけでは何でもない、とりいでゝいふにも當らないが、この集のはいかにもそれが洗煉巧緻をきはめ、調子も華かに麗はしくて一種清新の趣があると同時に、また餘情あるもの、幽玄閑寂なるものがあり、莊重謹嚴なるものがある。『古今集』は花實並び備はつたものであつたが、『新古今集』はかくて『古今集』にも見ることの出来ない新古今風なる一種の風格を備へてゐる。それかあらぬか『新古今集』には古調の歌を改作して當時の風格にしたものも少くない。すなはち『萬葉集』に持統天皇の御製とて、

春すぎて夏來たるらし白妙の

ころもほしたり天の香具山

とあるをば

春すぎて夏きにけらし白妙の

ころもほすてふ天の香具山

と改め、赤人の富士の嶺の詠に、
田子の浦ゆうちいでゝ見れば眞白にぞ

ふじの高嶺に雪は降りける。

とあるをば、

田子の浦にうちいでゝ見れば白妙の、

ふじの高嶺に雪は降りつゝ

となほしてあるなどが、その例である。

要するに『新古今集』は歌の内容の上に格別新詩材も新思想も見出さないけれど、其詠歌法の上に一新機軸をあらはし、更にその形式に於いて殆ど古今獨歩の特色を有してゐる。而も内容を離れたる形式の美は、時に天真を缺き、時に生氣を缺く。『新古今集』にも正にその弊が認められるかのやうにおもふ。もし『新古今』の歌人に及ばざる凡庸なる歌人があつて、これを摸倣したならばどうであらうか。『新古今』以後の歌人は『新古今』の缺點のみを傳へ、陳腐なる内容は更に生氣なく精神なく、無意義なる形式にのみ囚はれて、歌道は永く沈滞萎縮の域に入つた。『新古今集』は恰も燈火の將に消えんとして一時明るきが如く、歌界漸く沈衰しようとして一時をかざるともいは

第三章 當時の歌人

『新古今集』の出来た時代には、歌道の名家は綺羅星の如くあつた。後鳥羽・土御門順徳の三上皇を始として、藤原良經・慈圓僧正・寂蓮法師・鴨長明・藤原秀能・式子内親王・宮内卿・俊成の女等、いづれもそれ／＼の趣があるものであるが、特に一世を代表する名人としては、藤原定家・藤原家隆の二人を推さざるを得ない。源右府實朝も、亦一異彩たるを失はぬ。

定家は俊成の子で、應保元年（一八二二）に生れた。幼少の頃から進取の氣象に富んでゐたが、長ずるに及んでは史傳に通じ、詩文を能くし、とりわけて和歌の道に堪能で、遂に一世の宗と仰がるゝに至つた。貞永元年（一八九二）に權中納言に任せられ、天福元年（一八九四）に剃髮して明靜と號し、仁治二年（一九〇一）に薨じた。行年正に八十歳。世に京極黃門と稱するは、その邸宅が二條の北、京極の西にあり、そして中納言の唐名を黃門といふからである。家集を『拾遺愚艸』といふ。

定家の著書は頗る多い。『詠歌大概』、『雨中吟』、『未來記』等は歌學上の意見を誌したるもので、後世和歌の三部書として歌學の金科玉條と稱せらる。尤も『雨中吟』、『未來記』の二書は後人の偽作であるといふ説もある。その外、定家の作と稱せられてゐる。數多の歌學書は大抵は偽作らしいが、定家は歌學書中の外に、種々の異本を参照して、古書類の定本を作り、またその註釋をも作つてゐる。『古今』でも『伊勢』でも『土佐』でも『源氏』でも、世に流布する古書は多くは定家の校訂を経たもので、且つ比較的に誤謬が少い。註釋書としては『古今集』の『顯注密勘』が最も名高く、世尊寺伊行の註を増補せる『源氏奥入』は『源氏物語』の註釋書の先驅で、また珍とするに足る。定家かなづかひといふものも亦有名である。その日記なる『明月記』を見ると、いかにかれが晩年までも孜孜としてその道の爲に働いてゐたか、察せられる。かれが歌壇にその最上の權威を占得したのも、その一步はこの努力に由ること無論である。

定家はその著『詠歌大概』に於いて、情は新しきを先とし言葉は古きを用ふべしといふてゐる。吾人はかれの歌を見て、いかばかりその内容の新しきを庶幾しつゝあつたかを知る。その中にも幽玄といふことは、かれの最も庶幾したこと、少くともかれの歌の一特色である。さはいへ、これは未だかれを標致する所以のものではない。かれの歌の一大特色としては、修辭の巧妙といふことを挙げねばならぬ。かれは言

葉の古きをよしとするあまりに、三代集以後の言葉をば用ひまいとしてゐる。そも『新古今』時代の歌が、思想の枯渇や想像の缺乏から、既に内容の貧弱な陳腐な平凡なもの、強ひて目新しく立派な見ばえのあるものとして見せようとする結果、自然に修辭上の技巧となり、内容美よりも形式美を特長とするものとなつたことは前にも述べたが、今こゝに定家は更に三代集當時の古い簡単な言葉を以て、よし枯渇し缺乏したとはいへ時代の推移に伴うて三代集當時よりもずつと複雑になつてゐる現代の思想や想像をあらはさうとする。現代の歌界が一般に庶幾したよりも、一段と修辭上の工夫を要することは明かである。然るに定家の技倆はよくこの要求を充たして修辭上の巧妙をきはめ、その歌はどことはなしに意味深げに、餘情に富んだ趣がある。併し修辭上の技巧を重んじた弊は、また一面にその歌をして往々意味の簡明を缺き、不徹底のものとならしめた傾がないでもない。修辭上の技巧は蓋し定家の一大長所でもあり、また一大缺點でもある。されば定家自身も晩年には漸くその弊を悟り、みだりに技巧を弄することを避けて、平穩簡明なるものを尙んだ。遮莫、技巧は定家の歌の生命である、後世の人が定家を尊重し謳歌するのもこれあるが爲である。

定家の勢力と技巧の才とは、實にその地位をして優秀ならしめた。その晩年に及んで、かの三上皇は遠島へ遷され、そのほか名ある歌人も或は世を去り或は社會上の地位を失つて定家一人が歌界唯一の老將となつたので、ますますその地位を鞏固ならしめた。加之かれ自身常に權門に阿るやうな様子があつて、社會上の地位を利用したのが、亦歌界に勢力あらしめたやうである。かれは貞永元年勅命を蒙つて『新勅撰和歌集』を上つたが、さしも優れたる三上皇の御歌をば一首も採らないで、實朝の歌をば二十五首までも採つたことなどは、この間の消息を語るものではあるまいか。後世かれの心術を疑つて非難するものゝあるのも、餘儀なき次第であらう。家隆が後鳥羽上皇の隱岐に遷された後までも屢々獻詠して、上皇の御心を慰め奉り知遇に酬い奉つたに比べては、霄壤の差である。

家隆は壬生中納言光隆の子である。官は宮内卿に進み、位は從二位に至つた。世に壬生二位といふ。嘉禎二年(一八九六)剃髮して號を佛性と呼び、翌三年四月八十歳で薨じた。定家に先つと正に四年である。少年の頃俊成に従つて和歌を學び、次第にその名を顯はし、遂に定家と共に歌道の二星と稱せらるゝに至つた。一生涯の間に詠じた歌は無慮六萬首といはれてゐるが、今日傳はるものは僅にその十分の一に

も及ばない。家集を『玉吟集』とも『壬二集』ともいふ。

家隆の歌は、妄りに奇を衒はず新を競はないで、内容も形式も著實平淡なるうちに自然の趣があるのを特色とする。この點からいふと、定家の新奇を貴び技巧を重んじたとは、正反對に立つものともいふべきである。『續歌仙落書』に家隆の歌を評して「風體けだかくやさしく艶なるさまにて、又昔思ひいでらるゝふしも侍り、末の世にありがたき程の事にや、すがたさまふなれども大内の花盛り、心あらん雲の上人いざなひて、暮るゝまで詠むる心地なむする」と見えたるも過言ではない、實に延喜天曆の歌風を數百年の後に見るやうな趣がある。後鳥羽上皇の知遇を蒙り、先輩からも齊輩からも推重せられて、一時歌界に重きをなしたのも當然である。然れども、晩年に至るまで節を變へず後鳥羽院などに心を寄せてゐたことが、却て當時の社會からは遠けられて、歌界に於ける權威も之が爲につひに廢れてしまつた。

もしそれ、此の時代に當つて、よく當時の風格を離れて優に一異彩を添へたものを求めるならば、吾人は鎌倉第三代の將軍源右府實朝を推さなければならぬ。實朝の歌は實に高古雄壯眞摯素樸、當代に於いてつひに之に比すべきものなく、さながら奈良時代の歌をこゝに見るが如き感がある。

實朝は二代將軍頼家の同母弟である。十二歳の歳に兄頼家の跡を襲いで征夷大將軍となつた。性質溫雅にして聰明、幼少から學問を好み頗る風雅の才に富んでゐた。學事に疎い鎌倉武士の間に成長した人物としては稍、異常なる教育を受け、文章博士源仲章について和漢の書史を學習した。されども和歌に關しては、十五歳の時僅にその詠三十首を京都に遣はして定家の批判を乞うたことのあるのと、定家が祕藏の『萬葉集』をうけ傳へたことがあるのみである。建保七年(一八七九)正月姪公曉の爲に弑せられた。時に年二十八。家集を『金槐和歌集』といふ。集録するところの歌は僅に七百首。

その歌を見るに、技巧を重んじた當時の歌界にその比類を見ないばかりでなく、殆ど『古今集』の風格を離れて遙に『萬葉』の古調を帯びてゐる。高古雄壯眞摯素樸などいふ語は『萬葉集』を評する語であつたが、直に、かれの歌の全部を評することが出来る。自分の感想を思ふがまゝに作り飾りなく詠じてゐるところに、高古雄壯の調があるのである。修辭などいふことは、自然にかれの注意を拂はなかつたことゝ見えて、中には平板にして簡單なる散文らしいものもあるを免れない。紅梅^{こさめのうめ}を字音に讀ませ、

わが宿の八重の紅梅咲きにけり

知るも知らぬもなべて訪はなん

と歌うた如きは、いかに言葉などに頓著をせなかつたが想はれる。この外、語義を違へて用ひたなどの例も少くない。おもふに、實朝がこのやうに不注意な且つ未熟な修辭法で、なほ高古雄壯の調をうたひ、技巧を事とした歌界に立つて世の視聽を惹いたのは、かれの性來おのづから歌人たるに適したところがあつたからであらう。もしこの人にして老年までも生存したならば、げに鬼神をも動かしたらうに、年若くて死なしたのは惜しいことである。吾人は強ち賀茂真淵のやうに、かれの詞才を賞揚して「貫之躬恒といへど之に師たること能はざるべし」といふものではないが、少壯の齡でありながらよく歌界の一方に卓立して、嘗に當時に推されたばかりでなく、百世の後までも熱誠なる嘆美者を出だしたことを偉なりとせざるを得ない。定家をして「鎌倉右府の歌を見る時は歌は物憂くなりぬ」と歎せしめたのも、追従の言とのみ見なすべきではあるまい。

第四章 歌道の衰微

定家の子に爲家（一八五七—一九三五）といふものがあつた。父祖の業をうけついで、和歌の道にはたづさはつたが、その技倆は到底父祖の足もとにも及ぶものでない。いたづらに家學の皮相をのみ傳へて摸倣を事とし、清新の想もなく、技巧の妙もなく、獨特の創見もなく、平々凡々たる一歌人に過ぎなかつた。されども當時の歌人には、かれの右に出づるものなく、而もかれは背後に父祖が永年築き上げたる權威を負うて、永らくの間子弟の教養につとめたので、世は自然にかれを推重して、歌道に於ける權威は殆ど父祖のそれにも譲らなかつた。かくて歌道はさながらその一家の專有物の如くになり、和歌所の領地さへかれの所領となつて、歌道の門閥はこゝに全く確立するに至つた。見よ「新古今」以後の勅撰歌集の撰者を。

新古今	元久二年	藤原定家、同家隆、同有家、源雅經、同通具
新勅撰	貞永元年	藤原定家
續後撰	建長三年	藤原爲家
續古今	文永二年	藤原爲家、同基家、同行家、同光俊
續拾遺	弘安元年	二條爲氏
新後撰	嘉元元年	二條爲世

玉葉	正和元年	京極	爲兼
續千載	元應二年	二條	爲世
續後拾遺	正中二年	二條爲藤	同爲定

いま、これらの撰者をかれの一家について見ると、つぎの如くである。

俊成—定家—爲家—爲氏—爲世—爲通—爲定

爲教—爲兼—爲藤

爲相

勅撰の歌集としてかれの一家の關係せぬものはない。『續古今』を撰定する時に、他の撰者の加はつたことをさへ爲家は不幸に思つて、

玉津島あはれと見ずや我が方に

ふき絶えぬべき和歌の浦風

とまでも詠じた。歌道は我が家の世業と心得たからであらう。

およそ何事でも一家の世業となつては衰微に赴くのが常である、歌道とてもその數に洩れる筈がない。俊成の子に定家があつたのは異數である、爲家に至つては不肖の子たるを免れなかつた。その歌ふところは縁語とか上下のかけあひとかいふ

ことのみで、一世の軌範とするに足らない、その説くところは關ある語とか主ある語などいふことを設けるのみで、却て歌人の口を箝束する。これでは歌道は衰へまいとしても衰へざるを得ない。况や、その三子はおのゝく相分れて門派を樹て、愚にもつかない事を主張して相争つたに於いてをやである。

爲家の子に世業をついだものが三人ある、長は爲氏といひ、次は爲教といひ、季は腹がはりで爲相というた。爲氏は二條家をつぎ、爲教は京極家を立て、爲相は冷泉家の祖となつた。いづれも門戸をたて、みづから歌道の師範を以て任じ、おのゝく定家の正統を傳へたと號し、紛争して互に下らない。

されど爲氏(一八八二—一九四六)と爲相(一九二三—一九八八)とは年齢に於いて莫大の相違がある、爲氏はすでに耳順を超えたが、爲相はなほ弱冠に過ぎない。爲相が爲氏の敵ではないことは固よりである。されば歌道の師範家の紛争は、鎌倉時代に於いては、主として二條家と京極家との間にあつたので、冷泉家は與らない。而して二條京極の争ひは爲氏の子の爲世と爲教の子の爲兼の代に至つて一層烈しく、さながら仇敵の如く互に相陥擠して、おのれ覇權を握らうとする。折りから皇室には大覺寺・持明院の二派があつて軋轢の絶える時なく、つひには南北兩朝の端をも開くに

至つたが、爲世は後宇多帝に事へて帝師となり、その女爲子は後醍醐天皇に寵愛されて皇子を生み奉り、爲兼は伏見帝に親昵して和歌の師となり、後伏見花園二帝を養育し奉る。二條京極の紛争は兩統の軋轢によつていよ／＼その熱度を高め、兩統の軋轢は兩家の紛争によつてますます／＼激成された事は明かである。爲世が後宇多上皇の院宣を蒙つて『新後撰集』を上れば、爲兼は伏見上皇の命を奉じて『玉葉集』を上る。爲世重ねて後宇多上皇の院宣によつて『續千載集』を上り、爲藤爲定後醍醐天皇の勅によつて『續後拾遺』を上ると、『風雅集』は京極の流を汲んだ花園院の御自撰となつて世にあらはれる。かくては兩家の紛争は兩統の迭立につれていつ果てようとも見えなかつたが、爲兼は佐渡及び土佐の兩度の配流に遇つて爾來勢力も昔日の如くならず、二條家ひとり權威を恣にするとはいへ、後繼者に又然るべきものが無くて、師範家はいたづらに歌道をして萎微沈滞の狀に陥らしめてしまつた。

二條家の歌風は専ら爲家の遺風を守つて、一點の新意を加へ生面を開く心がなく、たゞまじめにおとしやかなるを旨とした、隨つて陳套は免れないところがある。されば或は父祖の正風を傳へたものとも見るべきか。

爲教は爲家の新意なく平凡なるを好まない、つとめて新をきそひ奇を求めた。その子爲兼にいたつて殊にその傾向が著しい。言葉の新古を問はず、調の雅俗を擇ばず、只管に新奇なることを求めた。さればその歌の奇抜なものはないではないけれど、ともすると姿の賤しく地口めくものがある。二條家の歌風から見ても、邪路に迷ふものと思はれたのも無理はない。二條家の歌風は古るめかしけれど、溫柔なところがあつた。京極家の新しみはあれど奇癖が見える。二條家の人は人の感情をそゝるやうな生き／＼としたところがなく、だるい、眠いやうな型にはまつた、平淡なものばかりであるかほりに、毒けがない。京極家のは皮肉な厭味らしい、而もどんざいに、わざとらしい、えこちた風のあるかほりに、まゝ人の注意を惹くやうな趣がある。要するに兩家の歌風は一長一短で勝劣を定めがたいが、二者ともに一寸法師の背競べにすぎない。

冷泉家の歌風に至りては、とり立てゝいふべきところが殆どない。爲家の歌風を守つておとなしく古るめかしい點は、二條家の風に似てゐるともいほうか。たゞし冷泉家は早く勢力を失つて歌界に覇を争ふに至らず、徳川時代に至つて二條家と並び稱せらるゝまでは、名義の存するのみであつた。

二條京極兩家の紛争は、互にわが佛尊からしめようとして、事を父祖の遺訓に託し

てさまざまの秘事口傳を捏造せしめた。就中、二條家は京極家の歌風の放縱怪奇なるのを見て憤慨に堪へないところから、家學に違ふものとして辯難攻撃を加へようが爲に、數多の僞書をまでも作つた。定家の歌學書の多くは即ちそれである。而して是等の秘事口傳といひ、歌學の書といひ、正なき事にいはれなき規則を設けて、詠歌の自由を拘束するにすぎない。後世に至つて古今傳授など、稱する奇怪なる事の出で來たのも、これが俑を作つたのである。かくて當時の歌人は師範家の束縛を蒙り、和歌は今や窮屈なる範圍に踞踏せなければならぬ境遇に立ち到つた。帥あるに一人の天才なく、歌ふに煩瑣なる規則がある。和歌はこゝに衰へまいとしても衰へざるを得ない。もしそれ南北朝に當つて、頼阿兼好宗良親王の如き多少見るべき歌人の出來たのは異數である、一般の歌界は鎌倉時代の中葉よりかけて永く衰微の運に向つた。

第五章 鴨長明と方丈記

鎌倉時代の思想を最もよく代表する文學者は鴨長明で、著作物はその著の『方丈記』である。この點に於いて、長明と『方丈記』とは國文學史の上では重要な地位を占め

るものである。

長明(一八〇八—一八七六)は京都の加茂の社の神官の子である。若い時分に源俊頼やその子の俊惠法師について和歌を學んだことがある。それ故和歌の道は最も得意とする業で、なほまた管絃の秘曲をまでも究めた。父祖の業をついで社司とならうと思ひ、安元治承の頃これをその筋にねがつたが叶はなかつたから、爾來怏々として樂まず、つひに文治三年(一八四七)四十歳の時髪を剃つて蓮胤と號し、大原山に入つて世を遁れた。

されどもかれの才學は却て隠れなく世に傳はつた。後鳥羽上皇が建仁元年(一一八一)六二和歌所を院中に再興されるに當つては、寄人の職にさへ擧げられた。この時和歌所の寄人は藤原良經・源通親・藤原有家・源通具・藤原家隆・同定家・源具親・藤原雅經・寂蓮法師・藤原俊成・鴨長明・藤原秀能・同隆信の十三人で、地下人では秀能と長明の二人のみである。長明の文名がいかに天聽に達して上皇の御氣に召したか、察せられる。されども長明の意は既に浮世を離れたものである、久しくその職に留るを欲せないので、程なく辭職してしまつた。上皇はいたくその才學を惜まれて、今一度復職させようとなされたが固く辭退して、いよいよ大原山の雲深きところに唯識止觀の旨を修

め、老莊の道を學んで、只管無爲の生活に月日を送つた。建永承元の頃更に幽居を日野山の奥なる外山に移し、そこに方丈の庵を結んで、或は勝地を探り、或は和歌や管絃に心を慰めた。この頃かれが所藏の物としては、佛像の外は、唯和歌管絃『往生要集』の抄物と箏琵琶おのゝ一張だけであつた。建暦元年(一八七二)實朝の招きに應じて鎌倉に下り、將軍の爲に歌道を談じたこともある。その著『方丈記』は鎌倉から歸つて、その翌年の建暦二年に外山の庵に於いて誌したものである。

長明が和歌にすぐれてゐたことは、地下人であつて寄人の職にあげられたのでも明かであるが、實にかれの技倆はその師俊惠にも優つてゐる。かれは革新派の流を汲むものなれども、字句洗鍊、革新派に見るが如き硬語險語は更に無く、而してどこことなく清新の風が認められる。

松島やしほくむ海人の秋の袖
月は物おもふならひのみかは
忍ばじよしほりかねつとかたれ人
ものおもふ袖のくちはてぬまに
の如きはその一斑を窺ふに足る。されども修辭の上にわざとらしい技巧があつて

自然の妙に乏しいやうである。もしそれかれの歌論は、或はかれの歌のすぐれたるよりも、更に卓見に富むものであるまいか。その著『無名抄』の一篇は、かれの歌學上の意見を述べたる隨筆的のものであるが、古今の歌學書の中でも有数の書である。見よ、かれが勅撰歌集について歌風の變遷を評するあたりの一節を。

中頃古今の時、花實共に備りてそのさままぢくに分れたり。後撰には、よろしき歌古今にとりつくされて後いく程も經ざりければ、歌得がたくして姿を選ばず心を先とせり。拾遺の頃より、その體ことの外にももの近くなりて、ことわり限なく現はれ、姿すなほなるをよろしとす。そのち後拾遺のとき、今すこしやはらぎて昔の風を忘れたり。やゝその時のふるき人などはこれをうけざりけるにや、後拾遺姿と名づけて口をしき事にしけるとぞ、ある先達語りはべりし。金葉はまたわざともをかしからんとして、輕々なる歌多かり。詞花千載大略後拾遺の風なるべし。歌の昔より傳はり來るやかくの如し。かゝれば拾遺よりのち、そのさま一つにして久しくなりけるゆゑに、風情やうく、竭き、言葉世々にふりて、この道時にしたがひて衰へ行く。昔はたゞ花を雲にまがへ、月を氷によせ、紅葉

を錦によするたぐひをかしき事にせしかど、今はその心いひつくして、雲の中にさまざまの雲を求め、氷にとりて珍らしき心をそへ、錦に異なるふしを尋ぬ。かやうに容易からずたしなみて思ひ得れば、珍らしき風情もかたくなり行く。まれく得たれども、昔をへつらへる心なれば、卑しく碎けたるさまなり。況や言葉に至りては、言ひつくしてければ、珍らしき言葉もなく、目とまるふしもなし。殊なる秀逸ならねば、五七五をよみて、七々の句は空におしはからるゝやうなり。こゝに今の人、歌のさまの世々によみふるされにける事を知りて、更に古風にかへりて、幽玄體を學ぶ事のいで來たるなり云々。

いかにその鑒識の肯綮に中れる、殆ど百世の定論というてもよい。長明は創作の才にも富んでゐたが、兼ねてまた批評眼を具へてゐたのである。否、その批評眼は、その創作の技倆よりも優つてゐたかと想はれる。おもふにかれの和歌は、この歌學上の意見を基礎として工夫鍛錬の功を経て出來たものであらう。

吾人は長明が、和歌の創作に於いても歌學上の見識に於いても優に一世を通じて指を屈するほどの價值あるを知る。されども長明の長明たるところは、その作歌の技倆でもなく、その歌學上の見識でもない。かれのかれたる價值は、只一部の『方丈記』

があるからである。『方丈記』はかれの人生觀を叙べたものである。冒頭にまづ流水池沫の譬を引いて諸行無常の理を説き、更に安元の大・火・治承の辻・風・養和の饑饉・元暦の地震など年々見聞きした事變をあげて之を證據立て、つひにかれが世を遁れて山林に交り、こゝに始めて安心立命を得るに至つた由來を叙べた一篇の哀史である。かれは世の中の有爲轉變を説いて、更にいふ、

すべて世のありにくきこと、我が身と住家とははかなくあだなるさま、かくの如し。いはんや處により身のほどに隨ひて心をなやますこと、擧げて數ふべからず。もしおのづから身かなはずして權門のかたはらに居るものは、深くよろこぶ事はあれども大にたのしむに能はず、歎あるときも聲をあげて泣くことなし。進退やすからず、立居につけて恐れをのゝくさま、たとへば雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし貧しくして富みたる家となり居るものは、朝夕すばき姿を恥ぢて諛ひつゝ出入る妻子僮僕のうらやめるさまを見るにも、富める家の人の蔑なるけしきを聞くにも、心念々にうごきて時として安からず。もし狭き地に居れば、近く炎上する時その害をのがるゝことなし。もし邊地にあれば、往々わ

づらひ多く、盜賊の難はなれがたし。勢あるものは貪欲ふかく、ひとり身なるものは人に輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧ければなげき切なり。人をたのめば身他のやつことなり、人をはごくめば心恩愛につかはる。世に従へば身くると、又従はねば狂へるに似たり。いづれの處を占め、いかなる業をしてか、しばしもこの身をやどし、たまゆらも心を慰むべき。

而してかれは世を遁れて山林に交るを處世の最良法であるとして、

念佛ものうく讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれとも、獨り居れば口業をさめつべし、必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らん。

というてゐる。かれは人生を以て無常なるものとなし、厭ふべきものとなし、而してこの濁惡無常の世の中に居て心身を勞するのは無益の事である。人里離れた山林に隱遁して自然の景氣を樂むにまさるものはないとするのである。この世は無爲に終るべし、吾人の希望は一に佛果を得るのにある、吾人の満足はひとり彼岸に達する時にあるとなすのである。故にかれの人生觀は、現世には一の希望もなく満足もな

障なるべし、いかう用なき樂をのべて空しくあたらしむる時を過さんというてゐる。これは佛敎にいはいふ一切盡捨の趣意で、またかれが遁世の極意を示したものであらう。それ長明のいふところ期するところはかくの如くである。かれは果してその期するとほりに、山林にかくれて居て満足したものであらうか。雲烟交はる外山のとほり、方丈の草庵に起臥して、悠然として閑居を樂んでゐたところを見ると、天地の間には名利よりも一層高尚なるものゝあることを認めてゐたかのやうである。一道の光明は常に朧げながらもかれの心の眼に映じて、かれをして名利の念を忘れさせるところがあつたかのやうでもある。かれはいふ、一期のたのしびはうたゝねの枕の上にはきはまり、生涯の望はをりゝの美景に残れり」と。かれはまたいふ、おほかた世をのがれ身をすてしより恨もなく恐もなし」と。更にいふ、住まずして誰か閑居のたのしびを知らん」と。されどかれは本來名利の男である、名利に憧るゝ故に失望して世を遁るゝに至つた男である、見ざる聞かざるの境涯にゐればこそ名利からも遠ざかることも出來たのではあるまいか。かれは、草の庵を愛するも科とす、閑寂に著するも障なるべし」というてはゐるが、その實は山林の閑居を以て諸縁を閑却する無

二の好適地とするもので、現に、おのづから都に出ては乞食となるを恥づ」とさへいうてゐる。昔支那の玉唐踞が「小隱は陵藪に隠れ大隱は朝市に隠る」というたが、實際そのとほりで、山林の閑居のみを以て諸縁を閑却する無二の好適地となすものは、いまだ全く名利を超越することが出来ないからである。物我の差別見があるからである。大悟徹底せないからである。長明が何事も消極的行爲に出て山林にのみ執着するものも、すでに物我無差別の境をば認めながら、いまだ十分にその境に遊ぶことが出来なかつたからであらう。縁にふれては無明の雲のとざすことがあつたからであらう。吾人は西行法師が處定めず自然の境に悠々自適し、日蓮上人が衆生濟度の爲に咆哮したのを、長明が山林にのみかちりついてゐたのに比べて見ると、おのづかの志すところは異なるとはいへ、長明よりも西行は大きく、西行よりも日蓮は大きい人物であつた。遂に大悟の境にあつたものであらうとおもはざるを得ない。流布本の『方丈記』の卷末に誰やらが、

月かげは入る山のはもつらかりき

たえぬ光りを見るよしもがな

當世の澆季を歎じ、或は處世の困難を叙し、或は閑居の妙味を説いてはゐるが、吾人はつひに筆者が人生の名利を棄てようとしていまだ棄てきれず、幽る苦慮煩悶する状態を見る。

かく『方丈記』はかれの苦慮煩悶に驅られて湧きいでた一篇である。文に生氣があることはいふまでもない。その上典雅なる文字、壯麗なる章句は、譬喩に富み、對句に富んで、いかにも趣味が豊富である。たゞしその修飾があまりに多きに過ぎたかの嫌があつて、やゝ煩はしいところがないでもない。その章句の佛書もしくは漢唐の文に據ることの多きは、なほその所説のかれらに基くところの多きに似てゐる。中には往々『白氏文集』『文選』または『維摩經』などの字句そのまゝを轉載したかと思はれる點もある。さはれ鎌倉時代に於いては、この書が文章としても有数の作であることは勿論である。かの『平家物語』の文章が處々この『方丈記』の文章を改作したかと思はれるところあることは特に注意すべきことであらう。

長明にはなほ『四季物語』といふ著書がある。これは大原山に入つた時分に書いたもので、月ごとの行事や景色など書いてある。文章は『方丈記』に比べてはやゝ柔に、中

古文めくところがある。

その外『發心集』『瑩玉集』『文字鑑』など、長明の著作として世に傳へられてゐるが、後人の偽作であるといふ説が恐らく眞であらう。

第六章 紀行と日記

鎌倉幕府の創立は京鎌倉の交通を頻繁ならしめたので、自然その旅行中に見きよめた名所舊蹟や之に對する感想などを書いた所謂紀行の類が多く世に出でた。鎌倉文學として重きをなす程のものではないが、『海道記』『東關紀行』『十六夜日記』等今に傳へて名高いものである。

『海道記』は源光行の撰で、『東關紀行』はその子親行の作である。光行は光遠の三男で、後鳥羽順徳の朝に仕へて、正五位下河内守兼大盛物に任せられた。和歌をよくして、その歌は『千載集』以下の勅撰歌集にも見えてゐる。承久の變に後鳥羽院に與みしたので、その時捕はれて斬られる筈であつたのを、子の親行が鎌倉に奉仕してゐたので、歎願して赦免せられた。親行も亦歌を能くして、その歌が『續古今』『續拾遺』などに載つてゐる。『海道記』は後堀河天皇の貞應二年(一八八)三月、東關紀行は四條天皇の仁

三年(一九〇)八月に京から鎌倉に下つた時の紀行である。二書ともに漢文の體に富んだ和漢混和體の文で、對句などの多いところなどは、かの支那の六朝時代の四六駢儷體の文が思はれる。詩文の句を引いたり、佛語を用ひたりして、いかにも詞藻は富贍である。中心思想は佛敎的であつて、名所舊蹟などに對しても面白いといふよりは悲しいといふ感を起してゐるなどは、全く時代の特徴の表はれてゐるものといはねばならぬ。『東關紀行』は『海道記』に比べては平明の書き方で、その文が『源平盛衰記』のと殆ど全くおなじものであると思はれるところがある。『盛衰記』の作者の所業であらうか。とにかくに、この二書は和漢混和體の紀行では最古のものである。

『十六夜日記』は『海道記』や『東關紀行』よりは三十年あまりもおくれて出來たもので、阿佛尼といふものゝ作である。阿佛尼は順徳院の皇后安嘉門院に仕へて四條といひ、後に藤原爲家の後室となつて爲相爲守らを生んだ人の法號である。勅撰歌集などには安嘉門院四條というてその歌が載つてゐる。歌道について一隻眼を具へてゐたことは、その著『夜の鶴』といふ書に歴代の歌集を論評してある手際でも明かである。その子爲相が成長して冷泉家の一派を起すに至つたのは全く母阿佛尼の力である。この『十六夜日記』を讀んだものは、いかに阿佛尼がその子供の爲に、所謂蔭になり日向

になつて、保護を加へ教養を加へたか、察せられるであらう。爲家の歿後、曾て爲家が爲相に與へおいた播州細川の庄を兄の爲氏が横領したので、阿佛尼は之を訴へる爲に鎌倉に下つた。時は後宇多天皇の建治三年(一九三七)である。かくて鎌倉に留つて四年目の弘安三年に、かの旅路にて見聞きした事や、その後のたよりに贈答した歌などを書きつらねたのが、この日記である。この時の壯舉は、元來阿佛尼が「子をおもふ心の闇はなほ忍びがたく、道をかへりみる恨は遣らん方なくて、數百里の旅行をも意としない母子の愛情から出でたものであるから、見きよすることは一つとして斷腸の思をさせないものはなかつたのである。それゆゑこの日記は、見るもの聞くものにつけて、或は道を思うて今の世をなげき、或は子を想うて亡夫を悼むなど、悲哀怨恨の情全篇に充つ。文章は中古調の擬古體であるが、内容はどこまでも鎌倉式である。

阿佛尼は訴訟の決定を見ないで、弘安六年九月に鎌倉に歿した。その著書になほ『轉寐の記』『乳母の文』『阿佛坊口傳』などいものがある。『うたゝねの記』は、建治元年爲家の歿後、遠江の知人に誘はれて都を出で、暫くかの國に逗留したことのあつた時の紀行で『乳母の文』と『阿佛坊口傳』とは、共に『夜の鶴』とおなじく、歌學に關する意見をの

この時代に日記と稱すべきものも亦澤山ある。『玉海』『明月記』『二長記』『殿記』『猪鬚關白記』『玉葉』『平戸記』『吉續記』『管見記』『吾妻鏡』『辨内侍日記』『中務内侍日記』の類は、皆それである。されども辨内侍と中務内侍の日記以外は、いづれも漢文又は擬漢文體のもので、純國文體のものではない。『辨内侍日記』『中務内侍日記』は國文で書いてはあるが、宮廷に奉仕してゐる婦人の筆として、自然貴族文學の流を汲んで、まゝ用語などに新らしいものを見る外、全く擬古的のものである。散文界に於ける貴族文學の殘骸たるに過ぎない。

第七章 小説と軍記物語

この時代に於いて、小説の衰へたことは、和歌のそれよりもなほ甚しい。和歌はつひに衰へたけれども、一度は殆ど空前の繁榮をもした。小説にはそれが無い。『源氏物語』以後に於いて既に見るべきものゝなかつた小説は、この時代に至つて更にその傾向は一步を進めたのである。一縷の命脈はわづかに『松浦宮物語』『住吉物語』『若の衣』『風につれなき物語』『石清水物語』『山路の露』などの數篇につながれてはゐるもの

、根底に流れてゐる思想に時代の俤が見えてゐるのみで、趣向といひ文章といひ前代の摸倣に過ぎない、貧しいものゝみである。

かくて小説の衰へたにはいろいろの原因もあらうけれど、第一には和歌の衰へたと同様に、思想の枯渴想像の缺乏して然るべき偉才の出でなかつたこと、第二には社會の劇變それ自身が既に詩的であつて、單に事實を記載するだけでも小説にもまさつて讀者の感興を惹くものゝあつたこと、第三には一般社會の趣味減退して實用を重んずる傾向のあつたこと、これが重なるものであらうか。それ故にたま／＼世に出た小説といふ小説は、すべて剽竊摸倣を事として殆ど同工一體のものばかりとなり、見るに足るものがなくなつたのである。

かやうなわけで小説の衰へたことは、一方に於いて、社會の歴史的事實を土臺としてそれに多少の想像を加へた作物を世に出でしめた。丁度前代の小説の衰へた場合に、過去を回顧し憧憬するあまりに『大鏡』『榮花物語』または『今昔物語』などいふやうな雜史があらはれ纂録類があらはれた如く、この時代に於いても幾多の雜史や纂録類があらはれたのである。併しながら、前代の文學は宮廷の文學、貴族の文學であつたから、雜史や纂録類も自然その色を帯びて宮廷もしくはそれを中心とする社會の

なほ宮廷もしくはそれを中心としてその過去を憧憬するといへ、一般の社會は社會全般の出來事に興味をもつてゐたので、自然廣く社會全般を動かすやうな大事變を材料としたものが行はれた。その材料が保元平治の亂や源平の合戦を骨子としてゐるので、世にこれを軍記物語といひならしてゐる。史的事實を材料としてそれに幾多の想像を加へておもしろく作り成してあるところは、全く從來の雜史と異なるところは、ないが、たゞ材料が戦争を骨子として文勢も亦これにつれて剛健である點から、他の雜史と區別し易い爲にかく呼び做すのである。體裁に於いても『大鏡』や『榮花』とは稍、異なつて『今昔』などの體を加味してゐる。

この時代に軍記物語としてあらはれたものが四つある、一に『保元物語』二に『平治物語』三に『平家物語』四に『源平盛衰記』これである。これらは孰れも史的事實に根據して潤色したものであるから、或程度までは歴史としても見られるが、武器馬具などを寫せるあたりは到底正史にも見られぬほどに細かく當時の好尚を窺ふことが出来る。正史として著はした書物すら測らざる誤謬はあるものを、ましてこれは正史ではないから、考證的の眼で見たならば、幾多の誤謬のあることはいふまでもないが、

もしその時代の概括的印象を讀者に與へるといふ點に至つては、寧ろ正史にもまさるものがある。正史では人物も事件も多くは死物の如く列擧されてゐる、随つて考證は的確であつても概括的印象は弱く鈍く浅い、この軍記ではすべてが活動的に展開される、随つて個々の事實には多少の誤謬はあつても概括的印象が強く鋭く深い。吾人は實にこれらの軍記を繙いては、それらの描ける武人のさまや戦争の様子が一大活畫の如く展開される思ひがする。かの頼山陽の書いた『日本外史』はその史的事實をば多くこの軍記にとつて文章までもそのまゝを漢澤したところのあるものであるが、いかに幕末に當つて志士の勤王心を鼓舞したかを思ふならば、その底本たる軍記のいかばかり印象的であるか、察せられるであらう。この活動的印象的なところのあるのが軍記の一大特色である。これ一つにはその材料とした史的事實が強ちに考證的の骨ばかりでなく、幾多想像の肉を加へてあるのと、一つにはその文章の然らしめるところである。

軍記の文章は殆どこれまで例を見ざるほどに明快である、直截である。中古文などでは事を叙するに多くは雅語汎語を用ゐる、随つて言ひまはしが婉曲に上品な温いところはあるが、印象的なところが乏しい。吾人は『源氏物語』でも『榮花』『大鏡』の如くその輪廓を思ひ浮べるのみである。これ一つには時代といふ幕を隔てゝゐるからでもあらうけれど、雅語汎語を用ひてゐることが大なる原因を成してゐる。軍記では多く當時の俗語・術語・殊語を縦横に用ひてゐる。たとへば、爲朝はただけ高うをせながなる男のいたう逞しきが、など、廣汎なる意義の雅語を用ひないで、直に具體的に、

爲朝は七尺ばかりなる男の目かど二つに切れたるが

といひ、いかめしう装うてあゆみ出でたる」といはないで、これも

紺地に色々の絲を以て獅子丸を縫ひたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて白き唐綾を以ておどしたる大荒目の鎧、同獅子の金物うちたるを著るまゝに、三尺五寸の太刀に熊皮の尻鞆入れ、五人張の弓長さ七尺五寸につく打ちたるに、三十六さしたる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等にもたせてあゆみ出でたる

といふが如く、意義の廣汎にして印象の臙げなる語を避けて、成るべく明確に直截なる語を用ひる。抽象的叙述をさけて具體的描寫をする。事件の緩急に應じて自由に長短の句をつかひわけける。是に於いてか軍記の記事は活躍する、生氣に充つ、戦争

を叙すれば矢叫びの聲耳にひくかと疑はれ、惜別の情を寫せば涙の滂沱たるさま目に見る如くに思はれる。『保元』と『平治』『平家』『盛衰記』いづれも以上の如くであるが、その中にも『保元』と『平治』の物語は質樸にして修飾少く稍古雅の風具り、『平家』と『盛衰記』と時に技巧に富み華麗に過ぎたる弊はあるも流暢、特に『平家』には一種の句拍子のあるところもある。

『保元』も『平治』も作者が詳でない、或は葉室時長の作といはれる。時長は生死の年代は明かでないが、兄弟に元久年間(一八六四頃)とか延應年間(一八九九頃)とかに死んだものがあるから勿論その時分の人で、伯父出羽守盛方の母は平忠盛の女であり、平時忠の室と建春門院の女房帥といふものとは伯母であつたといふから、保元平治の事蹟は幼少の時から耳馴れてゐたことであらう。さばれ時長といふ説は、水戸家で編んだ『参考保元物語』の凡例に『醍醐報恩院所藏舊記云葉室時長作』とあるを採つたもので、その外に格別確かな證據があるといふのではない。この二つの物語とも異本が數種あつて、章段の順序字句の次第等が一樣でない。これ恐らくは後世寫し傳へる際に知らずゝ誤脱を生じたのもあり、故意に改竄添補したのもあるであらう。今日傳はつてゐる最古の本には、章段も分たす題名も冠してない。

『保元』と『平治』の二書は、保元平治の間に起つた騷擾の首尾である。『保元』が後鳥羽法皇の崩御から書き始めて保元の亂を叙し、『平治』が信西と信賴の不和から端をひらいて平治の騷擾を寫すところ、事件も大方連続し筆も亦大抵似通つてゐるから、この二書は題名を異にしてはゐるが、丁度正續のやうなものである。『保元物語』一篇の主人公ともいふべきは藤原賴長と源爲義とで、『平治物語』では藤原信賴と源義朝とである。『保元』に鎮西八郎爲朝を精叙してあると同じく、『平治』では源賴朝の事に力を入れてゐるやうである。『保元』に於いて賴長に爲朝を對せしめてゐるのは、『平治』に於いて信賴に義平を對せしめてゐるのに似てゐる。篇中に於ける重要な人物の勇怯剛臆善惡正邪等の性情は、十分とまでは行かないが、多少活躍する趣が見える。和漢の先蹤や古聖賢の言行などを引いて、書中の人物事件を評論するところは、所論の當を得たるが多く、作者の史眼のほどをも見るに足り、人智の測りがたきに遭うて忽ち佛神の冥慮を説き、現世の成敗を見て直に過去の業報となすが如きは、更に佛教思想のいかばかり作者の腦裡を支配してゐたか、察せられる。併しながら、この佛教思想も『保元』や『平治』では未だしい『平家物語』『源平盛衰記』に至つては殆ど全篇を掩ふ、否佛教思想

を表はさうが爲に出来たかときへ思はれるほどである。

『平家物語』は言ふまでもなく平家一門の榮枯盛衰をうつしたもので、卷の数は十二、章を設けること百八十ばかりであるが、異本十數種もあつて一定しない。『源平盛衰記』は、源平二氏が興亡の迹をのべたもので、大體の結構も時代も略『平家』と同じであるけれど、これは四百餘章四十八卷から成る大部のものである。『平家』の作者は葉室時長、菅原爲長、吉田資經、源光行、願教法師など異説さまざまあるが、信濃前司行長といふのが普通の説である。行長とは如何なる人か詳かでない、『尊卑分脈』といふ書物に中山中納言顯時の孫、治部大輔行隆の子に行長といふ人があれど、それと定めがたい。『盛衰記』の作者は『保元』『平治』の作者たる葉室時長といふ説があれど、かの二書と『盛衰記』とは記事の異なるところもあり、文體の異なる點もあるから、恐らく時長ではなからう。つまり『平家』も『盛衰記』も正確なる作者はわからないのである。またこの二書の關係については、あるひは『平家』は『盛衰記』を省略したものであるといひ、或は『盛衰記』は『平家』を増補修訂せるものであるといふ説もあるが、これは後説がよいとおもふ。『平家』は元來琵琶法師が琵琶に合せて語る爲に作つたものであるから、琵琶法師の流儀々々で多少書きなほしたところもあらうが、讀み本として見ると物足らぬ點も少くないので増補修訂せるものが出来た。異本の多いのもこの故である。かの長門本と稱する『平家』の如きすら、卷數が二十もあり、随つて内容も著しく豊富で、殆ど別本の如き觀がある。されば『盛衰記』が『平家』に比べて、事實の詳略、文體の異同はあれど、大體の結構が同じく、傳ふるところの消息も亦おなじのを以て見ると、これも實は『平家』最後の増訂本で、異本の一つと見てよからう。菅茶山が『筆のすさび』に『盛衰記』は平家物語と東鑑とを合せ作りたる者と見ゆといへるは至當の見解とおぼゆ。『平家』の文章は簡潔なるに『盛衰記』のは冗漫潤飾に過ぎ、記事も亦『盛衰記』には『平家』の注釋めけるところがあつて繁縟、餘事が多い。この二書を比較するに、もとより一長一短はあれど、全體の結構と文辭と就中詩味を帯びてゐる點に於いて、『平家』の優つてゐることはいふまでもない。『平家物語』は實に散文を以て書かれたる一篇の叙事詩である。

平相國清盛が一朝風雲を得て起つや、積年の桎梏を免れて自由の天地に出でんとするものゝ如く、その眼中には歴史もなく習慣もなく、あらゆる舊思想舊制度を破壊し盡さうとするかに見えた。これが爲には法皇を幽閉し、公卿殿上人をも迫害し、寺門をも焼き、數百年來の帝都をさへ遷さうとした。その破壊的革命的勇猛心や實

に壯絶なるものであつた。而してその勢力を扶植し鞏固にしようが爲には、その女を納れて皇后となし、やがては帝祖とまで仰がれ、一族の公卿三十餘人、所領日本の半國にも超えた。然るに、この時一門の子弟は、はやくも詩歌管絃の宴に袖を絞り、烏帽子のためやうにすら憂き身をやつす風流の貴公子と成りはてた。父祖が馬上に天下を取つた當年の意氣は、今はいづこに求むべき。清盛が全力を注いで破壊しつくさうとした舊思想舊習慣は却て一門の子弟を軟化しつくしたのである。されば、榮華の夢一たび富士川の水禽に驚かされては、さまで猛威を逞しうした清盛も徒に悶死に終り、その死屍いまだ冷かならざるに一門悉く西海の藻屑と消え失せた。その間わづかに二十年、烏うたひ花かをる春いまだ幾何ならで、早くも秋の凋落にあふ。平家が榮枯の事蹟は、頗る詩趣に富みたる夢である。

『平家』の作者はこの夢の如き詩趣に富みたる材料をとつてこの物語を作つた。この物語が全篇を通じて詩的であるのも當然である。況や各章また個々に詩趣を帯びたるもの多く、而して更に雄大壯烈なる戦争記を以て經とし、優婉悲哀なる戀愛談を以て緯として全篇を織りなしてあるに於いてをやである。妓王妓女を始として小督横笛千手さては宇治川の先陣木曾殿の最期扇の的大原御幸の如きが詩趣に富んでゐることは誰も知る。その外一々列挙するならば限りのある紙幅では到底盡すことは出来ない。

『平家物語』が佛教思想に富んでゐることは既に一言した。「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕れるもの久しからず、たゞ春の夜の夢の如し、猛きものも遂には亡びぬ、偏に風の前の塵におなじ」といふに筆を起したる、建禮門院が六道廻りの物語に篇を結びたる、一は冒頭、一は總收として、共に作者がこの一篇を述作せる趣意目的をあらはすものではあるまいか。祇園精舎の鐘の聲をきいて物の哀をおぼゆるもの、誰れか平家一門が興廢の迹を見て無常の感を起さざるものがあらう。吾人は『平家物語』を繙いて見ると、戦闘の壯烈なる光景をおもひうかべる中にも、いつとなく悲哀の情にそゝられて、沙羅雙樹の花の色に盛者必衰の理をおもふ作者の心裡がうなづかれずにはゐられない。これを各章について見るにも、妓王、妓女、佛御前、さては小督の局、横笛千手の前、維盛の北の方、建禮門院、などのかよわき女性の末路は暫くおくも、熊谷直實、遠藤武者、盛遠、瀧口、左衛門時頼の如き勇士すら、つひには佛門に入つて安心立命を求め、結果に終る。その外全篇を通じて叡山の記事の多いのも亦以て作者の意の存するところを察するに足る。

かくて『平家物語』が全篇佛教思想に充ち各章またその趣味に富むことは、この物語が全篇詩趣あると同時に各章が個々別々に詩味を帯びてゐるのとおなじい。

以上は主として『平家物語』について述べたのであるが、もとより『平家』の増訂本とも見らるべき『源平盛衰記』が大體に於いて『平家』と異なることのないのは勿論である。たゞ『盛衰記』の『平家』に異なるところは、その散文的なることである。材料の取扱方に於いても、文體に於いても、全體の氣分に於いても、頗る散文的であつて詩趣に乏しい。『平家』の作者は想像に訴へ感情に訴へる、『盛衰記』の作者は智に訴へる。事情を理解させる點に於いては、『盛衰記』がまさる、趣味を感せさせる點に於いては、『平家』がまさる。さればこの二書は軍記物語中での精髓である、隨つて鎌倉文學の逸品である。後世の文學に材料を供する點に於いては、この二書に比すべきものがない。

軍記物語の外纂録及び雜史になほ『十訓抄』古今著聞集『愚管抄』等の數種がある。『十訓抄』三卷は『可施人惠事』『可離憍慢事』『不侮人倫事』『可誠人上事』等の十部門を設けて、各部門の下に和漢の逸話の相當すべきのを纂録したものである。作者については種々の説があれど、要するに詳かでない。自序の中に、建長四年の冬神無月の頃、おのづから暇あり、心静かなるをりふしにあたりつゝ、草の庵を東山の麓に占めて、蓮のうづから西土の雲にのぞむ、念佛のひまにこれをしるしとあるを見れば、その頃の僧侶もしくは隠士の手になつたことだけは想像される。

『古今著聞集』二十卷は、また『十訓抄』とおなじく、作者が見聞きした事柄や和漢の書物中に見えた事柄で、面白味のある短篇ものゝ纂録である。尤も『著聞集』は『十訓抄』の如く教訓にしようとして編纂したのではなく、『今昔物語』『江談抄』等の體に倣ひ、神祇より始めて禽獸魚蟲に至るまで類を分けて集めたに過ぎない。作者は橘成季と云うて、後深草天皇の頃の人であるが、その傳記は詳かでない。この書は建長に著したる由、自序に見えてゐる。

『愚管抄』は順徳院の承久二年に出來た雜史で、著者は慈鎮和尚であるといふ説があるが、書中の記事に反對の證據が多く見えるから、僻説たることはいふまでもない。山門の事僧綱の事などを委しく記してゐるのと、詞づかひの高尙であるのを思へば、何れ山僧の著であることは察せられる。卷の一二は皇帝年代記と云うて神武天皇から順徳天皇までの事蹟を略記し、以下卷の六までは當時の山門の事鎌倉の事天下治亂の事等を記し、第七卷は専ら佛法の道理を歴史の事蹟にあてはめて論評し、山門の事僧綱の事などを書きのせてゐる。全篇七卷の中四五六の卷あたりが最も見

るべく、『彌世繼』の缺陷を補ひ、『東鑑』などの對照の料となつて、有益なる史である。

以上の三書は文章が平易質樸の書き方で、事實も纂録もしくは雑史としては比較的想像の加はらないものである。然れどもなほ時に虚妄の巷談俗説の混じてゐるを免れない。就中『著聞集』の中には、猥雑で見るに堪へないやうな記事さへも見えてゐる。史料としては『愚管抄』が最もすぐれてゐるが、文學としては他の二書に一籌を輸するかに思はる。佛教思想が何れも根本思想となつて流れてゐることは、最早いふまでもあるまい。

これらの外、雜史に『彌世繼』といふものがあつて、『今鏡』の後をうけて高倉安徳天皇あたりの事蹟を記してある由、『増鏡』の序には見えてゐるが、嘉吉應仁の頃の兵亂にでも失せたものか、今は傳はつてゐない。また現存せる雜史纂録に『今物語』『發心集』『沙石集』『寶物集』などいふものもあれど、いづれも文學的價値のないものばかりである。

第八章 漢文學の衰微

漢學は前代の末に於いて既に著しく退歩して、京都の大學を始め公私の學塾は共に衰微の境に入つたが、この時代となつては、その傾向更に甚だしく、國學の如きは全く亡びて、唯一つの學校ともいふべきは武藏國の金澤文庫ばかりであつた。これは花園天皇の正和五年(一九七六)の頃、北條越後守顯時が金澤の稱名寺に建てたもので、その子の顯貞が繼いで之を經營し、群書を集めて、一族の子弟を始め學問に志のある輩を選んで入學させたのである。當時大江菅原等の儒家は、その後裔連綿としてゐるものゝ、世の注意を惹くほどの人物がない。その學問は死學問で、訓詁記誦を事として、唯わづかに古來の典故に通ずるに過ぎない。大江廣元・三善康信・菅原爲長の如きは、鎌倉時代の儒家としては、鐵中の錚々たるものであるが、廣元・康信は鎌倉幕府の帷幄に參したが、爲にその名を知られ、爲長に至つては僧圓爾と儒佛兩道の優劣を論じて醜名を傳ふるばかりである。かれといひこれといひ、何等の氣魄もなく、能力もない。かゝれば上下一般漢籍を講ずるものが少く、四道の研究は全く打絶えて、天皇の御學問としても、たゞわづかに一部の『群書治要』を講明せさせ給ふのみであつたといはれる。正格なる漢文を作り得るものは次第に減少し、武人の間には之を讀み得るものすら殆どない。是に於いてか、和漢の語格を混同した一種異様な擬漢文體を生ずるに至つた。試に『東鑑』の一節を掲げて一斑を示さう。

宋人和卿造畢唐船、今日召數百輩、疋人於諸御家人、擬浮彼船於由比浦。即有御出右京兆監臨給信濃守行光爲今日行事。隨和卿之訓說、諸人盡筋力而曳之。自午剋至申斜。然而此所之爲體、唐船非可出入之海浦之間、不能浮出。仍還御。彼船徒朽損于砂頭云々

この時代に出來た『台記』『人車記』『玉海』『明月記』『山槐記』『百練抄』『貞永式目』等は勿論、その外書牘文などは悉くこの種の文體である。國文の中には漢語の加はること多く、所謂和漢混和文體の著しい發達をば見るに至つたが、漢文學は却て衰微の頂點にあつたことが推測されるであらう。

かく世間一般に漢文學の講究の廢れた時に當つて、一道の曙光が緇徒の間にあらはれた事は注意すべき要件である。一道の曙光とは何か。朱子學の傳はつたことが即ちそれである。朱子學傳來の時期については諸家の説まち／＼ではあるが、當代の中葉から我が僧侶の海外に出づるものに道元・聖一・大明・大應・月林等があり、かの僧の歸化するものに道隆・普寧・正念等があり、宋亡びて元の興るに及んでは祖元・一山等も亦來朝歸化したから、この間に於いて朱子學の傳來したことは疑ふべき餘地がない。現に金澤文庫の創立者なる北條顯時が朱子の『小學』を讀んだといはれてゐるのい。されば朱子學は、順徳天皇の建暦元年（一八七一）に、僧俊蒞が傳へたといふ説が或は眞かも知れない。

されども、當時朝廷の儒臣はなほ徒らに訓詁を事として新註をよるこばない、關東の風は將門の人すらなほ未だ聖賢の道を講ずる素養が足りない。朱子の學も傳來はしたものの、普及の運に至らず、今は只緇徒が掌中に養はれて、ひろまるべき好時機の到るを待つかの如くである。

第五編 室町時代の文學

第一章 總說

室町時代は、後醍醐天皇の建武二年(一九九五)に足利尊氏が叛旗を鎌倉に翻して自ら征夷大將軍と號した頃から、後陽成天皇の慶長八年(二二六三)に徳川家康が征夷大將軍となつた頃まで、およそ二百七十年ばかりをいふ。この間には、政治上の出來事からいふと、最初に南北兩朝對立の時代があり、最後に織豊二氏の時代があつたが、こゝにはさまでに細分すべき必要がないから、すべてこれを一括して室町時代といふのである。

この時代の初には、後醍醐天皇が元弘三年に北條氏を亡されて、中興の偉業も成就したから、文藝も今こそは花咲く春にあうであらうと想はれた。然るに事實は豫想到に反して、廟堂の諸公は徒らに一時の安逸を謀り、天皇も亦漸く政治に倦ませられ、内奏は頻りに行はれ、將士の行賞も不公平のことがあつたので、久しく武門の政治に慣れた將士の中には早くも武政の昔を夢みるものもあるやうであつたが、建武二年つひに足利尊氏が首魁となつて叛旗を翻し、自ら征夷大將軍と號し、延元元年京都を陥れて持明派の皇統を擁立することゝなつた。是に於いて後醍醐天皇は吉野に蒙塵せられ、楠見・新田らを始め勤王の將士これに隨ひ奉つて恢復を圖らうとする。これより五十餘年の間は戦争の止む時がなく、武士といふ武士はいづれかに加擔して戰鬥に従事し、上達部殿上人の輩もその位地に安んずることが出來ない。かくて尊氏の孫の義満の代になつて、北朝の天子後小松天皇が正位を踐むことに定まつて、兩朝の和議は成立した。世の中は一時靜穩無事になるかに見えた。然れども平和は表面ばかりの假裝であつた。諸地方にはなほ小戦私闘は殆ど絶えまがない。鎌倉の管領は將軍に拮抗する、大小名は大小名でいがみ合ふ。かくて嘉吉の争ひとなり、應仁の亂となつた。應仁の亂は數十萬の軍兵が京都の地を戰場として、十一年間の長い年月に亘つて、争闘をつゞけたのであるから、京都の大半が兵燹にかゝり、奇籍珍寶が焼け亡びたことはいふまでもない、社會の秩序もこれが爲に全く破壊されてしまつた。これより將軍の威令は寸毫も行はれない、天皇の詔勅も顧みるものがない。諸國の豪族四方に割據して互に虎狼の慾を逞うし、六十餘州行くところとして干戈の響が聞える。世は所謂戰國時代となつたのである。永祿の頃、織田信長尾張に起つて近畿地方を征定し、將に足利氏について天下に號令せんとしたが、中途にして逆

臣明智光秀の毒手に斃れた。豊臣秀吉織田氏の偉業をついで全國を平げたが、征韓の役などがあつて、人氣ははまだ鎮まらない。元和元年に徳川家康が豊臣氏を亡すに及んで、天下は久々で平和の緒を得たのである。

かくの如き状態であるから、この時代を通じて、庶民の困弊は實に甚しいものであつた。南北朝の戦争の頃は言ふまでもない。南北合一の後と成つても、天下が稍々小康の觀があるにつれて、將軍義満や義政の驕奢は際限もなく、無用な土木や興宴に苛税を誅求する。在京の諸侯も之に倣つて、盛んに第宅を構へ奢侈を競ふ。かういふ次第で、士民の困窮は南北戦争の當時にも譲らない。應仁以後の悲惨な有様は殆ど口にいふことも出来ないほどであつた。後柏原天皇御在位の頃には、宮城の如きも甚しく頽破して、内侍所の御燈明の光が外から見えたといはれてゐる。されば公卿なども衣食に安ずることが出来ないで、縁故を求めて、地方に漂浪するものも多くなつた。この時代の末葉に當つて泉州堺に文學の種子を植えつけ、江戸時代に難波文學と成つて現はれたのも、この頃の公卿が大内氏を頼つて山口に下らうとしたのが、堺あたりに徘徊したからであるといふ。

尙武の氣象は鎌倉時代のそれよりも一層盛んであつた。所謂死を見ることは歸するが如し、只管面目を重んじて卑怯未練の舉動を無上の恥辱とし、いよ／＼の場合となると、自ら腹を一文字八文字十文字にも掻つ割いて、その上に臍腑を掘み出して辭世の句を詠するものすらあつた。この尙武の氣象と廉直を重んじ信義を重んずる道德的觀念と結びついた、所謂武士道なるものが著しく發達した。これ一部は三代將軍の時管領の細川頼元などが率先して獎勵したからでもあらうが、一部は當時の武士の多くは參禪した結果、所詮無常の人生であるから、果敢ない命もおなじものなら義の爲に捨てようと思がけたからでもあらう。而してこの氣風は單に武士の間にのみあつたのではなく、公家達にも婦女子にまでもあつたのである。公家達に尙武の氣風の移らうとする傾向は、鎌倉時代の末に於いても既にあつたのであるが、この時代になつては、是等の人々も時としては自ら兵器を把つて戰場に立つことであつたので、自然に一層著しくこの氣風を發達させたことゝおもはれる。婦女子が義に勇み貞操を重んじたことは、社會の表面に立つ男子の氣風がかやうであつたから、その自然の感化の及んだのであらう。然れども社會の人の數ある中には、武家であつて公家達の優柔不斷なる氣風に化せられたものや、武士道の意義を履き違へたものもまゝあつたことは勿論である。就中、嘉吉應仁以後の世となつては、武士道

の眞意義は殆ど失はれたかときへ思はれる。道義地に墜ち、法令その効を失ひ、吞噬搏撃をのみ事とする世の中に、廉直を重んじ信義を重んずる武士道の眞意義が失はれたと思はれるのも不思議のない現象であらう。この頃から、人々はなほ剛強を尙び然諾をば重んずるものゝ、後世の男達をとこたちなどの如く、理の是非事の善惡を問はないといふやうな傾向が生じた。一朝の然諾の爲には身を粉に碎くものはあるも、必ずしも信義の爲に生命を棄てるものは少い。剛強一邊の輩には、大功は細瑾を顧みずといつて、斬り取り強盜をなしても武士の面目に關することはないと考へるものもあつたのである。我が狼慾の犠牲としては、最愛の兒女をも敵に嫁せしめ、山海の恩ある父母をも人質として敵陣に引渡した戰國時代の事を想ふならば、誰れかまた武士道の眞偽を問ふものがあらうぞ。

尙武の氣象の盛んなるにつれて、遊戯の如きも多くは之に伴ふ活潑雄壯なるものが行はれたが、また一方には軍陣の間に於いてすら閑雅瀟洒なる茶の湯を弄んだり、田樂猿樂・白拍子等を招いて遊ぶことも尠くなかつた。殊に義滿義政などは士民の難儀をしてゐるのにも頓著せず驕奢を極めたから、世の中の嗜好も勢ひ殺伐な事を嫌つて優美閑雅な娛樂に傾いた。能樂の起つたのも、狂言の出來たのも、この頃の事である。その他連歌・蹴鞠・園藝なども盛んであつた。要するに、美術や工藝の上に東山時代といふ一紀元を作つたことを想へば、時代の嗜好も大方察せられるであらう。是等諸種の遊戯藝術は嘉吉・應仁の後となつても廢れることなく、織豊時代も尙一般に行はれた。この時代に美少年を愛嬖する、所謂男色といふことが始まつてゐたことは注意すべきことであらう。

佛教の活躍といふことはこの時代にはなかつたが、前時代に起つた禪宗・一向宗法華宗などは大に盛大となつた。隨つて其等の佛教的思想が人心に及ぼした影響は莫大なるものであつたが、中にも禪宗の教理が人心を支配したことは著しいもので、時代の趣味も大半はその左右するところであつたといつてもよい。一向宗法華宗が盛大になるにつれて、干戈を動かす脅略を逞しうして、破戒無慚の状態に陥つたことは、平安王朝末葉の叡山・根來等にも譲らなかつた。天文十七年耶蘇教が渡來して、一時は九州は勿論、關東諸州から奥羽加州等にも信徒を有するに至つたが、未だ一般の國民的信仰を形成するまでに至らなかつた。

時代がかういふ有様であつたから、文學は大に衰へざるを得なかつた。尤もこの時代の初には幾分か望もあるらしく見えたが、間もなく南北兩朝の争となつたので、

却て沈衰の状に入つたのである。多少素養のあるべき堂上家はその地位が安固でない、武人には暇がない、百姓町人には頭がない。そこで文學に携はるべきものは、前代の如く僧侶隱士の輩に限られ、只わづかに和歌や連歌などに幾多の堂上家や武人を見るのみであつた。一般社會の文學趣味などは全く干からびてゐたのである。文學趣味の干からびた世の中に、少數の文學嗜好者が、自分の消閑の爲か、さうでなければ緒餘の業として文學に携はつたに過ぎないのである。かゝる有様で、何で文學が榮えようぞ、大文學が現はれようぞ。義滿・義政の頃には一般の美術工藝は榮えたけれども、文學はいまだその緒につく暇がなかつた。ましてや嘉吉・應仁以後の事はいふまでもない。かくてこの時代は、全然文學が衰境にあつたのである。されども物は窮すれば通ずるのが自然の法則である。文學も一般に形式の煩はしい歴史的のものは衰へてしまつたが、何等の拘束もなく歴史もない全く自由なもの、形式の簡單なものが、新たに現はれた。連歌の如き、謠曲の如き、狂言の如きは即ちそれである。御伽草子も亦その類か。併しこれらの文學が、それ自身では未だ大文學でないことは勿論である。而もいづれも江戸時代に入つて大に發展して、大文學となるのである。江戸時代に榮える俳諧もその源はこの連歌に發する、淨瑠璃や脚本もその本は謠曲（狂言から出る、小説もこの御伽草子の成長したものといへばいはれる。殊に京都五山の僧徒によつて研究された漢學は、やがては江戸時代の全道徳を支配する大勢力となるのである。かくてこの時代の文學は、冬枯の野邊のさまとでもいはいはうか、古風な文學こそは全く散りはてたれども、新文學の萌芽は既に小春日和に養はれつゝあつたのである。）

是等の文學を通じて、如何なる思潮が認められるかは最早いふまい、時代の忽劇を知り、風俗好尚を知り、宗教を知るものは、既に合點してゐることであらうと信ずるからである。唯一つ茲に注意すべきは、これらの文學が、多くは僧侶隱士の手に成つたといへ、世を嘲り、人を諷し、教訓する性質を帯びてゐるものゝ多いこと、平民的であることとである。その中にも平民的であるといふことは、歴史を離れた、創始的な、幼稚な文學としては、當然の結果であらう。文體といひ、用語といひ、語法といひ、思想といひ、全く何等の拘束をも受けてゐず自由なものである。

平安時代の文學を見て俄に江戸時代の文學を見たものは、全く異郷に入る如く、あまりにその相違の著しいのに吃驚するであらう。而も平安時代と江戸時代とは我が文學の二大盛時である。その間に鎌倉時代があるが、未だ全く二大盛時の相違を

説明するに足らない。鎌倉時代の文學も革新的ではあるが、未だ江戸時代の平民文學をうみ出すまでに平民的ではなかつた。加之なほ一面には平安文學の潮流が一時滔々たる勢で一部の社會を浸してゐたのである。室町文學は衰へてゐたとはいへ、これなしでは江戸文學は到底説明せられない。室町文學あつての江戸文學である。室町文學の絶對的價値はよし小くても、比較的價値は看過することは出來ぬ。國文學史を講究するものは須らく留意せねばならぬ。

第二章 兼好と徒然草

兼好は後宇多天皇の御宇弘安六年(一九四三)に生れて後村上天皇の正平五年二月に六十八歳で死んだ人である。その家は卜部を姓とし代々神道を以て官に仕へた家柄であるから、兼好も自然にその教育をうけたことはいふまでもないが、後には儒學を修め、老莊の道をも究め、遂に佛門に入つた。初は京都の吉田に住んで吉田兼好と呼び、伏見、後伏見、後二條、花園の四朝に事へて瀧口藏人、兵衛等の官に任せられ、やがては後宇多院の仙洞に事へて北面に伺候した。かゝるうちに、伊賀守橋成忠の女で中宮に奉仕してゐる小辨といふ女房に關係したことが世間にもれて、都にも居なく、東國に下り、武州金澤に僑居したこともあつたが、屢々法皇の御召があつたので、再び仙洞に奉仕することゝなつた。然るに、その上京以前に小辨は既に亡き人の數に入り、その上法皇までも程なく崩御あらせられたから、兼好も無常の感に堪へて遂に出家を遂げ、俗名のまゝを音讀して兼好法師とは名乗つた。この時に兼好は四十歳であつた。それからといふものは、諸國を遍歴して、此處に住み、彼處に移つて、ひたすら風月の樂に年月を送つた。ある時信濃國木曾の御坂のあたりに庵を結んで住んでゐたともあつたが、國守が供のもの、大勢召しつれて鷹狩に來たのがうるさく、こゝもまたうき世なりけりよそながら

おもひしまゝの山里もがな

と詠じてまた都に還つた。仁和寺の邊の雙が岡に草庵を結んで、そのほとりに櫻樹をうゑて、

ちぎりおく花とならびの岡のうへに

あはれいく世の春をすぐさん

と讀んだのもその頃の事である。爾來大抵は此處に住んでゐたので、世に雙が岡の法師などと呼ばれるが、伊賀の密乘院に住んだこともあり、播磨の阿部野の小庵に住

んだこともある。兼好が臨終の際には、北朝の崇光院から典薬頭和氣清元を遣はされて服薬を勧められたが、固く辭退して受けなかつたといふ。

兼好が和歌の巧者として當時重きをなしたことは、和歌の四天王の一人に數へられたのでもわかる。そのいひまはしが至極自然で、わづらはしい技巧のないのが特色らしい。三光院實枝の『崑玉集』には兼好と頓阿と平生歌を詠みしに、景色の歌は頓阿まさりしかど、まことの佛心無常を詠みしは兼好にしくものあるべからずといつてゐる。その家集の今に傳はつてゐるものに『兼好法師集』といふのがある。『風雅集』『新千載』『新拾遺』『新後拾遺』『新讀古今』等の勅撰歌集に選び入れられた歌も少くない。

されども兼好の兼好たる文學上の地位は、和歌の四天王とうたはれたからではない、その隨筆に『徒然草』があるからである。この書は無論兼好が一時に書き上げたものではない、見たり聞いたり感じたりしたことを折々に書きつけたのが、草庵の壁などに貼られて残つてゐたのを、曾て召仕はれた少年が形見として所持してゐた草稿など、共に兼好の歿後に一書に編成したもので、最初から今あるやうな章段の順序で出来てゐたのではない。全篇は長短の文二百四十餘段から成つてゐるが、或は儒者の口吻をまねて道德上の訓戒をのべるかとおもへば、公事有職の事を記し、或は佛者の説を祖述して世の無常を説くかと思つて見ると、和歌を論じ、男女の愛のしほらしさをいふ。すなはち一定した主義も主張もなく、かれ自身の通曉するかぎり神儒老莊佛の道でも、和歌でも、有職故實でも、戀愛でも、なんでもかでも、とりとめもなくやたらに書きつけてあるのである。それで前にいうたことゝ後にいふことゝに矛盾の説も見える。

わが身のやんごとなからんにも、まして數ならざらんにも、子といふもの、なくてありなん(第六段)

というて、子どもの無いのを望むかとおもふと、

あるあらえびすのおそろしげなるが、かたへにあひて、御子はおはすやと問ひしに、ひとりも持ち侍らずと答へしかば、さては物のあはれは知りたまはじ、情なき御心にぞものしたまふらんといとおそろし。子ゆゑにこそ萬のあはれは思ひ知らるれといひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝるものの心に慈悲ありなんや(第四百四十二段)

というて、子どもの愛情の結構なことを説いてゐる。また

よろづにいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうくしく、玉の卮をこなきこ

こちぞすべき。露霜にしほたれて所定めすまどひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに心のいとまなく、あふさきるさに思ひみだれ、さるはひとりねがちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとして、ひたすらにたはれたる方にはあらで、女にたはやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。(第三段) というて、戀の趣あることをいふかと見ると、

みづから戒めて、恐るべく、慎むべきは、このまどひなり(第九段)

というて、色慾のおそるべく慎しむべきことを戒めてゐる。その外、酒の害をのべたとおふと、すぐそのあとで酒の徳を説く。かやうにその説くところに矛盾のあるのが一寸と不思議におもはれるが、法師の身分で子どもの愛情を説いたり、戀の趣を説いたりするのが、更にをかしい。そこで兼好の性行論が起る。

ある史家はいうてゐる。兼好の性行は衆説まち／＼で褒貶半ばしてゐる。『徒然草』の文を以て推すも、時としては清廉無垢、高節を持して一點の塵を容れざる如く、時としては瀟洒磊落、汚濁もなほ之を辭せざる風がある。元來隨筆は殊に能く作者を表はすものであるが、『徒然草』に至つてはさうでない、人をしてその人物の如何を想像するに迷はせる。もと神官の家に生れ、後に儒道を學び、老莊の道に入り、遂に佛門に

歸した人であるから、雜駁の人で、長明ほどの節操もなく、西行ほど天地に融通することの出来なかつたと見える。『太平記』に兼好が高師直の爲に鹽谷高貞の室への艶書を代作した事が見えるが、洒々落々たる兼好の事だから依頼によつては書くまいものでもない。また或論者は、一切の矛盾をも何をも、すべて兼好の趣味から書いたものである、兼好は趣味論者であるともいうてゐる。また或史家は平安朝以來の舊思想はなほこの時に至つても偉大なる勢力があつて、平淡曠懷のこの僧をして、なほ且つ感情主義の羈絆を脱することを得させないというて、人生を達觀し時代を超絶してその好むところに従つて世を褒貶するけれども、また人間通有の情緒を斷つに難く、おのづから一味忘るべからざる温情があるのであるといふ。

いづれの批評が當つてゐるのであらうか。最初の論は芳賀博士や林文學士の文學史で見る説であるが、雜駁な事を書いたから雜駁な人であるといふのは、何が雜駁なといふのか明瞭でない。趣味が雜駁なといふのなら、第二の論者の趣味論とも一致するかに思はれるが、長明ほどの節操もない西行ほど天地に融通することの出来なかつたといふ所を見ると、兼好は遁世はしたものゝ遁世しきれなかつた、この世の中に未練のあるものであつた、それでいふことが出世間的な事もあり世間的な事も

あるのであるといふことゝ見える。さりとは皮相の見解ではあるまいか、あまりに物の形骸に囚はれた説ではあるまいか。耽溺小説を書くものは耽溺家で、戀愛小説を書くものは戀愛に憧かるゝ人であるといふにおなじで、吾人は與せぬ。第二の論は内海文學士の見解で、一生面を開いたうまい見方ではあるが、『徒然草』の記事がすべて兼好の趣味から割り出して書いたもの、兼好は趣味論者であるとするのは、いかでであらうか。いかにも『徒然草』には兼好の趣味をのべたと思はれる事項が多い、配所の月罪なくて見んといひ、家々のつきづくしきといひ、ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするといひ、しばし旅立ちたるといひ、一々あげると兼好の趣味をのべたと想はれる事項はこの書の大半にも達するであらう。中にも、花は盛りには月に限なきをのみ見るものかはといひて、ものゝはじめをはりの趣が深いことを叙べたなどは、大なる趣味論というてもよい。されども、人のなきあとはかり悲しきはなしと書きいでた第三十段の如き、萬事はみな非なり、言ふに足らず願ふに足らずと結論せる第三十八段の如き、第四十九段、第五十八段、第五十九段、第六百八段の如き、あげ來たると趣味論とばかりでは合點が出來ぬ事項も多いやうである。よし是等の

をいふは、趣味論を解決出來るとしても、兼好を只いふは、趣味に富んだ人『徒然草』をいふは、趣味論をのべたものとして見るばかりでは、物足らぬやうな氣持がする。第三の論は故藤岡博士の意見で、平淡曠懷のこの僧も因襲の深い舊思想なる情緒主義から離れることが出來がたかつたといふので、生悟りの法師とするところは芳賀博士らの説と似てゐるが、新思想なる厭世主義と舊思想なる情緒主義と併存錯交するのがおもしろいというてゐる。これも亦吾人は満足して首肯することは出來かねる。

吾人の見るところでは、兼好は決して長明のやうに浮世に未練を残して煩悶してゐる人ではない。長明の『方丈記』にはその煩悶の心裡がありくくと映じてゐる。兼好の『徒然草』には更に自己の煩悶する様子が見えてゐない、寧ろ浮世の營みの愚かなることを説いて、名利に心を勞するものを嘲るごとく、叱咤するがごとき態度が見える。

人と生れたらんしるしには、いかにもして世をのがれん事こそあらまほしけれ。
ひとへに貪ることをつとめて、菩提におもむかざらんは、よろづの畜類にかはる所あるまじくや。(第五十八段)

これによつて見ると、兼好は嘗に自分が遁世して佛道を修めるだけでは満足しない、

世間の人もみな遁世して佛道を修めるのを理想として進まねばならぬ、佛道を修めずに慾ばかり渴いてゐるものは犬畜生にかはらないとまでいうてゐるのである。世の中の酸いも甘いも嚼みわけて見ると、この世の事に齷齪するのはつまらぬ事のかぎりである、この世を遁れて佛の道に入つて後世安樂を願ふのがよいといふのが兼好の理想で、兼好はこの理想の境界に逍遙して、更に人をもこの楽しい境界に入らせたいと思つてゐるのではあるまいか。かの洒々落落々として戀の趣などを説くところは、俗僧の口吻にも似たといへばいへるが、全體の氣分が違ふ。決して厭世主義を標榜しながら、なほ色戀の忘れがたくて、その樂にあこがれていふのではない。厭世家の眼から見ても赤い色は赤い、男女の戀も趣味のあるものである、この趣味を解せぬやうな男は物足らぬものであるというたまでゝある。されば

世の人の心をまどはす事、色慾にはしかず。人の心は愚なるものかな。にほひなどは假のものなるに、しばらく衣裳にたきものすと知りながら、えならぬにはほひには、必ず心ときめきするものなり。(第八段)

といひ、みづから戒めて恐るべく慎むべきは、このまどひなり」というて、戀は趣味のあるものおもしろいものではあるが、愚かなる迷ひだ、戒むべく恐るべく慎むべきものだといつてゐる。かのおもしろいといふのは趣味からいふので、戒しむべく恐るべく慎むべしといふのは主義からいふのである。世の中の酸いも甘いも嚼み分けた隠居があつて、色戀といふものはおもしろいものだ、併し恐ろしいものだから慎まねばならぬというたからとて、年にも似合はぬ矛盾したをいふ爺さんまだ色氣があるのだといはれようか。兼好が『徒然草』にいふところは、まづそれだ。節操のない生悟りの坊主であるから艶っぽい事を筆にするといふのではない、花を見て美しいから美しいといふのと變りはないのである。厭世家でありながら人間通有の情緒を斷つとが出来なくてかういふのではない、たゞ昔をかへりみておもしろかつたと思ふからおもしろいというたままでの事。おそろしいといふのは今の心もち、おもしろいといふのは昔の心もち。たゞそれだけのことである、深い考があつていふのではない。酒の害をあげたり徳をのべたりするのも、子どもの情を説き子孫の無いことを望むのも、皆おなじ行き方である。そのをり／＼の感じ／＼をとりとめなく書きつけたに過ぎない。昔の心もちもあれば、今のもある。その智識も神儒老莊佛に亘るところから、その書くこともあれやこれやにわたる。これを見て兼好を墮落坊主のやうにいふのは酷だ、皮相の見解たるを免れぬ。世を厭ひながら情緒が斷てないの

だといふのも當らない。趣味論といふことを以て一切を解決し去らうとするのも、あまりにおほざつばの議論である。無常厭世は兼好の今の主義である、理想である、その趣味論も多くはこの立場から出てゐる。配所の月を罪なくて見るといひ、見ぬ世の人を友とするといひ、はじめをはりの趣味といひ、いづれも寂しいとか、あつさりしてゐるとか、しつとりしてゐるとか、ぼうつとしてゐるとか、そゝろにとか、何となくとかといふやうな心もちの趣味で、世ばなれた趣のあるものである。要するに『徒然草』一篇を通じて流れてゐる思潮は厭世主義であることが認められるのである。

『徒然草』の文章は『枕草紙』などを學んだ跡が見える。それで中には平安朝の文章そのまゝのものも見える。併し大體は兼好一流の文章で、中古文に漢文調をとりいれたやうなものである。そして叙事の進行法がいかに無造作で、いかに自然で、苦心の跡がない。『方文記』のやうな衒氣がない、嫌味がない。隨所に比喻を用ひ、例を引く、その用ひ方引き方がいかにもうまい。讀者を知らずく、引きこんでしまふ。文章からいうても、この書は我國文學史中の傑作である。

されば後世この書をもてはやすもの多く、註釋の多いことも、文章をまね、題號を似せたものゝ多く世に出たことも、大に理由あることゝいはねばならぬ。

第二章 和歌

室町時代の歌壇は、鎌倉時代の趨勢をばおしつゝけて、ますます衰微の域に進んだ。されども建武中興以後百年ばかりの間を見ると、勅撰集の沙汰は頗る頻繁で、花園上皇御自撰の『風雅集』を始として、『新千載集』『新拾遺集』『新後拾遺集』『新續古今集』の五集がある。それ故、當時の歌壇は量からいへば決して衰微の状態にあるとはいはれないのであるが、實質が甚だ貧しい、大方の歌はたゞ古歌を摸倣したもののみで、殆ど見るべきものがないのである。これらの中でも、『風雅集』は花園上皇が輕浮なる當時の歌風を厭はせられ、『新古今』の古體にかへさうとして、貞和二年(二〇〇六)に集められたものである。その序の中に、

近き世となりて四方のことわざすたれ、誠すくなく、僞り多くなり、にければ、ひとへにざれたる姿たくみなる心ばせをむねとして、古の風は残らず。或は古き言葉をぬすみ、僞れるさまをつくるひなして、更にその本にまどふとある、いかにも時弊を洞見せられて、御自撰なされた聖慮の程も察せられることではあるが、これまた實質はこれに伴はず、依然として時弊に囚はれてゐる歌が多い。

もしたまへ、目に立つものありとすれば、それは例の京極家風の怪奇なるものがあるばかりである。されば當時の歌人は早くもかの『玉葉集』と共にこれを排斥したといふが、強ち二條家の流派を汲めるものゝ偏見ばかりではない。新機軸を出さうとして撰集された『風雅集』ですらかくのとほりであるから、他は大むね察すべしである。

これらの勅撰集の外に准勅撰を以て目せられた『新葉集』といふのがある。これは醍醐の後龜山天皇の弘和元年(二〇四一)に宗良親王の撰定したもので、専ら南朝方の歌を集めたものである。流石に南朝の社稷を恢復しようとして、雄壯の調が多く、慷慨の氣に充つ。聲調の稀に調はざるものがあつて、流麗典雅の趣に乏しい觀はあるが、『新古今集』以來の傑作たることは疑がない。

さて和歌の勅撰といふことは、延喜の昔に始まつてから、朝廷の盛衰、國家の治亂にも關係なく、連綿として繼續し來たにも拘はらず、『新續古今集』を殿りとしてその最後を告ぐるに至つた。時は正に後花園天皇の永享十年(二〇九八)で、延喜五年を距ること五百三十有四年、歌集の數は二十一世にこれを二十一代集といふ。二十一代集といへば、その歌の數は實に夥しいものであるが、過半は古人の糟粕を嘗めたもので、新しきものなく、生氣もない。ある極端なる論者は、三十一音を以て出來てゐる和歌は到底發展の見込がないものである、三十一音をいかに錯列してもその數は有限であるのに、その中にはまた意味を成さぬものも出來るから歌となり得る數はそれだけ減する、その中で名歌を得ようとするのは更に難いことであるといふ。これが紙上の空論たることは無論であるが、二十一代集を見ると、實際に名歌の得がたいことが感ぜられずにはゐられない。『古今』の歌は難が無いといふが、その思想も想像も感情も亦その修辭法も、たゞくくりかへされ、使ひへらされた爲か、吾人にとつては餘りに淡泊過ぎて、嚼みしめて見るやうな甘味が認められない。『新古今』の歌は技巧に富むといふが、要するに修辭上のうまさを感じられるのみで、内容に物足らないやうな氣がする。勅撰歌集の中の傑作ですらかうであるから、その他これに及ばざる歌集、わけでも鎌倉時代以後に成つた勅撰歌集の出來榮えは殆ど論するまでもないのである。されどもこの和歌の勅撰といふことが、いかに當時の歌人の名譽心をそつたか、いかに歌道の奨励となつたか。平忠度が都を落ちゆく身で、俊成の門を叩いたのも、勅撰の沙汰を耳にしたからである。浮世に何一つ望のない身でありながら、鴨長明も一首の和歌が選に入つたのを喜んで、いたく名譽の事とした。勅撰の廢れたのは一

つには歌道の衰微した自然の結果であるとはいへ、これが爲に歌道は更に獎勵の道を失つたのである。衰微した歌道は更に衰微するやうな運命になつたのである。況や秘事口傳の弊風は和歌の精神を忘れさせて無用の穿鑿に従はしめ、國家の忽劇は人心を驅つて動搖の域にあらしめたので、和歌は衰へまいとしても衰へぬわけには行かなかつた。かくて室町時代末葉の歌壇には見るべきものがない。後柏原天皇の『柏玉集』藤原政爲の『碧玉集』三條西實隆の『雪玉集』の如きは、當代の終りを飾る歌集で、世に三玉集と呼ばれて一時もてはやされたものであるが、何等の長所を認めることが出来ない。

歌壇の大勢はかくの如くであるが、その衰へた中でも、世に名の知られた歌人は一人二人ばかりではない。まづこの時代の初期に於いては法師頼阿(一九五三—二〇三六)の如きすなはちその一人で、而も最も優れた一人である。頼阿について兼好、兼好について慶運、淨辨、何れもその名が聞えて、當時の世に和歌の四天王と呼ばれた。頼阿は藤原爲世を師とただけに、思想こそは舊套を脱しないが、技巧に富み、聲調流麗、清素にして、氣韻のある歌が多い。これを師の爲世に比するに、所謂藍より出で、藍よりも青いものか。家集を『草庵集』といふ、外に『井蛙抄』、『井蛙眼目』、『愚問賢註』などいへる歌論の著書がある。頼阿の歌は世に草庵體と呼ばれて、江戸時代に古學派の歌人が勃興するに至るまでは、二條派の歌人の規範としたものである。

頼阿と稍、時を同じうして而も多少の特色を具へてゐるものは宗良親王(一九七二—二〇四五)である。親王は後醍醐天皇の皇子で、南朝の爲に諸方に轉戦し、もとより歌人を以て自任する人ではなかつた。それ故、その歌に修辭上の技巧などが無いことは勿論であるが、よくその肺肝を吐露して悲憤の情の溢るゝものがある。時流の歌のうはべばかりが美しく、内容の貧しいのに比べて見ると、一異彩といはねばならぬ。その家集の『李花集』は、その撰定にかゝる『新葉集』と共に、斯界の珍である。

その後武人の今川貞世(了俊)(一九八五—二〇八〇)東福寺の僧正徹(徹書記)(二〇四〇—二一一八)冷泉の歌風を學んでその名高く、頼阿の曾孫堯孝(二〇五一—二一一五)も盛名があつたけれど、さしたる特色のあつたのではない。武人太田持資(法名道灌)(二一〇五—二一四六)の出づるに及んで、その聲調或は雄壯、或は清新、當時に卓越するところがあつたけれど、武人の事として歌壇に馳逐して一世を動かすに至らなかつた。その集を『慕景集』といひて、後世その歌體を激賞するものは、道灌をば將軍實朝の風骨を得たものというてゐる。

道灌と殆ど前後して歌壇に名を得たのが東下野守常縁(二〇六一—二一五四)である。常縁は堯孝の弟子であるから、二條派の流を汲んだものであるが、今川了俊も飛鳥井雅世も僧正徹も父の交友で、それらからも、いろいろの感化教訓を得てゐる人である。籍を武人に列するなどは頗る道灌に似てゐるけれど、歌壇に及ぼせる影響は同日の談でない。常縁は歌をよんでその采邑をもとりかへした、後土御門天皇に召されて和歌の道をも説いた。准后藤原政家、右大臣藤原公敦、足利將軍義尚、連歌師で有名な宗祇法師もその教をうけた。家集を『常縁集』といひ、宗祇と贈答せるものを集めて『東野州消息』といふ。別に『東野州聞書』といふのは歌道に關する雜録である。

常縁が武人の身で歌界に重きをなしたことは此のとほりである。されどもその歌はさまざまに巧みなものではない、多少真情のこもつてゐるといふ外、聲調も平板で、著想も陳套である。それ故おもに常縁が歌壇に英名を馳せたといふのも、作歌の技術が時流に抽んでゐるからではなく、古今傳授の如き歌道の舊儀典禮に通じてゐたからであらう。

そも、歌道の師傳といふことは遠く平安時代の未に始まつたことで、鎌倉時代に及んでは所謂秘事口傳といふものとなつて漸く弊害を見るに至つたが、この頃となつて更に古今傳授といふのを生ずるに至つた。三島三木などいふて、古歌に見えてゐる語を捉へて、それにわけもない意義をつけ、古今傳授と唱へて、文明三年十二月に常縁が弟子の宗祇法師に傳へたのが始である。平安時代の歌論でさへ往々岐路に馳せて歌道に益するところは幾何もなかつたのに、たわいもない秘事口傳となり、古今傳授となつては、歌道を蠱毒するのみで秋毫の利益すらないのである。歌道に志すものをして、いはれのない束縛に、容易くその門戸の窺ひがたい想をなさしめ、隨つて歌道を斷念させる。勿論、かゝるいはれのない傳授などが尊重されるのは、既に歌道が衰微してその傳授のいはれない事を看破する卓見者のないのに由るのであるが、かういふ次第で、更にいよく衰微に赴く結果を生ぜざるを得ない。常縁に始まつた古今傳授は、常縁自身別段に歌道を蠱毒しようとは企つたでないことは明かであるものゝ、衰へてゐる歌道をますます衰へさせる一因とならせたのは遺憾といはねばならぬ。この古今傳授は、宗祇から牡丹花宵柏に傳へたのを堺傳授といひ、宵柏から奈良の饅頭屋(林宗二)に傳へたのを奈良傳授といひ、又宗祇から三條西實隆に傳はり、子孫三代相傳へて、後更に武人細川幽齋に傳へたのを二條家傳といひ、由緒の最も正しいものとした。慶長五年に幽齋大坂の兵に圍まれて丹後の田邊城に籠城した時

幽齋が戦死したならば折角の傳授も廢絶せんことを歎かれ、後陽成天皇特に勅使を田邊の大坂兵の許に立てられて包圍を解かしめられたことがある。當時の藝苑に人のなかつたこと、随つて和歌の振はなかつたことが察せられるであらう。

常縁から少しおくれて冷泉政爲(二一〇七—二一八三)後柏原天皇(二一二四—二一八六)三條西實隆(二一一五—二一九三)等最も知られた。政爲に『碧玉集』後柏原天皇に『柏玉集』實隆に『雪玉集』といふ家集があつて世に三玉集と呼ばれて珍重されたことは前に陳べたとほりである。その外、武人武田信玄に『信玄百首』があり、北條氏康には『武藏野紀行』があり、毛利元就には『春霞集』があつて、世に傳はつてゐる。されども何れも矮人觀場の戯技に過ぎない。この時代の範圍に於いては、和歌は全く凋落の状態にのみあつて、一陽の春に逢ふであらうか、微光すらも未だ認めることが出来なかつた。

第四章 雜史と軍記物語

南北兩朝の正潤は一見頗る明瞭の問題である。平穩なる世の海に逆まく波瀾を起し、時の天子に稱をついたのは足利尊氏である。北朝の天子は逆賊尊氏が名分の立たない苦しまぎれに立てたに過ぎない。たゞそれだけの事である。されども當時分争の渦中にある者は、いろ／＼の事情に因はれ、利害にくらまされて、さう容易に解決は出来ないのである。この時にあたつて、准后北畠親房は、これが解決を與へよう、名分の存する所を明かにしようとして、『神皇正統記』を書いた。親房(一九五—二〇一四)は南朝の忠臣で、和漢の學に通じ佛典にさへ暗からで、時の博識藤原宣房源定房と共に後の三房といはれた人である。楠、新田の諸將が戦死の後、戈を把つて四方に轉戦をもした。戰場に立つひま／＼には、筆を執つて、『職原抄』『元々集』『二十一社記』等の有益なる著述をもした。『正統記』も亦兵馬倥傯の際にあつて、皇統兩立して正潤の分忘れられ、これが爲に人々の方向をあやまるものあるを憤慨して著はしたのである。上は神代から下は後村上天皇の興國の初に至るまでの歴史を叙し、我が國體の他邦に異なる所以を明かにし、神器の所在を正して南朝の正統であることを説く。その説くところ公明正大、能く人をして首肯せしめる。たゞ天地の開闢を説くに佛説に基き、成敗を論ずるに佛神の利驗天道の順環に歸するなどは、物足らぬ心地がして遺憾に思はれぬでもないが、是亦時代精神の然らしめる所で、ひとり著者のみの罪ではない。新井白石の『讀史餘論』は世にその史筆の公正犀利なるを稱するもの、

而も『正統記』に負ふところの多きをおもはゞ、この書の史論としての價値の大なる事が察せられるであらう。文章は和文の流暢なるに漢文の雄健なるを加味して、見るべきものがあるが、章句が往々長すぎて、意味の晦澁なるところがあるやうである。『吉野拾遺』といふのも亦南朝の侍臣の作、吉野の朝廷に關する種々の逸事を記したるもの。『櫻雲記』といふのも亦吉野の皇居の事を記す。これはた南朝の遺臣の作ともはる。南朝の臣は流石に大義名分に明かなるもの、その筆にするとところを見ると、いづれも同情の感を禁じ得ない。されども、これらは文學的價値に於いて、決して大なるものではない。

これらに比べると、おなじ雜史でも、『増鏡』は文學的價値の稍大なる者である。その記すところは、今は絶えた『彌世繼』の後をうけて、後鳥羽天皇の御即位より後醍醐天皇の建武中興に至るまでの歴史である。體裁などすべて『今鏡』に同じく、百餘歳なる老尼の物語る體にして、大小の事實を客觀的に記し、「おどろの下」「新島守」「ふち衣」等の十七篇より成る。文章は中古體に近く、流暢典雅、時に自他の混同し、主客の紛れやすきふしがないでもない。『大鏡』の雅健なる、『水鏡』の清楚なるに比べて、或は一籌を輸するか

は、『今鏡』を加へて四鏡といふべきである。『水鏡』の神武天皇から仁明天皇に至る、『大鏡』の文徳天皇から後一條天皇に至る、『今鏡』の後一條天皇から高倉天皇に至る、『増鏡』の後鳥羽天皇から後醍醐天皇の建武中興に至る、この四鏡を併せ見る時は、假名の歴史で、神武天皇から後醍醐天皇の御代までの事蹟を大略窺ふことが出来るからである。但し、高倉、安徳二帝の記事の缺けてゐるのは、『彌世繼』の散佚したからで、安永の頃の女流文學者で荒木田麗といふものが、『月の行方』を著はして之を補うた。麗には更に『池の藻屑』といふ著書があつて、後醍醐天皇から後陽成天皇までの事蹟を書きつけた。『増鏡』の著者は判明しない、從來は一條冬良といふ説もあつたが、今は採らぬ。後醍醐天皇の隱岐から還幸された事を記して、

昔だに沈むうらみを隱岐の海に浪立ちかへる今ぞうれしき
とあるのを見ると、その頃まもなく出來たのかとも想はれる。

『太平記』は『増鏡』に比べると更に大作である、否室町文學を飾る最大著述である。全篇四十、『平家物語』に倣つて、文保二年（一九七八）後醍醐天皇御即位の頃より後村上天皇の正平二十二年（二〇二七）まで、およそ五十年間ばかりに於ける南北兩朝分立の顛末、諸所の戰亂、忠臣勇士の物語等を記したものである。併し『太平記』は軍記物語である。

その土臺とせる史的事實に誤謬もあり、わざと潤色し誇張したところもある事は勿論である。その文章が、印象の強い當時の俗語・術語・殊語を用ひて書きあらはしてある事も亦勿論である。軍記物語が通じてあるやうな特質は、この『太平記』の上にもすべて見られるのである。加之、この『太平記』の文章は、『平家物語』や『盛衰記』に比べて、漢語を用ひること更に多く、文格もまた大に漢文調を加へ、絢爛華麗を極めてゐる。『太平記』を單に文章として見る時は、古今之に比すべきものは幾何もないかも知れぬ。然るに、『太平記』を読んだ後の吾人の心もちは、『平家物語』を読んだ後のやうな感興を起さない。世の評家のいふ如く『平家』と『太平記』とは軍記物語の雙璧とも見るべきものであるが、この二書を比べる時は吾人は少からぬ徑庭のあるを覺ゆる。

『平家物語』に描くところも、『太平記』に寫すところも共に盛衰興亡の顛末ではあるけれど、之を全體として見るも、之を個々の章段について見るも、『太平記』には『平家』ほどの詩味が無い、全體は散文的である、各章も散文的の事柄が多い。兒島高德の題詩や、楠父子の訣別や、一宮の御息所の事や、勾當内侍の事や、なにやかやと、一々個々の事件を拾ひいで、いふならば、詩材も決して少ないとはいへまいが、全篇三百五十餘項の事件に比べると、世も『平家』の豊富なるには及ばない。かく『太平記』は全體に於いて詩味がなく、各章に於いて詩材が乏しいといふのは、當然の結果といはねばならぬ。ましてや『太平記』にはあまりに戦争の記事が多い。いかに文章が巧に描かれ

てあつても、戦争の記事はどこまでも戦争の記事である、あまりに回を重ねられては、あくどいといふ感も生ぜざるを得ぬ。既にかくある上に、戦争の記事ばかりは、搗て加へて千篇一律に成り易い傾向がある。これも亦『平家』に及ばぬ一理由であらう。況や『平家』には中心思想ともいふべき無常觀があつて、すべての事件は皆これに歸趨し集中されるやうなところがあつたが、『太平記』には何等の中心思想といふべき者が無い。勿論儒佛二教の思想は、『太平記』にも全篇の到るところにあらはれてゐる、而もそれが『平家』にいふやうな、中心思想となつて全體を引きしめてゐるのではない。この全體を引きしめてゐないこと、いひかへると、記事が散漫であるといふことも、『太平記』の讀者をして『平家』ほどの感興を喚びおこさせない所以である。

『太平記』の作者は詳かでない。舊説には叡山の玄惠法師が後醍醐天皇の勅命によつて書き出したのを、後に來賢・智教・教圓・能鄰などいふ法師の書きついで大成したのであるといふが、もとより確證がない。然るに近年修史局での調査では、小島法師と

いふものゝ作なることを發見した。それは『洞院公定日記』に、

應安七年五月三日戊辰。傳聞去二十八九日之間、小島法師圓寂云々。是近日翫天下太平記作者也。凡雖卑賤之器、有名匠之聞、可謂無念也。

とあるに據る。そもく、小島法師とは如何なる人か。法名に小島といふ事はありさうにも思へない、吉田に居つた兼好を吉田法師といふ如き類かも知れぬ。兒島高德が隱遁して小島法師といはれたかといふ説もあれどもとより推測。要するに委しいことはわからぬのである。文學廢類の當時、和漢の學に通すること此の如く、佛教に委しきこと此の如く、特に叡山に關する記事の詳かなることを考へると、山法師の作であらうと想はれることだけは、疑のない推測であらう。

後世この書が持てはやされたことは『平家』をも凌駕するほどで、江戸時代には太平記讀と稱するものさへ出で、今日の講談師の起原をなした。随つて異本も多く、末書も少くない。

『義經記』と『曾我物語』は作者も年代も詳かでないが、蓋し當代の作であらう。『義經記』は義經一代の傳記を、『曾我物語』は曾我兄弟が敵討の始末を、いづれも小説的に敷衍潤色した所謂實録物である。義經の悲惨なる末路、曾我兄弟が潔い振舞材料の選擇として、は申分の無いものであるが、筆のこれに伴はざるは、如何にもさういふ。もし二書を比較したならば、『曾我物語』の方が聊か優るでもあらうか。

第五章 連歌

連歌の起源については、日本武尊と火焼の翁との「筑波」の詠を始とするのが通説で、現に筑波の道といへば連歌の義とする程であるが、實際にはそれより以前にもあつたもので、『記』紀にもそれが見えてゐる。それらの連歌は、「筑波」の詠に見るごとく、いづれも旋頭歌を上下の二句に分けて唱和したものである。短歌の上の句或は下の句を唱へかけて、下の句或は上の句で應へることは、『萬葉集』の八の卷に見えてゐる。尼と家持とが、佐保川の唱和が始である。いつの頃から斯く變つたものか、わからない。勅撰歌集には、『拾遺集』の雜の部に數首の連歌が見えてゐるが、勿論後の形式のもので、いまだ連歌の名はない。連歌といふ名が見えたのは、『金葉集』からである、而も當時の歌人は連歌を撰集の一部門として和歌と併載したことを非議したといふ。その頃までも連歌は猶ほ未だ騷壇に一個の地位を占めるに至らず、單に坐輿的遊戯文字として輕視されてゐたのである。さればその頃の連歌を見るに、いづれも一時の機智

滑稽を旨として、只修辭上の巧を弄するに過ぎなかつた。

かくて鎌倉時代に入り、定家家隆等のこれに携はる頃に及んで、その形式が一變し、五十韻百韻など稱して、短歌の上下の如き句を五十句或は百句と連續させることが行はれた。何等の韻をも踏んでないのに、五十韻百韻などいふところを見ると、支那の聯句から此の發展をなした事が察せられる。併しながら、支那の聯句は全體に一貫した思想があつて一大篇をなすに拘はらず、我が連歌は前後の長短二句に思想の關係があるのみで、一篇を通じてある思想がないばかりではなく、第三句は第一句に關係なく、第四句は第二句に關係なく、順次かくの如く一句隔たると何等の關係もなく、いはゞ五十韻百韻といふも數多の短歌が鎖の如く連つてゐるに過ぎない。されども、これを以前の連歌に比べると、思想の連鎖を以て展轉推移して一大長篇を成すところに面白味があるのである。殊に連歌を詠せるものは、『八雲御抄』に連歌をばあらぬやうに引きなし引きなし付くるなり、春にて久しく秋にて久しきは連歌せぬものゝ集りたる折の事なりなどというてある如く、努めて同工一體に陥らないやうにと注意したから、一篇の首尾が變化に富んで趣の多いものとなつた。されども、當時の連歌もなほいまだ全然舊套を脱することが出来ず、後世に所謂一面見渡しの去嫌ひ打越し景物の指合等に意を用ひることなく、單に長短二句の關係に注意するのみであつた。そして、その二句の關係も全く以前の連歌に異ならず、短歌の上下句といふが如きもので、未だ獨立に各句が二個の思想を表はすものではない。連歌を詠ずるものもまた大むね通常の歌人で、餘興的に翫ぶのみであつたから、連歌の騷壇に於ける地位は、依然として遙かに和歌の下にあつた。

當時の連歌には、上代の連歌の如く機智滑稽を尙ぶものと、常の和歌の如く優美典麗を主とするものとの二派があつた。優美典麗を主とするものを柿本衆といひ、機智滑稽を尙ぶものを栗本衆と呼び、是等を別座に分けて有心の座無心の座とも呼んだ。されども、有心の連歌に携はるものは大抵和歌の名人として世に聞こえたる定家家隆等を始とし、土御門順徳の二上皇や爲家爲氏等の如き人々であつたから、無心にも藤原宗行光親などの名手はあつたが、間もなく優美なるものが勝を占めて、滑稽なるものは一時その跡を潜めるに至つた。

これは鎌倉時代もやうく、末葉に及び、和歌が秘鑰の中に鎖されて容易に窺ふことが出来なくなつた時である。それ故、所謂地下の輩で文學に志のあるものどもは、多く連歌道に身を投じた。地方の民百姓までも争うて之を弄んだ。室町時代にな

つては尙更に盛になつた。當代文學の中の最も盛んなるものといへば、たゞちに連歌といはれるまでに流行した。蓋し、和歌の秘事口傳といふ事はいよ／＼烈しくなつてその道に入るを禁じ、和歌集を勅撰する事の廢れたのは歌人の功名心を鈍らせなどして、人は皆争うて連歌に赴いたのである。かの『金葉集』に連歌の部門を設けたことを譏つたり、和歌の餘興として輕視したりなどした昔に比べて見ると、著しい發展といはねばならぬ。上は王公武人より下は市井の閑人、僧侶隱士の輩に至るまで、連歌を口にし筆にせざるものはない。連歌は常に騷壇に最好の地位を占領し得たばかりでなく、數百千年來貴族文學として覇權を恣にした和歌をも壓倒するに至つたのである。

連歌が斯く隆盛になつたのは時勢の然らしめたことは勿論であるが、關白二條良基の功勞も決して没却することは出來ない。良基(一九八〇—二〇四八)は北朝の光明・崇光・後光・嚴・後圓融の四朝に事へて牛車兵仗をまでも聽され三后にも准せられた人で、和歌は頓阿に師事し二條家の流を繼承してその蘊奥に達したといはれた。歌學に關する著書に『近來風體抄』、『愚問賢註』がある。『近來風體抄』は近世の和歌を批評したもの、『愚問賢註』は頓阿と歌道を論議して記録したものである。されども、良基の和歌も、良基の歌學に關する意見も、未だ良基として騷壇に重きをなさしめたものではない。良基が騷壇に重きをなすのは、その身が攝關の榮位にあつて連歌に携はり、救濟法師に師事して斯道の獎勵をなした事である。さなきだに世の嗜好を喚びつゝあつた連歌はかくの如き身分ある獎勵者を得て、いかに人の心をそゝつたことであらう。況や『菟玖波集』、『筑波問答』、『應安新式』のその手に出でたるに於いてをやである。『菟玖波集』二十卷は延文元年(二〇一六)の作にかゝり、上は筑波の詠より下は當代に至る古今の連歌を網羅したもので、玉石同架の觀はあるが、翌年勅撰に准せられた、連歌集の嚆矢である。『筑波問答』は連歌に關する意見を記したものの、『應安新式』はその師の救濟と議して舊來の式目に修正を加へ連歌の形式を一定したものである。その外、公事儀禮に關する著書は甚だ多いが、こゝには必要がないから擧げない。良基が『筑波問答』にのべてある説は、從來の歌學書にいうてあるのとは著しくちがふ。連歌は國政を輔くる効があるといひ、菩薩の因縁に協つてゐるなどいへる牽強附會の説はいはずもあれ、一篇の變化に著目して樂の序破急に喩へてある、發句の特に肝要なる所以を説いてある、脇句の心得を叙べてあるなど、いづれも卓見に富んだ説が多い。されども、惜しい事には、良基の企圖した一篇の變化は、森羅萬象の千變萬